

日本西洋史学会 第59回大会

報告要旨集

2009年6月13日(土)・14日(日)

専修大学

日本西洋史学会第59回大会

報告要旨集

2009年6月13日(土)・14日(日)

専修大学

専修大学図書館蔵 古典籍影印叢刊

●専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊刊行会編

人権宣言 フヴェロ作

B5判上製 一六頁+銅版画 九四五〇円
憲法制定国民議会が一七八九年八月二十六日に採択した序文と十七カ条からなるもので、その後の近代憲法成立に大きな影響を与えた。復刻版では、手彩色銅版画を配し、条文の全文を掲載している。

カリカチュアの歴史 J・M・ボワイエ・ブラン

上巻四一〇頁・下巻一九〇頁 上製函入 七九八〇〇円
パリの人民日誌出版社から一七九二年に、十九分冊で出版された二巻ものの著作。革命初期にフランス人が著した風刺戯画三十八葉を銅版画の口絵、折り込みに使用して所論を展開している。

フランス革命ポスター集 1-2.

A3判 上製函入(上・下巻) 二三三〇〇〇円
革命政府や各行政体からの国民への公式情報伝達は、演説、決議、議事録、法令、判決などを告示したポスター掲示の形式がとられた。その約七百枚を復刻、上・下巻にわけて刊行。

歴史におけるデモクラシーと集会

ピエール・スイリ、西川正雄、近江吉明監修
A5判 三三八頁 二九四〇円
歴史上の多様な「集会」「会合」を検証し、「民主主義」の再検討とその可能性の追究を試みる。シンポジウム参加者による討論内容も収録。

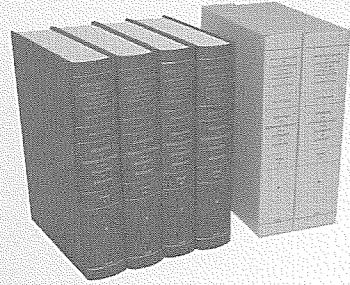
専修大学図書館所蔵

ミシェル・ベルンシュタイン文庫フランス革命史料集 [1]

ルイ16世の裁判に関する 国民公会議員の見解

—ミシェル・ベルンシュタイン文庫所蔵の冊子集—

〈全6巻〉



編集 専修大学社会知性開発研究センター
／歴史学研究センター

解題 遅塚 忠躬

全6巻(分売不可)／B5判上製／各巻函入
／総5,040頁

揃定価 231,000円(税込)

- 書誌学者M・ベルンシュタインが40数年の歳月をかけて収集した革命関連史料群(47,000点をこえる史料点数はフランス国立図書館に次ぐ規模)から選び複製刊行。
- 本書全6巻は、ルイ16世の罪科に関して、国民公会議員が演説と投票で表明しきれなかった見解を記録した冊子394点を収録。
- 末尾に、著者名索引(アルファベット順)を付し、冊子が収録された巻数と号数(巻内での順序)を時系列で配置。

専修大学出版局 東京都千代田区神田神保町3-8 TEL03-3263-4230 FAX03-3263-4288
※価格は税込 <http://www.sendai-sentyuri.co.jp/sup/>

大会プログラム

第1日目 6月13日 (土)

理 事 会	11:30-12:30	10号館10313教室
受 付 開 始	12:00	10号館1階アカデミーモール
大会記念講演	13:30-17:00	10号館3階10301教室 (中継 10302・10303教室)
		「世界史における暴力 — 記憶と記録 —」
総 会	17:00-17:30	10号館3階10301教室
懇 親 会	18:00-20:00	9号館5階アトリウム

第2日目 6月14日 (日)

受 付 開 始	9:00	10号館1階ホール
自由論題報告A~K	9:30-12:20	10号館2階・3階
小シンポジウム	14:00-17:00	10号館1階・2階
小シンポジウムⅠ	10号館1階10101教室	
		「前近代における政変・反乱と記憶」
小シンポジウムⅡ	10号館1階10102教室	
		「フランス革命と暴力」
小シンポジウムⅢ	10号館2階10201教室	
		「20世紀世界にみる人の移動と暴力」
小シンポジウムⅣ	10号館2階10202教室	
		「記憶としての戦争 — その形成や教科書叙述をめぐって —」

目 次

《大会記念講演》	
世界史における暴力 — 記憶と記録 —	1
趣旨説明	2
城戸 毅 (東京大学・名) 暴力の中世ヨーロッパ	4
油井大三郎 (東京女子大学) 近現代史の中の戦争とその記憶—連続と変容の相関—	5
板垣雄三 (東京大学・名) 〈反テロ戦争〉時代と歴史学	7
《自由論題報告》A~K	9
A. 古代・中世史部会 (10号館3階10302教室)	
9:30-10:10 戸田 聡 (一橋大学・兼) 司会：大月康弘 (一橋大学)	
カイサリアのエウセビオスのいわゆる「政治神学」をめぐって	10
10:10-10:50 西村昌洋 (京都大学・院) 司会：後藤篤子 (法政大学)	
テミスティオスの友と敵 — 四世紀のギリシア知識人とローマ帝国 —	11
11:00-11:40 津田拓郎 (東北学院大学・研究員) 司会：多田 哲 (中京大学)	
王国集会・教会会議とカロリング朝フランク王国の国制	12
11:40-12:20 小澤 実 (名古屋大学) 船を通じた共同体 司会：加納 修 (名古屋大学)	
— 紀元千年前後のスカンディナヴィア世界における共同体形成に関する一試論 —	13
B. 中世史部会 (10号館3階10303教室)	
10:10-10:50 船木順一 (青山学院大学・兼) 司会：甚野尚志 (早稲田大学)	
フランク国王に関する即位儀礼書の権標について	
— エルトマン祭式書における指輪・剣・王杖の初出を中心に —	14
11:00-11:40 成川岳大 (東京大学) 司会：甚野尚志 (早稲田大学)	
13世紀ノルウェー大司教区ニダロスと教皇庁間のコミュニケーション	
— 「辺境」との相互交渉の一側面 —	15
11:40-12:20 松本 涼 (京都大学・日本学術振興会特別研究員) 司会：熊野 聡 (名古屋大学・名)	
13世紀後半アイスランドの法改正と王権理念	16
C. 中・近世史部会1 (10号館3階10304教室)	
10:10-10:50 花房秀一 (青山学院大学・院) 司会：堀越宏一 (東洋大学)	
カペー期ノルマンディにおける王権と都市	
— 都市ルーアンの商業特権と紛争解決をめぐって —	17
11:00-11:40 横井川雄介 (関西大学) 司会：加藤 玄 (日本女子大学)	
13世紀後半から14世紀初頭のガスコーニュにおける上訴と請願	
— 現地勢力とプランタジネット家との封建誓約からの考察 —	18
11:40-12:20 白幡俊輔 (京都大学・院) 司会：北田葉子 (明治大学)	
15-16世紀における軍事技術の視点からのマキアヴェッリ再検討	
— 築城と火器をめぐるルネサンス人の議論 —	19

D. 中・近世史部会2 (10号館3階10315教室)		
10:10-10:50	原田晶子 (エアランゲン-ニュルンベルク大学・院)	司会: 森田安一 (日本女子大学)
都市と聖職者の共生 (Symbiose)		
— 帝国都市ニュルンベルクにおける主任司祭の役割 — ……………20		
11:00-11:40	渡邊裕一 (早稲田大学・院)	司会: 森田安一 (日本女子大学)
中近世アウクスブルクの木材供給 — 都市の森林所有とレヒ川の筏流し — ……………21		
11:40-12:20	高梨久美子 (お茶の水女子大学・院)	司会: 井内太郎 (広島大学)
駐在大使との往復書簡を通して見たカール5世の対イングランド政策		
— ウスタッシュ・シャピユイ大使を事例として — ……………22		
E. 近世史部会 (10号館3階10314教室)		
9:30-10:10	井上幸孝 (専修大学)	司会: 安村直己 (青山学院大学)
権原証書の史料的安全性について		
— 植民地時代メキシコ先住民村落における土地文書の編纂 — ……………23		
10:10-10:50	笠井俊和 (名古屋大学・院)	司会: 遠藤泰生 (東京大学)
17世紀末におけるボストンの西インド貿易 — 結節点としてのジャマイカ — ……………24		
11:00-11:40	後藤はる美 (国際基督教大学・研究員)	司会: 近藤和彦 (東京大学)
17世紀イングランドにおける法廷・統治・地域社会		
— 北ヨークシャ四季法廷大陪審員の事例を中心に — ……………25		
11:40-12:20	佐藤和哉 (日本女子大学)	司会: 坂下 史 (東京女子大学)
『物語集』の史料論的検討		
— 初期近代イングランドにおける「ポピュラー・カルチャー」の概念をめぐって ……………26		
F. 近代史部会1 (10号館3階10313教室)		
10:10-10:50	真保晶子 (明治学院大学・兼)	司会: 山口みどり (大東文化大学)
「5つの鏡」と「7つの機能」		
— イングランドの家具デザインにおける「女性」の表象と実像、1770-1850年 — ……………27		
11:00-11:40	石井三記 (名古屋大学)	司会: 松浦義弘 (成蹊大学)
フランス革命期の国王裁判における4回の表決の分析 — フランス法制史からの読み — ……………28		
11:40-12:20	岡本 明 (呉海上保安大学)	司会: 松嶋明男 (清泉女子大学)
ナポレオン権力樹立期前後のフランス・イタリア公共圏の成否……………29		
G. 近代史部会2 (10号館3階10309教室)		
9:30-10:10	田中 景 (東京経済大学)	司会: 田中きく代 (関西学院大学)
19世紀初頭アメリカの「ギリシア熱」— ギリシア独立支援運動の展開 — ……………30		
10:10-10:50	松浦真衣子 (千葉大学・院)	司会: 木村 真 (日本女子大学・兼)
アンドロス島の啓蒙知識人カイリスの教育活動……………31		
11:00-11:40	小池航太 (明治大学・院)	司会: 橋川健竜 (東京大学)
19世紀初頭のニューヨーク州における白人男子普通選挙の促進		
— 独立後の大西洋世界の連続性に関する一考察 — ……………32		
11:40-12:20	加藤鉄三 (立教大学・兼)	司会: 川島浩平 (武蔵大学)
初期カリフォルニア・ゴールドラッシュにおける日常生活と環境		
— 食生活、特に食肉獲得を中心に — ……………33		

H. 近代史部会3 (10号館2階10209教室)		
9:30-10:10	桑名映子 (聖心女子大学)	司会: 大津留厚 (神戸大学)
ハプスブルク帝国外務省のハンガリー人たち		
— アウスグライヒから第一次世界大戦まで — ……………34		
10:10-10:50	藤井欣子 (東京外国語大学・院)	司会: 小沢弘明 (千葉大学)
ハプスブルク帝国シュタイアーマルクの農村地域におけるリベラリズム		
— キリスト教農民同盟の活動を中心に — ……………35		
11:00-11:40	水野博子 (大阪大学)	司会: 小沢弘明 (千葉大学)
近代オーストリアの有志消防団協会史にみる自由主義の経験……………36		
11:40-12:20	米岡大輔 (大阪市立大学・院)	司会: 柴 宣弘 (東京大学)
レイス・ウル・ウレマーの任命権をめぐる争い		
— ハプスブルク帝国統治とボスニアのイスラーム — ……………37		
I. 近代史部会4 (10号館2階10213教室)		
9:30-10:10	尾崎俊輔 (パリ第1大学・院)	司会: 渡辺和行 (奈良女子大学)
フランス第三共和政前期における帰化手続き……………38		
10:10-10:50	中谷昌弘 (新潟大学・兼)	司会: 高尾千津子 (立教大学)
19世紀末から20世紀初頭にかけてのロシア・ユダヤ人のアメリカ移民について		
— ロシア側の視点から — ……………39		
11:00-11:40	村岡美奈 (Brandeis University・院)	司会: 佐藤唯行 (獨協大学)
日露戦争とユダヤ系アメリカ人銀行家ジェイコブ・シフーユダヤ史の視点から……………40		
11:40-12:20	森下嘉之 (東京大学・院)	司会: 相馬保夫 (東京外国語大学)
戦間期プラハにおける郊外住宅団地と住民層		
— 「家族用小住宅」の実現にみるチェコスロヴァキアの社会政策 — ……………41		
J. 現代史部会1 (10号館2階10214教室)		
9:30-10:10	仲津由希子 (東京大学・院)	司会: 小山 哲 (京都大学)
タデウシ・ジェドゥシツキの国家構想……………42		
10:10-10:50	北村 厚 (九州大学・研究員)	司会: 田嶋信雄 (成城大学)
戦間期ドイツ・オーストリアの地域的経済統合構想		
— リヒャルト・リードルを中心に — ……………43		
11:00-11:40	香坂直樹 (跡見学園女子大学・兼)	司会: 長與 進 (早稲田大学)
戦間期のスロヴァキアにおける「首都」論		
— F・ルッペルトのマルティン支持論を手掛かりに — ……………44		
11:40-12:20	吉野恭一郎 (上智大学・院)	司会: 川手圭一 (東京学芸大学)
ヴァイマル時代のジークフリート・クラカウアー — 個人主義的な危機克服の試み — ……………45		
K. 現代史部会2 (10号館2階10215教室)		
9:30-10:10	武井寛 (一橋大学・院)	司会: 樋口映美 (専修大学)
アメリカ合衆国における都市再開発と黒人コミュニティ		
— 20世紀中葉のシカゴ、ウエスト・サイドを中心に — ……………46		
10:10-10:50	大野あずさ (大阪経済大学)	司会: 岩崎佳孝 (立教大学・兼)
レッド・パワー・ムーヴメントとインディアン雇用優遇措置		
— コロラド州リトルトンにおける運動を事例として — ……………47		

11:00-11:40	高橋沙奈美 (北海道大学・院)	司会：池田嘉郎 (新潟国際情報大学)	
	1960年代以降のロシア・ナショナリズムと		
	A・タルコフスキーの『アンドレイ・ルブリョフ』		48
11:40-12:20	岡本宜高 (神戸大学・院)	司会：芝崎祐典 (武蔵大学・兼)	
	1970年代のイギリス外交と米欧関係 — ウィルソン政権期を中心に —		49
《小シンポジウムⅠ》(10号館1階10101教室)……………51			
前近代における政変・反乱と記憶			
	趣旨説明……………		52
	高橋秀樹 (新潟大学)		
	アルカイック期アテナイの党争と神話 — ペイシストラトス家の僭主政 —		53
	根津由喜夫 (金沢大学)		
	11世紀コンスタンティノーブルの都市騒乱 — 皇帝改廃劇のシナリオ —		54
	楠 義彦 (東北学院大学) 1536-37年イングランド北部諸州の乱とその歴史化		55
	清水和裕 (九州大学) ザイドの反乱 — 初期イスラーム共同体の『暴力』という記憶 —		56
《小シンポジウムⅡ》(10号館1階10102教室)……………57			
フランス革命と暴力			
	趣旨説明……………		58
	近江吉明 (専修大学) フランス革命初期のジャクリーと暴力		59
	小井高志 (立教大学) テルールの暴力		60
	山崎耕一 (一橋大学) サン＝ジュストにおける政治と暴力		61
《小シンポジウムⅢ》(10号館2階10201教室)……………63			
20世紀世界にみる人の移動と暴力			
	趣旨説明……………		64
	中野耕太郎 (大阪大学) 人種暴動とその後 — シカゴ人種関係委員会の秩序形成 —		65
	清水明子 (東京外国語大学・兼)		
	「クロアチア独立国」における住民追放 — ナチス・ドイツの広域秩序計画との接点 —		66
	川喜田敦子 (東京大学) 難民入植地の遮断された記憶		
	— 第二次世界大戦後の東欧からのドイツ系移住者と「暴力」の記憶 —		67
	佐藤清隆 (明治大学) 1984年の「ゴールデン・テンプル」襲撃と在英シク・コミュニティ		
	— 多民族都市レスターの事例から —		68
《小シンポジウムⅣ》(10号館2階10202教室)……………69			
記憶としての戦争 — その形成や教科書叙述をめぐって —			
	趣旨説明……………		70
	竹本真希子 (広島市立大学広島平和研究所) 第一次世界大戦とドイツの平和主義者		71
	近藤孝弘 (名古屋大学) ドイツにおける第二次世界大戦をマンガで教える試み		
	— グラフィック・ノベル <i>Die Entdeckung</i> と <i>Die Suche</i> が示す歴史教育の展開 —		72
	永原陽子 (東京外国語大学) 植民地戦争の記憶とヨーロッパにおける歴史認識		73
	鳥越泰彦 (麻布高等学校) 歴史教科書の中の第二次世界大戦		74
	会場案内図……………		75

※報告者・司会者・コメンテーターのご所属で専任以外は、大学名の後の・に続いて以下のよう
に略記されています。「名」=名誉教授、「兼」=兼任講師、「院」=博士課程など在学中

大会記念講演

6月13日(土) 13:30-17:00 10号館3階10301教室

世界史における暴力 — 記憶と記録 —

講 師：城戸 毅 (東京大学・名)

「暴力の中世ヨーロッパ」

油井大三郎 (東京女子大学)

「近現代史の中の戦争とその記憶

—連続と変容の相関—」

板垣雄三 (東京大学・名)

「〈反テロ戦争〉時代と歴史学」

司 会：村上俊介 (専修大学)

※記念講演は10号館3階10302・10303教室にも中継されます。

世界史における暴力 — 記憶と記録 —

現在、「新自由主義」の名の下に強引に推進されるいくつかの先進国の格差助長政策の下で、世界各地が、経済、宗教、民族、地域、性、若者、家庭などの場面での暴力行使の連鎖的発生を断ち切れなくなっている感が強い。とりわけ、自らの「文明」を絶対化する原理主義や覇権主義は、暴力を行使することをはばからない。他方で、世界史はこれまで戦争や革命、民衆蜂起や学生運動などの展開において多様な形態の無数の暴力を記録してきた。たとえば、20世紀は「戦争と革命の世紀」と記憶されている。

暴力を反権力・反権威の側面で捉えるのであれ、権力維持の視覚から見るのであれ、哲学や社会学が暴力を取り上げその意味を問うことに積極的であったのに比べて、歴史学のなかで暴力一般を問題にする研究は多くはなかった。例を挙げれば、ヨーロッパ中世の暴力に関するコロークのまとめが『中世における暴力と異議申し立て』(F.-O. Touati, et al., Paris, 1990)として出され、また、フランスのアナール派歴史学が恐怖や風聞によって発生する集団的暴力の実態を浮き彫りにし(ドリユモー)、魔女裁判などの集団暴力の現象携帯を地道に実証した研究(コルバン)など、さらにはアンシャンレジーム期の民衆蜂起における暴力行使の内容とその意味を類型化したもの(J=ニコラ)などが認められる。

日本では、ホロコーストをめぐる分析や、「シャリヴァリ」「モラルエコノミー」などの現象に見られる暴力への接近に注目する試み、また、日本の植民地支配の中で発生した暴力を性差に着目して捉える試み(シリーズ「戦争・暴力と女性」第3巻『植民地と戦争責任』早川紀代編、吉川弘文館、2005年)などがなされてきた。そして、「暴力」の視点から歴史的諸現象を読み直すという仕事は、近年になってようやく「歴史のなかの暴力と秩序」(歴史学研究会合同部会、2000年)や、『暴力の地平を超えて』(須田努、趙景達、中島久人編、青木書店、2004年)、『暴力—比較文明史的考察—』(山内進、加藤博、新田一郎編、東京大学出版会、2005年)、『権力と暴力』(古矢旬、山田史郎編、ミネルヴァ書房、2007年、シリーズ・アメリカ研究の越境、第2巻)などとして俯瞰されるようになっていく。

本大会では、こうした暴力をめぐる歴史学側の研究状況に鑑み、世界史上に刻まれた暴力の多様な現象形態をあらためて取り上げ、それぞれの場面に確認できる暴力行使の実態やそれらについての記憶を問い直してみることにした。とりわけ、戦争や革命、さらには大規模な人の移動や交易の際に生じた暴力行使を、記録のレヴェ

ルから多角的に捉えなおし、それぞれの暴力が抱えているその経済的、政治的、社会的、思想的側面を浮き彫りにすれば、どのような歴史像が再提起できるのかを問うてみたい。また、この試みは暴力をめぐる作り出された「正史」の再検討と、それによって逆に増幅されていた記憶の歴史性を同時に問い直すことになる。そして、この「世界史における暴力—記憶と記録—」の分析視角に基づいた検討作業から、現代社会における歴史学の鋭敏性や有効性をはたしてどれほど高められるのかは未知数だとしても、少なくとも個別分散化とも思える今日の歴史学の多元的状況に一石を投ずることによって、実りある議論が深まることを願うことになる。

このようなねらいの下に、本大会「記念講演」では「世界史における暴力」を共通テーマとして三人の研究者の方々にそれぞれ独自のフィールドから講演していただくことにした。

まず城戸毅氏には「暴力の中世ヨーロッパ」と題して、西欧中世における騎士の存在の両義性と、百年戦争期のフランスにおいてイングランド軍の侵入によってもたらされた混乱を、とりわけ野武士集団の暴力に注目して検討していただく。ついで、油井大三郎氏には「近現代史の中の戦争とその記憶—連続と変容の相関—」と題して、アメリカ独立戦争から南北戦争を経て、両世界大戦、さらにはイラク戦争までを射程に入れて、最大規模の暴力行使でもある「戦争」の形態ならびに記憶の変容を検証していただく。最後に、板垣雄三氏には「〈反テロ戦争〉時代と歴史学」のタイトルでお話していただく。今、世界が巻き込まれている「反テロ戦争」に、この時代が、学問の在り方が、歴史学がどのように取り込まれてしまっているのか、欧米中心主義に片寄りがある今日の状況のなかで、ここからどう脱却すべきなのか、大胆な問題提起が期待される。

暴力の中世ヨーロッパ

城戸 毅

暴力は人類社会に普遍的な社会現象である。そこで行使される力は幼児の腕力から大量殺戮兵器に及び、その規模は幼児の喧嘩から世界大戦に及ぶ。その様態もその規模と同様に多種多様である。人類社会の社会現象には暴力以外にも商業や教育、情報伝達など多様な事象があるが、中でも暴力だけは人を殺傷し、人権を蹂躪し、人類社会の発展に寄与するところのない無益な破壊行為として広く否定的な評価が確立している。しかしそれでもなお私たちは暴力を人類社会から根絶することができていない。

暴力行為の発現を条件づけるものとしては社会的な環境条件、暴力に対する外力の強弱を規定する法的政治的条件、さらに暴力主体の内面における思想的心理的条件が考えられる。前の二つは暴力行為発生の客観的条件であり、三つ目はその主体的条件であるといえよう。これまで歴史学は近代国家が暴力手段の独占を確立することによって暴力を抑止する条件を整えた旨を教えてきた。しかし近代国家は暴力手段を独占することによって暴力を減らすことには確かに成功したかもしれないが、それを根絶することにはまだ成功しておらず、また国際社会における暴力の行使を廃止することもできてはいない。さらにそもそも国家による暴力手段の独占も現在決して全世界的に確立しているといえる状況にはない。ここではこうした問題はさておき、暴力発現のもう一つの条件である社会的な環境条件を検討してみたい。そのようなものとしてここでは第一に長期にわたる戦乱によって社会組織が弛緩し、社会が不安定となり、武器が社会に広く拡散してしまっている状況、及び第二に戦士階級の存在によって武器の携行が社会に広く行き渡っている状況を挙げたい。前近代においては暴力を独占する国家は未成熟であり、さまざまな呼称を持つ戦士階級は国家の暴力手段として機能しつつ、なお前近代世界の暴力的環境の基本的下地となっていた。西欧世界に限って言えば、騎士と呼ばれた戦士階級の存在がそれである。また時代を限っていうなら、百年戦争当時のフランス、あるいは三十年戦争当時のドイツの状況は戦乱による社会組織の破壊と弛緩、武器の拡散が社会に広く暴力的環境を作り出すことになっていたことは間違いない。ここではこれらの時代や地域、とくに中世西欧における騎士の存在の両義性と百年戦争期フランスにおける暴力の社会的下地となっていたイギリス軍の侵入による暴力及び野武士集団の暴力について述べて、中世西欧の社会状況の理解に資することを期したい。

近現代史の中の戦争とその記憶

— 連続と変容の相関 —

油井大三郎

本報告では、「暴力」の最大規模の行使というべき「戦争」とその記憶の変容を、米国を中心とした近代から現代への歴史的变化の中で検討してみたい。戦争を世界史的視野で検討する場合、古代以来、国内での殺人は罰せられるのに、戦争での殺人は罰せられないどころか、しばしば「英雄」視されてきたのは何故か、という矛盾につきあたる。この矛盾は、人間の行動の背後に古くから存在する、自集団＝「味方」と他集団＝「敵」を峻別する「共同体意識」の壁に関連している。

勿論、この「自集団」の規模や性格は時代とともに変化してきた。「大航海時代」以降の西洋近代では、人種差別や「文明」の優越感に根ざした「西洋中心主義」が台頭する一方、絶対君主制により「主権国家」が建設され、「主権国家」同士の利害対立を戦争によって決着することを当然視する「正戦」論が定着していった。その上、市民革命により「国民主権」体制が成立し、徴兵制による国民軍が形成されることで、軍隊の戦闘能力は飛躍的に高まり、戦争の被害が激増していった。他方、近代の市民革命は人権や民主主義思想の成長によって「文民統制」など戦争を抑止する方向性も打ち出していった。

つまり、西洋近代は、民主主義の発達による戦争抑止と民族・人種意識の高揚による戦争助長という両義的な性格をもっていた。「西洋の膨張」の産物として始まった米国近代の場合も、常備軍を絶対君主の「手兵」と危険視して、「民兵制」を重視したり、「文民統制」を憲法に規定するとともに、自らの「脆弱性」を自覚して西欧列強との戦争を避けようとする「限定戦争」観や「孤立主義」外交が強調された。しかし、同時に、先住民やメキシコから領土を剥奪する戦争を当然視する「膨張主義」的傾向も見せていたのであり、戦争観に関して米国近代も両義的な性格をもっていた。

しかし、19世紀半ば以降になると、産業革命の完成による兵器の飛躍的な「革新」の影響も加わって、戦争被害が激増する中で、戦争にも「ルール」を設定する戦時国際法の制定が始まるが、これは「自集団」の枠を越えて、「越境的共同性」を模索する「脱近代」的動きの始まりと評価できるだろう。米国の場合も、62万人という史上最大の被害を出した南北戦争後には国際仲裁裁判所の開設など戦争を抑止する提言が重視されていった。

このような「脱近代」的動向は、20世紀に入り、人類が二度までも世界大戦を

経験し、民間人にも多数の犠牲者がでた結果、国際法だけでなく、国際機関を設立したり、「地域統合」によって戦争を抑止する動きが強まり、第二次世界大戦後の「現代」では、米ソ冷戦下でも「大国間戦争」は避けられるようになった。

しかし、第二次世界大戦で勝利し、世界の「覇権」を獲得した米国では依然として「正戦」意識が強く、むしろ第二次世界大戦を「よい戦争」とする「記憶」を定着させることで、現在でも「民主主義」を輸出するための戦争を肯定したり、「第三世界」での民族・宗教紛争を「後進」視して「文明」の名によって軍事介入する傾向も続いている。

そこで、本報告では、米国史を中心として近代から現代にかけての戦争観の連続と断絶の両面を照射することで、戦争という「暴力」を抑止する道を検討してみたい。

〈反テロ戦争〉時代と歴史学

板垣 雄三

「記念講演」において私に託された役割から、あえて挑^{プロヴォカティブ}発的に「大会テーマ」をも批評しながら歴史研究者の歴史認識を吟味する、という課題への取り組みを、お許し願いたい。

歴史研究者は自分が生きる時代のアクチュアリティとそこでの課題意識とに基づいて自由自在、世界史の構想力を全開させるべきだ。だが、これが異常な危機に直面する特異な時代を、いま、われわれは生きている。このことを私は強調したい。世界史における「モダニティー」が抜本的に問い直され、歴史意識の革新が人類の死活問題として切実に求められる状況下で、「ホロコースト後」の現実からいちじるしく立ち遅れた言説と論理に自己満足的に安住しつつ「新しいパラダイム」に同調した錯覚に陥っている知的怠惰の瀰漫状態が、欧米中心主義の「自己破産」にむかっての動きと共犯関係を深めつつあるのだ。

政治権力絡みで成立した「正統」的キリスト教はヨーロッパ現象としての反ユダヤ主義およびイスラーム敵視＝東方教会排除と支えあい、「寛容」は「東方問題」的「宗教紛争」煽動や終末論的「キリスト教シオニズム」の干渉を生みだし、植民者国家イスラエルの国際政治的設定は差別の「克服と償い」／「人権と民主主義」の前哨／「脱植民地化」と「民族自決」／など虚構の論理の破綻にさらされてきた。これら歴史過程そのものが現前する姿を、われわれは目撃している。それなのに、「ホロコースト止まり」思考の旋回に終始する現代欧米の思想・理論がもてはやされる。ホロコーストの「記憶」はパレスチナ人のナクバ（大破局）を隠す装置と化した。関心の力点は、国家と法の暴力性から、私人の暴力（性・幼児・弱者虐待や不条理殺人など）を含む非国家的主体のそれに転換され、抵抗権や国際人道法は無視される。暴力の遍在性とエコノミーへの視角、さらに構造的暴力への視角までが、イスラエル国家の植民地主義・人種主義・軍国主義を隠蔽するのに利用される。「暴力」をはじめ、「記憶」、「他者」、「グローバル化」、「国民国家のアポリア」、「新しい戦争」等々の概念の政治的・社会的悪^{アブユーズ}用が拡がり、歴史研究者までこれに巻き込まれる。

講演では、上記のような逆流を批判しつつ「反テロ戦争」時代を歴史的に性格づけ、世界史の新しい地平を望みつつ日本において西洋史学が果たすべき新たな責務を探りたい。

自由論題報告

6月14日(日) 9:30-12:20 10号館2・3階

- | | | | |
|---|----------|-----------------|-------------|
| A | 古代・中世史部会 | (10号館3階10302教室) | 9:30-12:20 |
| B | 中世史部会 | (10号館3階10303教室) | 10:10-12:20 |
| C | 中・近世史部会1 | (10号館3階10304教室) | 10:10-12:20 |
| D | 中・近世史部会2 | (10号館3階10315教室) | 10:10-12:20 |
| E | 近世史部会 | (10号館3階10314教室) | 9:30-12:20 |
| F | 近代史部会1 | (10号館3階10313教室) | 10:10-12:20 |
| G | 近代史部会2 | (10号館3階10309教室) | 9:30-12:20 |
| H | 近代史部会3 | (10号館2階10209教室) | 9:30-12:20 |
| I | 近代史部会4 | (10号館2階10213教室) | 9:30-12:20 |
| J | 現代史部会1 | (10号館2階10214教室) | 9:30-12:20 |
| K | 現代史部会2 | (10号館2階10215教室) | 9:30-12:20 |

カイサリアのエウセビオスのいわゆる「政治神学」をめぐって

戸田 聡

ビザンツ帝国史を語る際、特に帝国の成立について論じる文脈において「キリスト教的ローマ帝国理念」なるものが繰り返し語られる。ローマ帝国は、キリストの降誕と同じ時期に皇帝アウグストゥスにおいて世界（オイクメネー）をまとめあげ、以て使徒たちの宣教のために必要な政治的外枠を作り、しかる後に皇帝コンスタンティヌスにおいてキリストの教えを自らのうちに有機的に移植し、かくて、キリストの唯一の代理人たる皇帝において聖俗すべての事柄を一手に掌握する——このようなものとして語られるその理念は、キリストの再臨まで人類をまとめあげておく制度としてのローマ帝国、というキリスト教的終末観に基づいているとされ、そしてこのような理念・考えは、3世紀のキリスト教作家オリゲネスによる彫琢を経た後、上記コンスタンティヌス帝の同時代人たるカイサリアの司教エウセビオスによって最終的にまとめ上げられた、とされる。ここで発表者は、上記の帝国理念それ自体の当否を問おうとするわけではない。問いたいのはむしろ、そのような理念（或いは「政治神学」）が存在したとして、その形成におけるエウセビオスの貢献度は果たしてどれほどのものなのか、それはどれほどエウセビオス自身に由来するのか、ということである。この問題について、主に政治思想史的文脈の中で語られてきた上記帝国理念をめぐる研究と、エウセビオス個人の神学・思想に関する研究とを突き合わせることを通じて、今一度再考を試みるのが本発表の狙いである。

テミスティオスの友と敵

— 四世紀のギリシア知識人とローマ帝国 —

西村 昌洋

アリストテレスの注解者にしてコンスタンティノーブルの元老院議員、そして政治家であるテミスティオス（317年頃～388年頃）は、四世紀後半の東ローマ世界における知識人としては稀有な存在である。355年の元老院編入以来、彼は三十年にわたり異教徒の哲学者としてキリスト教徒の皇帝たちに仕えてきた。数回に及ぶ政権交代にもかかわらず、テミスティオスは同元老院の代表として使節役を引き受け、度々皇帝や市民の前で弁舌を振るい続けてきた。東方の知識人の中でも、皇帝権力と最も上手く付き合うことのできた人物とっていいだろう。

近年の研究では、テミスティオスが長命を保った要因として、二点が提出されている。一つは、彼がキリスト教の影響の及んだ宮廷と、まだ異教的風潮の強い東方ローカル・エリート層とを繋ぐ仲介者としての役割を果たしているから、というもの。もう一つは、コンスタンティノーブル元老院の代表者として新議員のリクルートを行い、この「新しいローマ」を中心とする人脈網をおさえたからであるという。しかし、キリスト教会も異教徒陣営も決して一枚岩ではなかった当時、テミスティオスがそれほど雑多な集団をまとめることは可能であったのか。異教徒の間でも、テミスティオスと当時の新プラトン主義者との意見の相違は大きい。そして、彼が代表するコンスタンティノーブルとは、東方諸都市の人と富を吸い上げながら成長したとして、リバニオスやエウナピオスから警戒され軽蔑された都市である。テミスティオスが新議員としてリクルートした人物についても、実際には、ほとんど手がかりがない。また、コンスタンティノーブル市内でも、テミスティオスは世俗的な権力を追い求めるソフィストとして度々批判にさらされた。しかし、この批判者の正体もやはり不明な点が多い。

本発表では、テミスティオスの支持基盤とは何か、彼の論敵の正体とは誰なのかを、史料から探り、情報を整理したい。そして、皇帝権力に接近することに成功した知識人の活動と言論を通して、ローマ皇帝とその帝国統治機構との存在感が急速に増していく四世紀の東地中海世界において、変化する状況に東方のローカル・エリート層がどのように対応したのかを知る手がかりとすることを目的とする。

王国集会・教会会議とカロリング朝フランク王国の国制

津田 拓郎

近代国家のごとき確固たる統治組織が存在しなかったとされる初期中世においては、国王と聖俗貴顕が直接顔を合わせる場である王国集会が王国統治においてきわめて重要な役割を果たしたと考えられている。T. Reuter は 2001 年の論文 “Assembly Politics in Western Europe” (in P. Linehan and J. L. Nelson [eds], *The Medieval World*) において「政治の分野では、集会や遠征の時以外には時間は止まっていた」と述べ、王国集会の国制上の重要性を強調した。しかし、現在の初期中世の王国集会に関する知識は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて行われた制度史的・法制史的なものに大きく依存している。そこでは、「王国集会」、「貴族集会」、「宮廷集会」、「軍隊集会」などの概念が用いられ、史料に現れる集会を類型化する試みが行われてきた。しかし、近年になってこれらの類型を無批判に想定することなく、この時代の「集会」をより柔軟なものとしてとらえる傾向が現れており、伝統的な集会理解は大きな見直しを迫られているといえる。

さらに、カロリング期に関しては、聖界の教会会議と世俗の王国集会の間の関係も重要な問題となる。ここでは参加者や協議内容について両者が大きく類似することがしばしば指摘されており、両者の間にはそもそも本質的な区別が全く存在しなかったとの見解も見られる。他方で、意識的・無意識的に聖俗の集会を別個のものと考えた上で、王国集会ないし教会会議の一方のみを検討の対象とする研究も多い。このように、現在の研究においては、初期中世における聖俗の集会の間の関係について統一的な見解が提示されるにいたっておらず、さらに両者を区別する場合にも、それが同時代における区別なのか、単なる分析概念としての区別なのかを明示しないまま論を進めるものも少なくないため、問題はいつそう複雑になっている。

このような研究状況を踏まえた上で、本報告ではカロリング期全体を対象として、とりわけ王国集会と教会会議の間の関係を検証し、聖俗の集会の構造とそれに対する同時代人の認識が時代を経て変化していく様子を明らかにする。このような作業から、この時代における聖俗貴顕の国制上の位置付けや、フランク王国における聖俗の要素の関係性に関しても重要な知見が得られるものと考えている。なお、本報告は、報告者による博士論文の成果の一部に基づくものである。

船を通じた共同体

— 紀元千年前後のスカンディナヴィア世界における 共同体形成に関する一試論 —

小澤 実

スカンディナヴィア世界の歴史学において、9 世紀から 11 世紀を特にヴァイキング時代と呼ぶ。それは、スカンディナヴィア人が、一方では東のユーラシア、西のブリテン諸島と大陸、南の地中海世界、北の北大西洋諸島へと展開し、他方では、現在の国家単位の基礎となるデンマーク、ノルウェー、スウェーデンの祖形を創り始める、ユーラシア史においても、ヨーロッパ史においても、スカンディナヴィア史においても一大転機となる重要な時代であった。

このような変化の時代にあって、スカンディナヴィア内部の社会構造も、それ以前の時代と比べて大きく様変わりした。スカンディナヴィア全体において、人口の一般的増大と新技術の流入、海外への移住、激しい戦闘とそれに伴う死が繰り返された結果、従来の家族親族、家門、地域といった単位の共同体が溶解し、その上で新しい帰属意識とそれに伴う共同体へと再編された。当該時代のスカンディナヴィアで最も重要かつ一般的な共同体は、シングという法的集会に基づく地域共同体であるが、そのみならず、地域の中で、また地域を越えて、職能や階層に基づき様々な種類の共同体が形成されていたことが、ルーン石碑のような同時代史料から推測できる。このような共同体のあり方は、ヨーロッパ世界全域で均質的なものではなく、海洋に囲まれた空間や王権の急速な権力掌握というこの時代の、特殊スカンディナヴィア的コンテクストによって規定されていた。

本発表では、とりわけデンマークとスウェーデンのルーン石碑に見える「skipari」ということばに注目しながら、初期スカンディナヴィア社会の戦士共同体の形成とその機能について考察する。

フランク国王に関する即位儀礼書の権標について
 — エルトマン祭式書における指輪・剣・王杖の初出を中心に —
 船木 順一

カロリング朝フランク王国において、塗油儀礼が国王即位式に導入されて以来、キリスト教聖職者は即位儀礼における単なる立会人ではなく、不可欠な挙行者となった。また、典礼改革の推進により、教会が執り行う多くの儀礼は定式化・成文化されていく。国王即位儀礼書はこの改革の流れに沿い、およそ10世紀初頭から起草され始めたと考えられている。

今回の報告では、一般にエルトマン祭式書（10世紀初）と称される西フランク系統の国王即位儀礼書を取り上げる。同祭式書の成立以前には、当初いくつかの新国王への祝別文（Benedictio）が存在するだけであった。ランス大司教ヒンクマル（位、845-882）はそうした状況から即位儀礼書が形成される上で、大きな役割を果たす。彼は869年シャルル禿頭王、877年ルイ吃音王、両王の即位儀礼に関する式文を執筆する。特定の即位式のために作成されたので、儀礼書とは言えないこれらの式文は、エルトマン祭式書の成り立ちに貢献した。というのは、同祭式書には、ヒンクマルの作成したテキストの多くが引用もしくは援用されたからである。

ところで、ヒンクマルが執筆した式文には、王冠・王笏そしてシュロの枝（Palma）という権標が見られる。一方、エルトマン祭式書にはそれらに加えて（シュロの枝を除く）、新たに指輪・剣・王杖が登場するのである。西フランク系統の国王即位儀礼書で、ほぼ同時期に成立した七定式祭式書にも、王冠・王笏の他に前二者指輪・剣の権標が見られた。

エルトマン祭式書におけるこれら権標の初出は、何を意味するのであろうか。他の多くの祭式書と同様に、エルトマン祭式書の起草者及び起草場所については不詳である。それ故、報告では祭式書のテキストのみならず、教会会議の決議文・年代記・書簡等の記述史料を考察して、上記の疑問を解きたい。こうした追究は当時の教会を取り巻く王国状況の解明にも繋がるであろう。

13世紀ノルウェー大司教区ニダロスと教皇庁間のコミュニケーション
 — 「辺境」との相互交渉の一側面 —

成川 岳大

13世紀、ノルウェー王権はアイリッシュ海からアイスランド、グリーンランドへと至る大西洋島嶼部を貢税地（スカットランド）として傘下に置き、一つの広域政治世界を構築した。研究者により「ノルウェー王支配権」と称されるこの政治的枠組みの雛形とされてきたのが、1152/3年に成立したニダロス（現トロンハイム）大司教管区である。

しかし、先行研究での理解は聖俗両権の協調関係を勢力伸張の前提と見做しつつも、大司教管区、及び位階上その頂点に位置する大司教の役割それ自体には、ほとんど注意を払うことはなかった。加えて、この教会そのものへの無関心は、島嶼部教会を対象にした研究を管区全体のコンテキストと切り離された地方史レベルの視野に留めるのみならず、同時代ヨーロッパ他地域で振興しつつあった流れ、すなわち教皇庁主導での中央集権化をもその検討の埒外に置く状況に繋がっている。

翻ってヨーロッパ全体に目を転ずるならば、近年の教皇史研究では、上述の動向を単に上からの一方的な集権化の押し付けと見做すのではなく、各地の教会と教皇庁との相互作用から読み解こうとする試みがなされている。その際のキーワードが管区の「ローマへのアクセス」であり、具体的にはカノンの伝播、教皇特使、加えて教皇庁の委任を受け裁判官としての活動を行う現地聖職者という三本柱が主たる考察の対象となる。

本報告では、上述の「ローマへのアクセス」という視点を援用し、13世紀、特に第4ラテラノ公会議が召集された前半におけるニダロス大司教区と教皇庁間の関係の変容に焦点を当てる。同会議、そして世紀後半における第2リヨン公会議は、思想・組織原理の双方において14世紀に至る中世後期教会史を方向付ける転換点であった。その「ローマとのアクセス」の変容が管区内教会ヒエラルキーに及ぼした影響についても、視野に入れて議論を展開することとしたい。

ラテン＝キリスト教世界の西北端に位置し、北大西洋島嶼部の司教区をもその管区に包摂するといういわば「海の司教区」ともいべき同大司教管区の地理的特性は、教皇庁との関係にも他地域であり類を見ない形の影を投げかけていることが予想される。それは、同時代ヨーロッパ世界全体の教会の組織化についても新鮮な知見を提供してくれるに違いない。

13世紀後半アイスランドの法改正と王権理念

松本 涼

870年から930年頃、ほぼ無人島であったアイスランドには、ノルウェー出身の豪族が中心となり植民がおこなわれた。植民活動の終わり頃、そこには王やそれに類する中央権力を持たず、全島に共通の法と有力農民による集会を基盤とする社会体制が成立した。しかし、13世紀初頭より有力農民間の抗争が激化し、その結果、1260年代には、アイスランドの全住民はノルウェー王に対し貢税と臣従を誓約し、その支配下に入る事となる。

王権の受容がアイスランド社会にもたらしたものの探求は、ヨーロッパの辺境という当地の特殊な社会状況からしても、中世社会における王権もしくは権力の意義を考える上で、有益な比較事例を提供しうる。本報告は、1270年以降のアイスランドの法改正過程に着目し、王権受容を通して生じた、法ならびに権力の在り方に対する人々の態度の変化を明らかにすることで、その一例を示す。

王権受容以前のアイスランドには口承の慣習法が存在していたが、ノルウェー王はそれに代わる新たな成文法の施行を試みる。まずは、1271年に『ヤールンシーザ』が全島集会に提示され、2年後の1273年に承認に至る。ところが、『ヤールンシーザ』は、従来の法慣習との齟齬が大きくアイスランド住民の反発を招いたとみられ、1280年には、改めて『ヨーンスポーク』が提示された。『ヨーンスポーク』は、翌年の全島集会で承認され、その後幾度かの改正を経て、以後400年近く効力を保つことになる。

このような経緯を最も詳細に伝える『司教アールニのサガ』からは、『ヨーンスポーク』の承認に際し、アイスランド住民とノルウェー王の使節との間で、法の在り方をめぐり論争が生じていたことが確認できる。さらに、論争の過程や争点を分析すると、その対立の背後には、アイスランドで伝統的に保持されてきた法意識と、王の使節の主張する法理念との齟齬があったと考えられる。王の使節が表現していたのは、大陸ヨーロッパの政治文化と教会の影響下に、12-13世紀ノルウェー宮廷で醸成された新たな王権理念であった。

『ヨーンスポーク』承認以降は、アイスランドとノルウェー宮廷を行き来する従士や司教を主たる発信源として、新たな王権理念が徐々にアイスランド内部にも浸透してゆくと推測される。

カペー期ノルマンディにおける王権と都市
— 都市ルーアンの商業特権と紛争解決をめぐって —

花房 秀一

ノルマンディの都市ルーアンは、イングランド王権下の時代にノルマンディ地方の対英貿易における独占権を認められていた。1204年6月のカペー王権による同市の占領によってイングランドとの貿易は一旦途絶えるものの、同市は早くも同年12月にはイングランドへの通行証 (sauf-conduits) を獲得して対英貿易を確保した。さらにカペー王権によってノルマンディ地方が同王権の王領地に併合されたことは、ルーアンがパリや高地ブルゴーニュ地方に進出する契機となり、同市の経済圏はフランス内陸部に向けて拡大することとなったのである。

ところがルーアンがパリ地方と結ばれたことは、以前から熾っていた流通上の問題を表面化させることにもなった。ノルマンディの中心都市であるルーアンは、カペー王権の統治下に入る以前から、セヌ川流域における商権をめぐってパリと競合していた。例えばノルマンディ公ジョフロワ・ダンジューはルーアンに対して1144年の特許状によって、セヌ川下流における商品輸送の占有権と同市内における販売独占権を認めていた。それに対してフランス王ルイ7世は、パリの水運ギルドに対してセヌ川上流域からマント (Mantes) に至るセヌ川流通の占有権を付与したのである。

このようなルーアンとパリの競合関係は、前者がカペー王権の統治下に入ったことにより、新たな局面に展開した。すなわち、それまでイングランド王権との対抗上、政治的・経済的にパリを保護してきたカペー王権は、これ以後、両都市の競合関係を調停し、商品流通の新たな秩序を模索しなければならなかったのである。

そこで本発表では、セヌ川の商品流通をめぐって起きた紛争の解決を通して、カペー王権がどのようにセヌ川流域の流通経済を統制していったのかを検討してみたいと思う。具体的には高等法院判例集 (Olim) を用いて、カペー王権のルーアンの商業特権に対する態度の変化と、中世後期における商業路の変化に対応した同特権の位置づけについて考察する。これによってルーアンの特権や商権の推移を一都市史の範囲を超えたより広い地域史の中に位置づけることができるとともに、カペー王権による地方統治の実態を解明する一つの手掛かりとすることができると思われるのである。

13世紀後半から14世紀初頭のガスコーニュにおける上訴と請願 — 現地勢力とプランタジネット家との封建誓約からの考察 —

横井川雄介

1259年パリ条約によって、ボルドー周辺からピレネー山脈の領主領、ペリゴール・リムーザン・ケルシイの中部フランス三教区のフランス王でカペー家のルイ9世の名で保有されている封土の領有が、イングランド王でプランタジネット家のヘンリ3世及びその後継者に認められた。同条約でヘンリ3世が獲得した領域を、プランタジネット家の支配領域 (dominions) としてのガスコーニュと呼ぶ。

同条約以降、ガスコーニュにおいては、プランタジネット家のレフテナント (代官) で、同家のガスコーニュにおける最高行政官である、ガスコーニュ・セネシャルの判決や裁定を不服としての、パリ高等法院・フランス王廷への上訴動向が問題となった。19世紀末のガヴリロヴィチに始まる先行研究では、一連の上訴はフランス王権がガスコーニュに浸透することを意味するものとして、中世フランス王国発展史観と英仏百年戦争起源論における格好の材料とされてきた。1980年代になってようやく、ヴェイルの批判を受けて、欧米の学会動向において、現地勢力の視点からの上訴研究がスタートし、上記のヴェイルとキックライターの研究に代表されるように、ガスコーニュの現地勢力とプランタジネット家とカペー家との封建誓約を含む紐帯について言及がなされた。

発表者は、ヴェイルとキックライターが提示してきた新たな上訴研究の手法を取り入れつつ、上訴人となったガスコーニュの現地勢力の中での個々人及び団体が、どのような経緯で、現地法廷もしくはプランタジネット家の主宰法廷での判決や裁定に不服を示し、パリ高等法院・フランス王廷へと上訴したのか、上訴人もしくは被上訴人の証言の内容と判決に与えた影響、判決の内容はどのような意義を持ったのかについて、詳細な分析を行った。

そこで、本発表では、1257年から1325年の約70年間を焦点として、ガスコーニュの現地勢力の上訴を、1280年代から14世紀初頭にかけて、上訴の一形態として登場する請願も考慮して、プランタジネット家の行政史料である *Rôles Gascons* と1274年にエドワード1世が作成を主導した *Recogniciones feodorum in Aquitania* に見える封建誓約を足がかりに、英仏両王家の裁判史料と合わせて分析する。そのことで、ガスコーニュでの上訴動向の一端を明らかにすることを目的としたい。

15-16世紀における軍事技術の視点からのマキアヴェッリ再検討 — 築城と火器をめぐるルネサンス人の議論 —

白幡 俊輔

16世紀に活躍したマキアヴェッリの政治思想における特徴と革新性は、政治と軍事の一体化、すなわちパワーポリティクスを、西洋思想史上初めて明快に打ち出した点にあるとされる。また彼はフィレンツェ秘書官時代から晩年に至るまで、著作活動を通じて、さらに実務においても軍事に深く関与した、一種の「軍事プロフェッショナル」であった。このようにマキアヴェッリの活動と軍事は切り離すことが出来ない。だがその主張や活動は、F・シャボーやP・ピエリといった研究者によって、ギリシャやローマの軍制を極端に理想化し、16世紀の軍事環境を無視した、非現実的で矛盾をはらんでいるものとされており、政治思想上の業績に比べて、彼の軍事論の評価は高くない。さらに彼の軍事論が非現実的と批判される原因には、当時の戦争の主要な形態であった籠城戦と築城術、火器などを軽視した点も含まれている。だが現状では、こういったマキアヴェッリの軍事技術論に対する研究はいまだ盛んとは言いがたい。

築城術や火器 (大砲) といった軍事技術は、15世紀から16世紀にかけてイタリアで建築家や軍事理論家によって繰り返し論じられたテーマであった。とりわけ15世紀の建築家フランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニ (1439-1501) は、早くから火器の威力に注目し、後世の稜堡式築城へと発展するアイデアを初めて著作に示した人物として知られている。また16世紀のペルッツィ、タルターリアなども築城や火器に関心を払っていたことがその著作からうかがえる。

このように、マキアヴェッリの前後の時代に、多くの建築書・技術書が論じてきた主要な軍事上のテーマは、マキアヴェッリが軽視した築城術や火器であり、多くの人物が城郭や火器の改良・発達に重大な軍事的課題があるとみていたことが分かる。マキアヴェッリ自身、著書 *Arte della guerra* 『戦争の技術』では築城や砲術について論じており、晩年にはフィレンツェ城壁委員会に対してフィレンツェ市の要塞化計画を提出している。だが、はたして彼はこういった分野において実践的な知識をもつ理論家であったのだろうか。

そこで発表者は、マキアヴェッリという思想家と、フランチェスコらの軍事技術者の言説を分析し、二種類の軍事プロフェッショナルの比較を通じてマキアヴェッリの諸著作に現れた軍事論の、「技術」の面からの再解釈と評価を試みたい。

都市と聖職者の共生 (Symbiose)

— 帝国都市ニュルンベルクにおける主任司祭の役割 —

原田 晶子

中世ドイツ都市史研究においては、法的特権を持つ聖職者は都市の中の異分子とみなされ、長らく研究の主眼は都市と聖職者の対立に置かれてきた。しかし近年では、市参事会は市民の宗教世活にも責任を負っているという意味においてメラーが示した「聖なる共同体」という都市像が受け入れられつつあり、都市と聖職者の関係も再考を迫られている。確かに15世紀の聖職者批判においても聖職者の存在自体を否定する考えはなく、教区主任司祭の司牧能力の欠如に対する激しい非難は、司牧が市民生活にとって不可欠なものだったことの裏返し表現であったと言える。しかし市民の司牧だけが、果たして主任司祭に第一に求められたことだったのだろうか？

本報告では、大帝国都市であったニュルンベルクを例に、14世紀から宗教改革までの時代を三つに分け、都市と主任司祭の関係を検討していく。ニュルンベルクにはペグニッツ川をはさんで二つの教区が存在した。政治的中心機能を持ち都市門閥が多く住む北側の聖ゼーバルト教区と、南側の聖ローレンツ教区である。この両教区の主任司祭の出自、経歴を明らかにし、主任司祭選出の過程や年代記の記述から、主任司祭に求められた司牧以外の役割を導き出す。

最も注目すべき点は主任司祭の経歴である。両教区の主任司祭のほとんどが法学の学位をもっており、都市の法律顧問を務めた者も多い。また年代記の記述をみると、都市の外交使節のメンバーに挙げられている者も多くいる。出自に関しては、都市の第一位の教会である聖ゼーバルト教会より、第二位の聖ローレンツ教会に早くからニュルンベルクの都市門閥家系出身者が就任する傾向が現れ、より有力な家系の出身者が就任していた一方で、聖ゼーバルト教会の主任司祭には、むしろ皇帝やローマ教皇と関係の深い聖職者が選ばれていた。このように両教区の主任司祭と都市との関係を比較検討することで、都市と聖職者の「共生 (Symbiose)」という観点の重要性を示したい。

中近世アウクスブルクの木材供給

— 都市の森林所有とレヒ川の筏流し —

渡邊 裕一

近代以前の都市では、木材の確保は都市共同体の最重要課題のひとつであった。ドイツで石炭が本格的に利用されるようになったのは18世紀以降のことであり、それ以前は木炭や薪こそが主要なエネルギー源であった。建築物や仕事用具の多くはいまだ木製であったし、木材を原材料とする手工業も多かった（例えば大工、樽屋、靴屋など）。なにより毎日の暖房や料理用の薪は、都市生活において欠かすことのできない必需品であった。とりわけ多くの人々が集う大都市において、彼らはいかにして必要な木材を供給していたのだろうか。

ところで中世後期以降、一部の都市（多くは帝国都市）が周辺地域に展開した「領域支配政策」は、ドイツ都市史研究上、よく知られた現象である。ニュルンベルクやウルム、シュヴェービッシュ・ハルは、その代表的な事例として知られている。近年の研究では、そのような都市において、都市周辺に広がる森林地帯の獲得が、都市領域の拡大・維持に重要な役割を果たしていたと指摘されている。中近世の都市にとって、森林は経済的な意義のみならず、政治的にも重要な意味を持っていたのである。

しかし、周辺地域に広大な都市支配領域を形成しえたのは、一部の都市に限られていた。それでは、みずからの支配領域を形成しなかった都市では、いかにして必要な木材を調達していたのだろうか。

本報告では、南ドイツを代表する大都市のひとつであるものの、みずからの都市支配領域を形成することのなかったアウクスブルクを事例に、中世後期から近世にかけての都市への木材供給の具体的なありかたとその変容過程を、そのさいに都市が直面した周辺他勢力との政治的問題や駆け引き、その解決方法に注目しながら明らかにしたい。考察方法としては、都市の木材供給に重要な意味を持っていた「都市の森林所有」と「レヒ川の筏流し」に注目する。

アウクスブルクの場合、都市は周辺他勢力の支配領域にある森林から木材を調達する必要があった。したがって、みずからの都市支配領域内からの木材供給に頼ることができたニュルンベルクなどと比べると、都市への木材供給は、その時々周辺の他勢力との政治・権力関係により強く依存していたと想定できるだろう。

駐在大使との往復書簡を通して見たカール5世の対イングランド政策 — ウスタッシュ・シャピユイ大使を事例として —

高梨久美子

16世紀初期、西欧の君主達は常駐在外使節制度を採用し始めた。神聖ローマ皇帝カール5世も祖父アラゴン王フェルナンド2世や皇帝マクシミリアン1世からこの制度を受け継ぎ、駐在大使達のネットワークを拡大した。カール5世の複雑な統治システムを支えていたのは書簡の遣り取りと使節の派遣であったと言われるが、カール5世の外交及び駐在大使に関する研究はまだ初期段階にあり、その対外政策についてもイングランドが注目されることは稀であった。しかし宿敵フランソワ1世への対抗勢力として、また帝国内で最も繁栄しており帝国の心臓部と言われた故郷ネーデルラントへの経済的影響力からも、イングランドとの関係はカール5世にとって重要であったと考えられる。

カール5世は1529年に在イングランド大使としてウスタッシュ・シャピユイ Eustache Chapuys をヘンリ8世の宮廷に送った。シャピユイは16年という異例の長きに亘ってカール5世の大使を務め、イングランド情報を詳細な急送公文書にして頻繁に皇帝はじめネーデルラント総督、他国在住の皇帝大使に送り続けた。カール5世はまたシャピユイをヘンリ8世やその顧問官達との直接の交渉にも当たらせた。シャピユイのヘンリ8世との主な交渉事項はヘンリ8世の離婚問題、王女メアリの処遇問題、1536年から1538年及び1542年から1544年の二度に亘る対仏戦のための同盟問題、イングランドとネーデルラントとの通商問題であるが、中でも1543年2月の対仏戦同盟締結に至る交渉はカール5世から非常に高い評価を受けた。

報告者は既にヘンリ8世の離婚問題に関する外交交渉を論考で扱ったが、本報告ではそれに引き続き1542年から1544年の対仏戦のための同盟に関するカール5世の政策を中心として扱いたい。カール5世からシャピユイに宛てた指令の書簡及びシャピユイからカール5世に宛てた報告書簡からカール5世の駐在大使を用いた対イングランド政策の考察を試みることで、複雑な国際情勢の中に置かれた当該時期のイングランドが国外の君主特に神聖ローマ皇帝からどのように見られていたのかを考えてみたい。

権原証書の史的性質について

— 植民地時代メキシコ先住民村落における土地文書の編纂 —

井上 幸孝

権原証書 (Títulos primordiales) とは、植民地時代メキシコの先住民村落で作成された共同体の土地に関する文書である。スペイン語のものもあるが、多くはアルファベット表記の先住民語で書かれており、スペインによる征服、植民地時代初期の共同体の成立過程、その際に定められた共同体の土地境界などが主に記されている。多くの文書は、17世紀以降、主に共同体の領域を示す目的で司法当局に提示されたものだが、現在でもなお裁判等で土地紛争解決のために権原証書が使用されているケースもある。これらの文書は、かつて偽文書との烙印を押され、歴史研究の対象としては注目されなかった。しかし、近年、先住民の思考様式やメンタリティを解明しうる史料として再評価され、急速に研究者の関心を集めている。

本報告では、メキシコ中央部の主要な先住民語であるナワトル語圏を対象とし、ナワトル語およびスペイン語の権原証書を取り上げる。その際、従来の研究とは異なったアプローチを試み、訴訟等で権原証書を使用する先住民側の立場や意図を重視する。すなわち、多様な文脈で文書を編纂・提示する先住民共同体にとって、権原証書がどのような意味を持ちえたのかに主な着眼点を置く。

はじめに、通説に沿って権原証書の概要を提示する。その上で、植民地時代に異質な文書がまとめられたと考えられる事例、絵文書 (コディセ) 風の文書が明白な偽造の意図をもって作成された事例、植民地時代の文書が20世紀になって再利用された事例を検討し、時代環境と文書の意義を考察する。これらの事例研究を通して、現代研究者による権原証書の理解のあり方を問い直し、これまで曖昧にされてきた権原証書とは何かという定義の問題にも踏み込む。以上の考察から、権原証書の特性を安易に一般化するのではなく、それぞれの時代や場所に依じて文書が持ちえた意義を踏まえる必要性を指摘する。こうして、従来の研究では見過されがちであった、史料としての権原証書の性質に関する議論を進めることにより、植民地時代先住民社会の実態を知るための史料として、これらの文書を新たな観点から読み直すことが可能になるであろう。

17世紀末におけるボストンの西インド貿易 — 結節点としてのジャマイカ —

笠井 俊和

アメリカ植民地時代史研究において、大西洋世界の相互連関に光を当てる大西洋史が注目される昨今、ヒト・モノ・カネ・情報のネットワークは極めて重要なテーマとなっている。

17世紀末のカリブ海でそのネットワークの結節点となったのは英領ジャマイカである。そこには本国や北米からの船が砂糖を求めて来訪し、アフリカからの船は毎年1,500人前後の黒人奴隷を送り込んだ。ジャマイカはまた密貿易の拠点でもあり、中南米のスペイン領へと向かう船も後を絶たなかった。中心港のポートロイヤルは、全人口に占める商人の割合や、白人一人当たりの輸入額において、北米最大の都市ボストンを凌ぐ新世界随一の商港であった。

本報告では、奴隷向けの食糧をジャマイカへと供給し、帰り荷として砂糖や貴金属を求めたボストン船と、その船乗りに着目する。考察にあたって、17世紀末にポートロイヤルとボストンで記録された海事局船舶簿(商船の出入港記録)をデータベース化した。そこに記された2,808隻の船舶の情報を分析することにより、ボストン船の大半が北米と西インドの海域しか航行せず、西インドでも行き先を限定していたことを明らかにする。西インドは市場規模が小さく商品価格の変動も激しいため、船長には現地での取引のみならず、船の行き先の決定権まで委ねられることが一般的であったが、彼らの多くが取引地として砂糖もスペイン硬貨も豊富なジャマイカを選ぶことにより、ボストン船がジャマイカだけで取引を済ませるパターンが定着したと考えられるのである。さらに報告では、同じくジャマイカを訪れる本国船と比較してボストン船の特徴などを論じる。

一方、船舶簿に記録されなかった船の存在は閑却され得ない。特に、ポートロイヤルへの入港を記録されながらも出港記録の残らない船は、スペイン領へと密貿易に向かった可能性が指摘されている。ボストン船が渴望したスペイン硬貨がジャマイカに潤沢だった所以は、海賊による掠奪だけでなく、スペイン人との密貿易にも求められよう。船舶簿に欠落した情報を補うため、密貿易に従事したロンドン商人が遺した書簡や船荷証券を併用し、船舶簿とのクロスチェックにより、非合法貿易に関与した船についても論及したい。

17世紀イングランドにおける法廷・統治・地域社会 — 北ヨークシャ四季法廷大陪審員の事例を中心に —

後藤はる美

近世イングランドにおいて法廷は、刑事上の犯罪のみならず、行政や宗教上の逸脱行為をはじめ、地域の秩序維持にかかわるあらゆる問題を扱う統治システムの重要な支柱であった。起訴から刑罰にいたる法執行の各過程には、地域住民の積極的な参加と協力が不可欠であったが、このことは地域と中央権力との交渉の契機として国家形成に寄与したことが指摘されてきた。

とりわけ大陪審(the grand jury)は、四季法廷・アサイズ法廷などの地方法廷において、司法・行政上、重要な役割を果たしたことが知られている。大陪審とは、法廷の開廷期間毎に任命される十数名の地域住民からなる陪審の一種である。小陪審(the petty jury)が訴訟の審理に関与したのに対し、大陪審は起訴状の審査および州内のさまざまな不法行為や社会的不満の告発の責を負うと同時に、地域住民を象徴的に代表するものとしても機能した。こうしたことから大陪審は、地域社会の統治の実践に深く関与し、その社会的基盤は多くの場合、教区において影響力を行使した中間層にあるとされてきた。しかし、その具体相や地域的偏差については十分な実証研究がなされていない。

本報告は、17世紀ヨークシャ州ノース・ライディングにおける四季法廷大陪審員の事例から、大陪審の選任過程とその構成員の社会的背景を考察する。それをつうじて、政治的、宗教的問題を多く抱える北部に位置したこの地域が、いかにして、またどの程度、近世イングランドの統治システムに包摂されていたのかを検証することをめざす。

四季法廷史料と地方税査定史料、教区史料の比較検討からは、ある程度の土地を保有し教区役職を歴任した、近隣共同体において「有為の実力者」と認められた人々が大陪審の中核を成していたことが確認できた。他方で、大陪審の出自や選任パターンには相当の振幅があった。このことは統治システムとしての大陪審制の限界と同時に、その射程の広さを示唆するものである。大陪審への任命は一方では地域住民に権力の行使に参与する機会を与え、他方では彼らに定期的に「国家を経験させる」ことを意味した。大陪審制は、彼らを統治システムのエージェントとして国家に包摂する場としても重要な意義をもったと考えられる。

『物語集』の史料論的検討

— 初期近代イングランドにおける「ポピュラー・カルチャー」の
概念をめぐって —

佐藤 和哉

17世紀中葉から19世紀前半に、ブリテン、主にイングランドの出版社のカタログで「物語集（ヒストリーズ）」と分類されていた小型の廉価本は、民間伝承の物語や占い、民間医療やまじないのほか、15世紀以来イングランドに大陸から伝えられた物語や、出版当時流行していた小説のダイジェスト版などを内容としていた。出版年代や作者が特定できないうえに、時事的な事件を扱うパンフレットとも異なるため、具体的な歴史的イベントと結びつきにくく、1970年代にM・スパフォードやV・ニューバーグが、ポピュラー・カルチャーを研究するための対象として取り上げた後は、歴史研究者からはほぼ等閑視されていたと言ってよい。一方、フランスの「青本」を扱ったシャルチエや18世紀のベストセラーを取り上げたダントンの「新しい文化史」の一つのジャンルとして読書の歴史を提唱するなかで「所有」と「領有」を混同することの危険性を述べるなど、初期近代の文化の様相を明らかにするものとして民衆に流布した冊子の価値を指摘している。

本報告では、以上のようなシャルチエやダントンの議論を踏まえたうえで、読書やメディアの消費に関する社会学やカルチュラル・スタディーズなどの成果を参照しながら、「物語集」がポピュラー・カルチャーの定義そのものに関わる論点を提起しうるものであることを議論したい。まず、異なる出自の人びとの自伝的な文章にもとづいて、18世紀イングランドの「物語集」の読者層が階級横断的だったことを指摘する。また、「リテレート」な「読者」と「イリテレート」な「聴衆」との間に、識字能力が不十分ではあるがどうか備わっているといった「セミリテレート」なレベルの読者層が存在していたこと、あるいは、「物語集」中の物語が、原作を含めて、テキストの複雑さや価格においてそれぞれ異なる複数のダイジェスト版の存在を確認できることから、これらの冊子の内容をなす「物語」の基本的な構造は社会に広く共有されるものであって、単に「ポピュラー＝民衆的」と位置づけることはできないことを論じる。

以上の議論にもとづいて、本報告は、初期近代イングランドにおける「ポピュラー・カルチャー」と「エリート・カルチャー」は峻別することが出来ないの言うまでもなく、互いに流動的かつ多面的にかかわり合うものとして捉えるべきであると主張する。

「5つの鏡」と「7つの機能」

— イングランドの家具デザインにおける「女性」の表象と実像、

1770-1850年 —

真保 晶子

イングランドの家庭用家具とインテリアの歴史研究は、ほとんどが、装飾芸術史の枠内で、様式の変遷を説明することや、製作技術や材料の発展をたどることに費やされてきた。近年、デザイン史の発展だけでなく、ジェンダー史や消費文化史などが、家具とインテリアの歴史研究に新たな視点を切り開いてきた。しかし、これらの最近の研究は、家具とインテリアをとおして、消費者を分析すること—例えば、階級、社会集団、そして家庭内の関係—に集中しがちである。そこでは、家具とインテリアは、すでに「できあがった」物や場としての分析対象であって、デザイン・製造する側と、使う側との関係をとおした「過程」への注目は見落とされてきた。さらに、19世紀後半から20世紀に集中するこれらの研究では、女性消費者は、溢れる新しい商品の選択に困惑しながら、一方的に享受する立場として描かれがちであるといわざるをえない。

この報告では、パターンブック、雑誌、書簡を資料とし、1770-1850年の期間のイングランドにおける、女性のためにデザインされた家具に焦点をあてる。家具デザイナー・メーカー（男性）と女性消費者との間の、思い込みやずれ、意見の相違とともに、妥協や交渉を通じた「共同制作」としてのデザインができあがる過程を検証するのが本報告の目的である。それはまた、既製品に対する両者の抵抗と挑戦の過程でもあったと解釈できるだろう。

報告の第1章は、パターンブックや雑誌の言説とデザイン、特に、「女性のための」家具の機能から、ユーザーとして期待される、あるいは想定された女性像を読み解く。女性のためにデザインされた「5つの鏡」をもつ鏡台、「7つの機能」をもつテーブル（モーガン&サンダース製造）はその代表ともいえる。第2章は、それに対し、実際、女性消費者がどのような家具を、どのようなプロセスで注文していたかを、複数の家具メーカーと女性顧客たちとの書簡（1770年代-1830年代）にみられるやりとりをもとに探る。第3章では、家具メーカーの1840年代の会計簿にあらわれた女性顧客たちの椅子の注文に注目する。椅子に、顧客自身が制作した刺繍布を使うよう求めるこれらの注文は、製品を「領有化」する試みでもあったといえよう。

フランス革命期の国王裁判における4回の表決の分析 — フランス法制史からの読み —

石井 三記

ルイ16世の国王裁判が、革命期の国民公会という議会において、1793年1月15日から結果的に4回にわたる指名点呼の表決でおこなわれたことは周知のとおりである。すなわち、第1回投票は有罪か無罪かの罪責について、第2回は人民への上訴の可否について、第3回は具体的な刑罰の内容について、そして第4回は、当初の予定にはなかったが、執行延期の可否について表決をしていった。エクストラの投票がなされたのは、第3回の表決が僅差であったこと、また第3回の最初の投票者であるマユ議員による、いわゆるマユ条項の影響があったこともよく知られている。

本報告では、この4回の表決の推移を、定数749名の国民公会議員一人ひとりにつき、一覧表にすることによって、投票行動のパターンを析出し、そして法制史的な観点から見た場合、各議員たちが国王を裁くにあたって、どの程度政治的な、あるいは逆に、どの程度リーガリスティック（法律万能主義的）な判断をしていたのかを解明したいと思う。投票行動パターンは単純化していうと、ルイに厳しい判断か、寛大な判断かの2つになるが、全議員の2割程度は「一貫した」投票行動にはなっていない。これにはさまざまな要因が考えられようが、当時の法制度、とくに1791年刑法典の規定に照らして量刑を判断した場合、法論理的には「死刑」としかなりえなかったこともあったのではないだろうか（この刑法典の絶対的法定刑主義については拙著『18世紀フランスの法と正義』第9章「フランス革命と刑法空間の変容」を参照されたい）。したがって、投票行動における法律への参照の有無を見ると同時に、議員たちの出自が法律家出身の場合の投票行動に注目したい。そうすると、政治裁判の典型とされているこの裁判が、じつは、この局面では逆説的ながら、政治判断を優先させた場合には寛大な措置に傾き、リーガリスティックな立場に立てば即時死刑になることがわかるのである。

なお、時間の関係上、本報告は4回の投票行動の分析に焦点をあてることになるので、フランス革命期の国王裁判全般については当然、遅塚忠躬先生の一連のご論考が参考文献となり、拙稿「フランス革命期の国王裁判における法的側面」『法政論集』186号も参照していただければ幸いである。

ナポレオン権力樹立期前後のフランス・イタリア公共圏の成否

岡本 明

いわゆる市民社会謳歌論は、フランス革命で象られる「国家と個人の無媒介的対峙」に立脚し、そのかぎりでは議論の上限は初期国民国家で閉じる感があるが、はたしてそれでよいのか？ わたくしは、①公的市民と生成期国家の間に中間領域を設定し、②国境の枠外にも公共圏を想定しつつ、その彼方と此方でナショナルなものもたらずれ（＝ある種の落差）を考慮する「公共性論」に依拠して、フランス革命と同時代の隣接地域を考えたい。

その立脚点からは、ナポレオン政権成立前後（1798-1800）のフランスは、ジャコバンの在野勢力としての再結集が、イタリアでは「革命の3年（1796-99）」のジャコビーニの動きが見えてくる。

公共性論という中間領域には、まず教会と信仰・祭祀があるが、フランス総裁政府期は、個人的な「信仰の自由」原理だけでは終焉せず、教会になんらかの公的な位置を回復する動きがカトリック共和主義のグレゴワール師とかれについてゆく立憲聖職者の間で生じた（収拾期の様相）。イタリアではランツァなどのジャコビーニ（R. フェリーチェ）がローマ教会批判を展開した（思想史的最盛期）。

次に、言論・出版・集会活動と政治的集会活動の領域では、バック街マネージュ協会に結集していたジャコバンに1799年8月、解散令が出され、翌年9～10月の劇場での3度にわたる第一統領刺殺未遂事件、11月のシュヴァリエの爆弾密造事件へと続く（革命最終局面での左翼反政府勢力としての相貌）。この1800年は、イタリア再征と第二次チザルピーナ共和国成立の時期であるが、ナポレオンの方針転換によってミラノから放逐されたジャコビーニの一部は帰休兵とともに、パリのマネージュ協会に合流した跡がある。イタリア共和国（1802-1805）期には、比較的平穏の中にも、メルツイのコンコルダート解釈がローマ教皇との間で緊張をもたらし、広域名望家層の指導する穏健な共和国でも、民事領域で教会・聖職者・信者の関係が問い直される。

本発表では以上の推移に加え、イタリア・ジャコビーニのその後を追跡し、フランス・イタリアにまたがる「公共圏」のありようを考察してみたい。

19世紀初頭アメリカの「ギリシア熱」 — ギリシア独立支援運動の展開 —

田中 景

1821年3月、ギリシアによるオスマントルコ帝国からの独立戦争が勃発した。当時のヨーロッパ列強がフランス革命以前の体制復活に傾倒するなかで、ギリシアは独立革命と第二次米英戦争を経て共和制を貫くアメリカ合衆国に支援を求めた。ギリシア暫定政府議員マヴロミハリスはアメリカ政府と市民に宛てた手紙のなかで、「文明国がギリシアを支援することは（古代ギリシア文明の）恩恵に報いる」ことに等しく、「ペンやワシントン、フランクリンの市民ならば、フォションやトラシュブルス、アラトスやフィロポエメンの末裔の懇願を拒絶しないはずである」と訴え、支援を要請した。手紙はアメリカ政府へ送られる一方、パリ在住のギリシア人思想家アダマンディオス・コライスよりハーバード大学古典学教授エドワード・エヴェレットに送られ、全米に広まった。これに対してアメリカ政府は戦争には中立・不干渉の立場を表明し、他方で市民の間では「ギリシア熱」が高まり、各地でギリシア独立支援委員会が結成された。

先行研究は、支援運動をヨーロッパの親ギリシア主義（Philhellenism）の影響と国内におけるナショナル・アイデンティティの希求に支えられた運動として位置づけてきた。しかしながら、アメリカ市民にとって近代ギリシア人は自己投影の対象であったと断定するのは単純すぎる。何よりもヨーロッパ人としてのアイデンティティを形成する親ギリシア主義とは、オリエンタ的な状態にある近代ギリシア人をヨーロッパ文明の中に回復することを意味する。実際、アメリカ市民のギリシア支援のピークは1823年から1824年にかけての短い期間であり、その後、落ち込みの後に再び1826年に復活するも手放しの「ギリシア熱」ではなかった。すなわち、支援運動の展開の途上でアメリカ市民はギリシア人に自己投影することに懐疑的になったと考えられるのである。

本報告では、アメリカのギリシア独立支援委員会の運動を辿りながら、「自己」のみならず「他者」としての近代ギリシア人のイメージの構築を提示する。具体的には、当時全米に記事を配信していた有力紙 *Nile's Weekly Register* の報道やニューヨークやボストンで結成された独立支援委員会のパンフレット、戦争に参加したアメリカ人義勇兵の通信などの一次資料を分析し、アメリカ史の文脈においてギリシア独立支援運動を位置づけたい。

アンドロス島の啓蒙知識人カイリスの教育活動

松浦真衣子

現在のギリシャでは、国民の歴史を古代 - 中世 - 現代の連続性の中で描く連続的民族史観が支配的である。しかし近年、ギリシャのアカデミズムの場では、ギリシャ民族の「純血性」を否定し、「東洋」「西洋」問わず様々な文化を包括するギリシャ文化は「ハイブリディティ」であると評価する傾向がある。このような「ハイブリディティ」論者は歴史記述の中で、ギリシャの近代を「東洋的過去」に背を向け「西欧化」に成功する過程として描く傾向がある。この新たな歴史観には「西欧化 = 近代化」を核とした、新たなギリシャ中心主義の傾向が見受けられる。本報告では、連続的民族史観、「ハイブリディティ」論者、双方を批判する視点から、19世紀初頭に活躍した知識人カイリスの教育活動を再検討する。

カイリスは、ギリシャが国民国家として独立し、諸制度において中央集権体制を急速に確立していく時代に、西欧で学んだ「啓蒙思想」をギリシャに広め、近代的教育の確立に貢献した人物として、ギリシャ教育史に名を残している。

しかし彼の経歴は、当時活躍したギリシャ知識人の中でも独特であった。彼はギリシア独立後に故郷アンドロス島で孤児院建設運動を行うが、そこで土着の正教と啓蒙思想を融合した独自の宗教概念を確立し、それを広めたため、国家教会により異端裁判にかけられ、投獄されたまま死を迎えることとなる。

このような経歴を辿ったため、研究者の中には、カイリスの「啓蒙思想」に神秘主義の混在を見出す者もいれば、19世紀のギリシャ社会における「保守主義」と「自由主義」の拮抗に注目し、カイリスは当時においてあまりに「先進的」な「自由主義」擁護者であったために「保守主義」により迫害されたと評価する者もいる。いずれにせよ、一貫して研究史では、彼は19世紀初頭の「啓蒙主義」の先導者として描かれ、近代ギリシャの「西欧化」と「東洋的過去」の拮抗のなかで、前者を体現する知識人として評価される。

このようにカイリスの活動を「西洋」と「東洋」の拮抗の中に位置づける視点は、前述した「ハイブリディティ」論者の描写に繋がるものであり、このような二項対立を超えて事件を描写する必要がある。そこで、カイリスの事件を、彼の教育活動を可能にした地域社会の文脈に繋げ、その地域が彼の思想を受容することによって受けた社会的変化を考察し、ギリシャにおける「国民国家」と「近代化」の問題を再検討したい。

19世紀初頭のニューヨーク州における白人男子普通選挙の促進 — 独立後の大西洋世界の連続性に関する一考察 —

小池 航太

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、アメリカの歴史家は、合衆国が南北アメリカにまたがる大西洋世界において、近代初の共和国としてイギリスの専制に抗して独立を達成したことを重視した。そして、アメリカにおける共和政体の成立と発展は合衆国固有の経験であると捉えた。しかし、冷戦の勃発によって西側諸国の連帯が脚光を浴び始めたことを受け、歴史研究においても、ジャック・ゴドショーや、ロバート・パーマーらの研究者が、大西洋世界の発展における、ヨーロッパと南北アメリカの連続性・相互連関を重視する大西洋史のアプローチを提示した。近年、17世紀から18世紀にかけての奴隷貿易や移民史などの研究において、こうした枠組みが積極的に取り入れられている。しかし、大西洋史の研究対象は、主に独立以前のアメリカに限られており、独立後のアメリカ史を大西洋史の観点から論じる研究は少ない。

そこで、本報告では、植民地期から独立後にかけて、親英派の影響力が強かったニューヨーク州において1821年に開催された、ニューヨーク州憲法改正会議における、選挙権拡大をめぐる論争に焦点をあてる。具体的には、同会議における、財産制限選挙を支持するクリントン派と、制限の撤廃を主張するバックテイル・リパブリカンの対立を分析することで、ニューヨーク州における白人男子普通選挙が促進されていく過程を考察する。特に、バックテイル・リパブリカンの主張を、州憲法改正会議の議事録や、彼らが発行していた新聞『オールバニー・アーガス』紙を用いて検討することで、白人男子普通選挙をめぐる主張が、マグナ・カルタ以降、イングランド人に付与されてきた「イングランドの自由」の獲得を目指したものであったことを明らかにする。

1832年の選挙法改正法の制定にもかかわらず、イギリスにおいて普通選挙は達成されなかった。先行研究は、米英を比較し、選挙権の拡大をアメリカ固有の経験と捉えた。実際、選挙権の拡大はイギリスに先立って促進されたが、ニューヨーク州の事例は、その主張がイギリスで発達した理念に根ざしたものであったことを示している。すなわち、大西洋史は、独立後のアメリカ史を検討する際にも有効な枠組みであると言える。

初期カリフォルニア・ゴールドラッシュにおける日常生活と環境 — 食生活、特に食肉獲得を中心に —

加藤 鉄三

1849年に起こったカリフォルニア・ゴールドラッシュは極めて有名な出来事であるが、日本における詳細な研究は少ない。また、先住民人口の減少に言及する場合にも、スペイン・メキシコ領期を無視して、女性への暴行のみに言及をするといったセンショセーショナルスティックなものに留まっている。

他方、アメリカ環境史研究において、鉱山開発と環境破壊をめぐる研究、カリフォルニアのゴールドラッシュ期以降の環境史研究が公刊されているものの、概説的言及と断片的言及を除くと、対象は企業的な鉱山開発が主であり、個人と小規模グループが主であった初期ゴールドラッシュは本格的には論じられてこなかった。

本報告では、1848年から50年代初頭を中心に、鉱夫たちの日記・書簡集・回想録・ジャーナリストの記述を軸に、史料集・既存の研究で補完し、次の二点を考察する。第一点目は、鉱夫たちの日常生活が自然環境と先住民の生活環境に与えた影響である。その際、個々の鉱夫（及び小グループ）の個別影響とそれらの積み重なりとしての累積影響の関係に注意を払う。第二点目は鉱夫たちの「自然観」である。

食生活、特に食肉源に注目すると、採鉱現場（シエラ・ネヴァダ山麓部）においては野生動物、特にシカが重要であった。他方、現地の先住民諸グループにとってもシカは魚と並んで重要な蛋白質源であった。但し、鉱夫たちの食肉源は野生動物に限られていたわけではなかった。カリフォルニアには万単位の家畜が既に飼育されていたからである。ウシの商業的価値は皮革獣脂交易用の皮革としてのみであったのが、食肉用のブームが起こった。野生動物に関しても皮革獣脂交易用のワピチの脂と毛皮交易用の毛皮獣から、食肉用の狩りに重点が移行した。

そのうえで、これらを単なる他者批判的議論に終わらせないため、故二宮宏之氏の「参照系としてのからだどころ」を拡大敷衍し、論者自身の置かれている環境と行為との対比をし、労働と環境の関係の考察を試みたい。

ハプスブルク帝国外務省のハンガリー人たち — アウスグライヒから第一次世界大戦まで —

桑名 映子

ハプスブルク帝国の行政機構のなかでも、外務省はきわだって高い地位を誇っていた。1867年のアウスグライヒにより、帝国の内政を司る省庁はすべてオーストリアとハンガリー、それぞれの地域を担当する部分にわかれることとなったが、外交は軍事と並んで帝国全体に関係する「共通事項」として残された。そのため外務省は分割を免れ、陸軍省とともに共通行政の頂点に位置する官庁として、他の行政機関にはみられない高い地位と権威を享受することになったのである。

この帝国外務省にはかなりの数のハンガリー人が、外交官や官僚として勤務していた。もともとハプスブルク帝国の外交官には非ドイツ系の上流貴族も多く、そのなかにはアポニ家やズィチ家など、古くからハプスブルク家に忠実なハンガリー系貴族も含まれていた。こうした人びとは名前からすればハンガリー系であったが、帝国と王朝に対する忠誠心という面では、オーストリア出身の貴族と何ら異なる所がなく、外交官としての地位を利用してハンガリーに有利な外交政策を推進することはなかったと考えられる。

しかしアウスグライヒ以降、内政のみならず外交においてもオーストリアとの「同等性」を主張するハンガリーは、共通行政官庁である外務省においても、ハンガリーの利害を代弁する官僚の登用を要求するようになった。世紀転換期前後に外務省高官のポストについたセーチェン・ミクローシュ、メーライ・カイェターン、セジェーニ・ラースローらは、こうした要求に応える形で抜擢されたハンガリー人である。ハンガリーの内部事情に精通しながらドイツ語を巧みにあやつり、オーストリアとハンガリー、二つの社会のあいだを自在に行き来する彼らは、やっかみ半分に「ウィーン系ハンガリー人」と呼ばれることもあった。

こうした人びとは、共通外務省に勤務する外交官あるいは外務官僚としての職務と、ハンガリー人としての彼ら自身の立場を、どのように両立させていたのだろうか。本報告では、ショモジ・エーヴァらの先行研究をふまえつつ、同時代人の回想やオーストリアの国立文書館に所蔵された個人ファイルを手がかりとして、帝国官僚とハンガリー愛国者という、二重の使命を負わされた彼らの意識と役割に光をあててみたい。

ハプスブルク帝国シュタイアーマルクの農村地域におけるリベラリズム — キリスト教農民同盟の活動を中心に —

藤井 欣子

本報告の目的は、世紀転換期にハプスブルク帝国の領邦シュタイアーマルクにおいてリベラルな主張を掲げて農民たちの啓蒙と政治的動員に努めたドイツナショナル運動の協会「キリスト教農民同盟」の活動を検討することにより、当該地域の農民たちの間にリベラリズムがいかに広がっていったかというプロセスを明らかにしようとするものである。これまで、リベラルなドイツナショナル運動の中心的担い手は都市のブルジョワまたは地方の教師や官吏や職員たちであるとされてきたが、本報告では農村地域においては農民らに担われた協会も活動しており、農民の教育や選挙権など自分たちの生活に関わる問題をリベラルな論理によって解決しようとしていたことを示す。

19世紀後半、シュタイアーマルクにはドイツ語系住民とスロヴェニア語系住民が混住していた。帝国内に国民社会が形成されつつあった中で、彼らはそれぞれの国民社会を形成するべく互いに構成員や国民資産 Nationalbesitzstand（人口、土地、文化的財産など）を増やそうと競い合った。1880年代以降には、様々な協会がネーション別に作られた。ドイツ語系住民の側では、1890年代には選挙法改正の結果として選挙権を持つようになった農民層を票田として取り込むため、ドイツナショナル運動、キリスト教社会運動、社会民主主義運動といった各運動がそれぞれ協会を組織したが、90年代後半になってようやく農民たちも自ら協会組織を作るようになった。彼らは機関紙を発行して自らの主張を発信し、選挙の際には協会推薦の候補者を立てて領邦議会や帝国議会にまで代表を送った。農民らの利益主張は独自の回路を通して、国政の場に持ち出されることになったのである。

本報告では、主に1896年に設立された「キリスト教農民同盟」の機関紙とシュタイアーマルク領邦議会の議事録を用いて、農村地域におけるドイツナショナル派の活動およびそのリベラルな主張の内容を具体的に検討する。あわせて、国民化のための政治的回路が形成される過程についても考察していきたい。

近代オーストリアの有志消防団協会史にみる自由主義の経験

水野 博子

19世紀後半以降、オーストリア・ハプスブルク帝国の多くの自治体（Gemeinde）に有志消防団協会（Verein der Freiwilligen Feuerwehr）が結成された。一般に、有志消防団協会（以下、消防団と略す）とは、自由主義－資本主義の発展を背景に台頭しつつあった教養市民層が自治体との協力の下に創立した、「名誉職」を原則とした協会であった。それゆえ、消防団で重要な役職に就いた人物の中には、後に参事会や領邦議会議員等の重職に選出されるなど、自治体内で一定の政治的影響力を持つ者も少なくなかった。

消防団の活動の目的は、防火・防災活動にあった。その背景には、私有財産制を支持する自由主義－資本主義思想の影響が顕著にみられるとともに、消防団は自身の活動を通じて、その思想の普及に努めていく。その際、消防団の活動範囲は、自治体レベルはもとより、領邦内の消防団を統括する連盟組織の結成などにもおよび、超地域的・間地域的なネットワークが構築されていった。1880年代以降は、消防団員向けの新聞なども出版され、私有財産の保護という市民的価値を共有・伝達する公共圏が出現する。こうして消防団は、世紀転換期には自治体にとって不可欠の組織として定着し、20世紀に経験する二度の大戦中には、その時々の体制が「安価」に利用できる治安維持装置として「体制内化」されていくのである。

このような意味で、消防団は、19世紀後半から今日に至るまで歴史的に重要な組織であるにもかかわらず、オーストリア・ハプスブルク帝国内における消防団の歴史を扱った研究は、管見の限り極めて少ない。そこで本報告では、ある町の消防団の活動記録を中心に消防団新聞などの公刊史料をも参照して、有志消防団協会の活動の変遷をたどり、本来は反体制的な性格を持った消防団が、自由主義の経験の中で次第に「体制内化」していく歴史的過程に接近してみたい。

レイス・ウル・ウレマーの任命権をめぐる争い
— ハプスブルク帝国統治とボスニアのイスラーム —

米岡 大輔

19世紀後半以降、西洋列強諸国はオスマン帝国への干渉・進出といったいわゆる「東方問題」のもと、ひとつの共通の課題に直面した。それは、各国家が新たに獲得した旧オスマン帝国領において、国家理念も宗教的・法的伝統も異にするムスリムをいかにして統治するのか、という問題であった。各地のムスリム住民にとっては、非イスラーム統治体制下への移行がオスマン国家との歴史的関係を変化させ、自らのイスラームとしての在り方を再考させることにつながった。

ボスニア・ヘルツェゴヴィナ（以下、ボスニアと略）は、400年以上続いたオスマン帝国支配のもとスラヴ系ムスリムの居住地となり、1878年から1918年までハプスブルク帝国統治下におかれた。ハプスブルク帝国は1878年7月のベルリン条約において、ボスニアの領有権・施政権を獲得し、1879年4月にはボスニアのムスリムの処遇に関する協定をオスマン帝国との間で締結した。この協定では、占領後もボスニアにおけるスルタンの統治権は侵害されず、ムスリムとオスマン国家との関係も従来どおり保持されることが認められたのであった。

しかし、ハプスブルク帝国にとってこの協定に従うことは、ボスニアにおける統治権が制限されることを意味していた。それゆえ、ボスニア州政府は、1882年10月17日、イスラームの最高宗教指導者レイス・ウル・ウレマー職の設置を通じて、ボスニアでのスルタンの統治権を骨抜きにする政策に着手した。これに対して、オスマン帝国は、先述の協定に従い、スルタン及びシェイヒュルイスラームのみがその任命権を保持しようと強く主張した。さらに、ボスニアのムスリム内でも、自らの宗教指導者の任命権がカリフとしてのスルタンの唯一の権限であると主張し、「スルタンこそがボスニアの最高権力者である」と訴える嘆願活動が展開された。

以上の聖職の設置をめぐる争いに関して、従来の研究では、州政府に抗したムスリムの行動が強調されるあまり、新たな聖職設置のハプスブルク帝国側の意図や、オスマン帝国との政治的関係についてはほとんど看過されてきた。それゆえ、本報告では、ハプスブルク帝国側の行政・外交文書とムスリムの嘆願書の包括的な分析を通じて、ハプスブルク帝国がいかにしてイスラームの宗教的・法的伝統に向き合い、ボスニアで新たな統治体制を確立したのかという問題を考察する。

フランス第三共和政前期における帰化手続き

尾崎 俊輔

フランスにおける移民史研究では近年、移民の政治的側面により関心が向けられている。第三共和政前期（1870-1914年）のフランスについて、この問題を扱った研究はこれまで、外国人にまつわる法制度—とりわけ国籍法—の変遷、およびそれらが成立した背景に主な関心を寄せてきた。ここ数年では、法制度のより包括的な把握と同時に、法が行政を通じて実際どのように適用されたのかという点に比重が置かれつつある。

本報告は、国籍取得の一つの手段である帰化を取り上げ、その実施の側面を明らかにしようとする試みである。帰化が可能となるための要件は法に記されている。だが、その要件にかなう者すべてがフランス国籍を取得できるわけではない。法にある要件は、それを満たしていれば帰化を申請できるという、いわば申請資格とみなすべきであろう。では帰化が認可されるか却下されるか、これはいかにして決められるのか。どのような機関が関与し、最終的な決定はどういった要因に左右されるのか。法とその適用との間にある隔たりともいべきこの点を明らかにするには、実際の帰化申請の手続きを分析することが必要となる。

史料は主に、申請者に関する調査書や報告書などを収めた個人の帰化ファイルを使用する。申請の中には、認可されたものだけでなく却下されたものもあり、いずれの場合も決定に至るまでの過程をたどることができる。さらに、各ファイルには決定にあたって根拠を示す記述が残されており、それをもとに、帰化の条件について踏み込んだ考察をおこなうことが可能である。

ファイルを、帰化申請の事例を具体的に見ていくための手がかりとすると同時に、より大きな問い（この時期フランスで国民の枠組みがいかに画定されていたのか、国籍や市民権という概念をどのようにとらえればよいのか、など）へと開いていくことも、本報告のいま一つの目的である。そのさい、視野をフランス本土にとどめず植民地にまで広げてみたい。

19世紀末から20世紀初頭にかけての
ロシア・ユダヤ人のアメリカ移民について
— ロシア側の視点から —

中谷 昌弘

近年ロシアでは、帝政時代末期にアメリカに移住したユダヤ人に対する関心が高まっている。というのも、19世紀末から20世紀初頭にかけて多くのロシア・ユダヤ人がアメリカへ移住しているからだ。この当時ユダヤ人人口が最も多かったのはロシア帝国（約520～30万人、世界のユダヤ人の約40%にあたる）であった。そして現在アメリカに居住しているユダヤ人（約528万人、世界のユダヤ人の約40%）の出自をたどってみると、その多くがロシア帝国からの移民であることがわかっている。

ではなぜ彼らは、はるばる大西洋を超えてアメリカに移住したのだろうか。研究史を紐解いてみると、おおよそ次の3つの要因が挙げられている。

- ①「ポグロム」（ユダヤ人に対する暴行、略奪など）
- ②「政治的要因」（ユダヤ人に対する差別・排除政策）
- ③「経済的要因」（経済的貧困からの脱出）

①に関して言えば、ポグロムが多発した1881年や1905～06年（あるいはその翌年）にはロシア・ユダヤ人の移民数が増加している。また②について、約2万人のユダヤ人がモスクワから追放された1891年にも移民数が増加した。しかし③の要因を主張する野村達朗は、移民の出身地が「ポグロムの激しかった南ロシアではなく、経済的にもっとも貧しかった北西ロシアだった」点を指摘して、「ユダヤ人の移住のすべてを弾圧とポグロムに帰することはできない」としている¹⁾。

本報告では、アメリカ側だけでなくロシア側の史料も参照し、主にロシア側の視点からロシア・ユダヤ人のアメリカ移民の実態に迫ってみたい。具体的にはアメリカ移民の要因となった上記の3点（特にポグロム）について検討する。そしてユダヤ人移民の分析とあわせて、これらの要因がユダヤ人のアメリカ移民にどのように影響したのか（あるいはしなかったのか）、また他の要因はなかったのかを検討する。

1) 野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク—移民の生活と労働の世界』（山川出版社、1995年）38頁。

日露戦争とユダヤ系アメリカ人銀行家ジェイコブ・シフ — ユダヤ史の視点から —

村岡 美奈

近年まで日露戦争研究はさほど盛んではなかったが、100周年を機に各国の歴史家が新しい視点から盛んに研究を行っている。戦争時に日本の多額な外債を引き受けたユダヤ系アメリカ人銀行家ジェイコブ・H・シフ（1847-1920）の援助がなければ日本が日露戦争で勝利を取めることはほぼ不可能であったにもかかわらず、シフの貢献は長い間日本でも海外でも注目されることはなかった。シフは、没後一世紀近く経った現在でも、アメリカのユダヤ社会で名前を知らない者はいないほど、様々な分野に多大な影響を与えた人物であった。本報告は従来の日露戦争史におけるシフ研究ではなく、ユダヤ史においてシフの日露戦争関与はどのような意味があったのかを考察する。

19世紀後半にドイツからアメリカに渡り、ニューヨークでモルガンに続く第2の銀行家に成長したシフは、20世紀初頭すでにアメリカのユダヤ社会のリーダーであった。以前からロシアの反ユダヤ主義に注目していた彼は、1903年のキシニフのポグロムに多大なショックを受け、翌年に日露戦争が勃発すると、日本を金銭的に援助することがロシア政府に打撃を与え、さらにはユダヤ人の置かれている苦境が改善されることにつながるかもしれないと考えたのである。すなわち、シフの動機はユダヤ人ならではであった。シフの個人的なロシア政府に対する攻撃は、日本の公債を発行するに留まらず、日本に収容されていたロシア兵捕虜に配布された反政府運動のパンフレット発行に対しての金銭的な援助にも及んだ。ポーツマス条約締結の際には、ロシア代表のウイッテとユダヤ人の置かれている状況について話し合うために会談の機会を設けた。このような彼の行動は実際に影響力があり、後に反ユダヤ主義を唱える者に、ユダヤ陰謀説の証拠の一例としても挙げられた。また、日露戦争を機に日本とも交流があり、1906年に来日した際には明治天皇に謁見し、高橋是清とは生涯家族ぐるみの交流があった。当時ユダヤ人とはほとんど交流のなかった日本にとって、シフは日本人がユダヤ人を認識するきっかけを与えた重要な人物であったと思われる。

本報告では、イギリスのユダヤ系新聞 *Jewish Chronicle* の記事や American Jewish Archives のシフ資料などの一次文献と、イスラエルで発表された論文を含む幅広い二次文献を検討し、ユダヤ人のシフの個人的な日露戦争関与は、ユダヤ史においてどのような意味があり、影響があったのかを明らかにしたい。

戦間期プラハにおける郊外住宅団地と住民層 — 「家族用小住宅」の実現にみるチェコスロヴァキアの社会政策 —

森下 嘉之

建国期のチェコスロヴァキア共和国は、国民国家形成にあたって、当時の欧州諸国において喫緊の課題であった都市下層民に対する社会政策の整備に迫られていた。19世紀末の都市化に伴って生じた住環境の悪化によって、社会改革家による様々な住宅改革運動及び自治体や政府による住宅供給が要求されたが、チェコ新政府は英国などのような公営住宅の供給政策ではなく、「自助」を原則とする住宅組合への建設費援助に重点をおいた。戦間期チェコの自治体において、一党支配による公営住宅の供給ではなく、住宅組合への援助政策が選択された背景には、チェコにおける住宅・社会政策が社会主義政党と農業党など市民政党との政党間協調によって、その利益集団の利害を調整するなかで整備された事情があった。本報告で取り上げる、プラハ・スポジロフ住宅団地は、戦間期チェコスロヴァキア最大の住宅組合であり、帝政期以来の賃貸集合住宅ではなく、「低所得者層に健康で安価な」庭付き戸建小住宅を供給することを目的として設立された。その一方で、同組合は英国田園都市のような土地の公有化ではなく、小住宅を「持家」として住宅組合員に所有させることを目的としており、「貯蓄」を語源とする「スポジロフ」という名称自体が、当時のチェコにおける住宅改革運動の性格を反映していた。その結果、住民構成は当初対象とされていた都市下層民よりも、中間層組合員を中心として均質化された。金融機関による住宅建設援助を中心とした施策は、戦間期チェコの経済・社会政策の自由主義的性格を体現していたと考えられるが、同組合の運営にあたっては、当時のプラハ市議会議員が多く参加し、市からも用地提供など多くの便宜を図られるなど、公的機関の影響を強く受けていた。本報告では新国家チェコにおける住宅・社会政策について、戦間期に誕生した郊外住宅団地における住民階層の分析を通して、新政府が目指した住宅・社会政策が住民側の実態にどのように応えたのか、社会政策の整備がチェコスロヴァキア国民国家形成においてどのような役割を果たしたのかを考察したい。

タデウシ・ジェドゥシツキの国家構想

仲津由希子

ジェドゥシツキ (Tadeusz Dzieduszycki 1896-1976) とは、1926年5月政変後のポーランドにおいて、『ファシスト運動と協同組合国家理論、ならびに民主主義理念の実現に寄与する組織と「学問による操舵」の諸基盤』、『職業国家体制とその効用の近代的基盤について：連帯主義とエリート主義』、『近代の公正な国家性理論について (フーバー、ムッソリーニ、ピウスツキ)』、『ポーランドの労働アカデミーについて (上からの合理化)』(1927-1929年) という連作を発表した人物である。これらの著作は当時、体制派、反体制派に関わりなく注目を集めた。

彼の著作に通底するのは、

- 1) 西欧諸国は、基本的に自助努力ができ、かつ相互に信用する能力もある市民から構成されるので、経済自由主義が有効な考え方として通用する。しかしこれらの能力をもたない人々から構成されるポーランドでは、経済自由主義の導入は、人々の間に悪戯に敵愾心を煽るだけとなる。
- 2) それ故、ポーランドでも経済自由主義等の諸価値の実現を図るには、まず自助努力や相互信用といった社会資本を蓄える必要がある。その際、重要なのは、市民的能力を欠いた親や周囲の人間を見ながら育つから、市民的能力をもたないポーランド人が再生産され続けてきた、という現状理解である。
- 3) この悪循環を断ち切る道筋は、深い人間理解と人間・経済等に関する専門的学識をもつエリートが、それに基づく諸政策を施すことにより、市民的行動がとれる未来のポーランド人を漸進的に育成していくことである。

という社会政策／工学的な市民育成構想である。彼の論理構成は、自由で自発的な一個人が育成されるには何が必要か、を思索の出発点にすえ、逆算していく形で、様々な社会的・制度的条件全体の段階的な社会的操作を試みようとするものだった。その発想は、合理主義的・科学主義的な面や大衆を動員しない点で、ファシズムとやや異なるだろう。またともすれば個人主義か共同体主義かで議論が先鋭化しがちな社会主義運動や西欧一般の自由主義とも、やや異なる側面をもっていたと思われる。

大戦間期ポーランドの政治については、民族主義的か否かといった外在的な歴史的評価が中心で、当事者の理念等に関する内在的な理解は不足してきた。本発表は、ジェドゥシツキの国家構想を思想史の立場から検討し、この理解の一助とすることを目的とする。

戦間期ドイツ・オーストリアの地域的経済統合構想

— リヒャルト・リードルを中心に —

北村 厚

戦間期のヨーロッパ統合構想については、従来、「EU前史」として、「パン・ヨーロッパ」論やブリアン外相の「ヨーロッパ連邦」計画が取り上げられてきた。しかし近年では、シュトレゼマンの構想や地域的経済統合としての国際カルテル論などが「ヨーロッパ統合史」の一要素として注目されるようになった。こうした研究の動きは、「ヨーロッパ統合史」を単に「EU前史」として捉えるのではなく、それ以外のオルタナティブに注目することで、「ヨーロッパ統合史」の持つ多様な歴史的可能性を追求する試みである。そして1931年の独逸関税同盟計画もまた、戦間期の重要な地域的経済統合構想と考えられる。

しかし多くの研究者は、独逸関税同盟計画はヨーロッパ統合を隠れ蓑にした、将来的な「アンシュルス(独逸合併)」の経済的準備に他ならないとしてきた。しかし、ドイツとオーストリアの政策立案者たちが、計画をヨーロッパ関税同盟への第一歩として位置づけていたこともまた、史料から指摘できる。こうした両義性をどのように説明することができるであろうか。そこで注目するのが、オーストリアの駐独公使であったリヒャルト・リードル(Richard Riedl)という人物である。

「ヨーロッパ統合」と「アンシュルス」の両義性という地域統合構想の性格を明らかにする上で、リードルは極めて重要な人物である。彼はオーストリア国内の「アンシュルス」運動に参加する一方で、国際商業会議所の代表の一人として、独自のヨーロッパ関税同盟構想を主張した。この構想は、隣国との関税同盟を一般的最恵国待遇の例外とし、ヨーロッパに複数の地域的関税同盟を形成し、段階的にヨーロッパ関税同盟へと発展させるというものであった。リードルはこの構想を、1927年の世界経済会議向けの覚書によって国際法体系の一般理論として正当化しようとし、外交官としてドイツ外交の方針に影響を与え、「アンシュルス」組織である独逸活動共同体を通じて独逸関税同盟の実践的理論としたのである。

本報告では、同時代文献と刊行史料集および文書館史料に散見される、リードルと地域的経済統合構想に関する史料から、リードルのヨーロッパ関税同盟構想の理論と展開、とりわけ独逸通商条約交渉から独逸関税同盟計画に至る政策決定過程に焦点を当て、戦間期ドイツ・オーストリアの地域的経済統合構想にリードルが果たした役割を明らかにする。

戦間期のスロヴァキアにおける「首都」論

— F・ルッペルトのマルティン支持論を手掛かりに —

香坂 直樹

本報告はスロヴァキアの「首都」に関する戦間期の議論に注目する。スロヴァキアは1918年のチェコスロヴァキア建国以前のハンガリー王国では単一の行政単位ではなく、国境線画定の後に州制度法に基づくスロヴァキア州の成立(1928年)を通じて初めて現在の領域が公式に登場した。ところで政治行政の中核ないし文化生活の中心としての首都に関する議論は各国民国家の心理地図の重要な要素だが、ここでもスロヴァキアの経験は独特である。王国時代にはスロヴァキア全域を管轄する行政の中核はブダペスト以外には存在しなかった。他方19世紀中盤以降は中部スロヴァキアのマルティンがスロヴァキア民族運動の中心地と認識されていたが、世紀転換期前後からは革新的な活動家はブダペストなどに拠点を移す傾向を見せた。首都についてもチェコスロヴァキア建国が転機となる。新国家への統合促進のために中央政府が任命した統治全権大臣が1919年2月にブラチスラヴァへ臨時政府を移したのである。当時の同市はマジャル系やドイツ系の住民が多数派を占めたが、域内最大都市の領有を既成事実化する意図からも移転が実施された。1928年には州制度施行に伴い州庁所在地となる。この展開に反対したのが本報告で注目するフェドル・ルッペルトである。既に彼は1918年末の時点でスロヴァキア国民会議を代表して臨時政府のマルティン移転を主張する議論を展開した。1920年代後半には地方行政制度改革の議論に合わせて再度首都に関する論考を提示し、最終的には州庁と大学のマルティンへの移転を要求した。彼はスロヴァキアの最周縁にあるブラチスラヴァとは異なりマルティンは各地への利便性が良いという地理的要因や民族運動の中心地という歴史的地位に加え、より安価な都市整備という経済的合理性や中部スロヴァキアの貧困救済の必要などを主張の根拠に掲げた。だが同時にスロヴァキアを独立したスロヴァキア民族の成員のみの領域とみなす視点に依拠しており、ここからブラチスラヴァへの投資はマジャル系やドイツ系など反共和国的な民族的少数派を利するのみとの政府批判を導く。また彼は政治的には農業党に属した与党系の人物だが、『国民新聞』など野党系のメディアを通じて発信した。彼の議論は戦間期のスロヴァキアの政治的議論と地域認識を中央集権派対自治派という対立軸とは異なる位相から把握する必要も示していると言えよう。

ヴァイマル時代のジークフリート・クラカウアー

— 個人主義的な危機克服の試み —

吉野恭一郎

ジークフリート・クラカウアーは、ヴァイマル時代を代表する知識人の一人であり、ベンヤミンやアドルノなどとも、問題関心や思想的立場を少なからず共有していた。しかし、クラカウアーに関する研究は、それらの人々と較べると圧倒的に少ない。その一因として考えられるのは、両者の業績に見られる質的な相違である。アドルノらがフランクフルト学派に代表される思想的潮流を創出し、体系化したことに較べると、クラカウアーの研究者・思想家としての仕事は、確かに示唆に富んだものではあるが、その深度と完成度において一段低いものであったという印象は否めない。

また先行研究では、クラカウアーの思想的特徴を分析し、それをヴァイマル・ドイツの社会情勢や政治的変動と関連づけたものが主流である。しかし、そこで示された諸特徴は、ベンヤミンやアドルノにも、しばしばより洗練された形で散見されるため、クラカウアーがその問題意識や世界観において彼らと共通する立場にあったことを示唆するものではあっても、そこに新たな価値や発見を付与するものではなかった。

したがってこれまでの研究は、ヴァイマル期の左派知識人の傾向を実証的に補強するといった成果を上げた一方で、クラカウアー独自の研究意義という点で課題を抱えている。

本報告では、クラカウアーが展開した思想の内容そのものよりも、その思想がどのような使われ方をしたのか、彼自身にとって、それがどういう意味を持ち得たのかに焦点を当てた考察を行う。というのも、この時期のクラカウアーは、社会問題を対象とした論文を数多く書き残しているが、そこでは具体的な社会政策よりも、個人単位での克服について述べられる傾向が強かったからである。したがって彼の言説は、政治的・社会的危機を直接的に解決するというより、むしろそうした困難な状況を前提としたうえで、個人がどのように生きるべきかを自問自答したものであり、彼個人が抱えていた問題に対処すべく発せられたものであった。

こうした特徴に着目することは、彼独自の研究意義を模索する上で重要な意味を持っている。ヴァイマル時代に一個人として生きるということが、どういうことであったのかを考察する場合、個人的な動機や背景をより強く映し出しているクラカウアーには、その文学性・学問性によって高度の普遍性を帯びたベンヤミンやアドルノとは異なる在り方を、認めることが出来るからである。

アメリカ合衆国における都市再開発と黒人コミュニティ — 20世紀中葉のシカゴ、ウエスト・サイドを中心に —

武井 寛

本報告は、20世紀中葉のアメリカ合衆国のシカゴにおいて、州や市などの行政が中心となって行った都市再開発が、人種・エスニック集団の居住コミュニティに与えた影響を、特に黒人コミュニティに焦点を当てて検討する。アメリカ合衆国における都市再開発（urban renewal）とは、主に都市中心部の荒廃した地域を公的な援助のもとで、老朽化した建物の取り壊し、スラムの一掃（slum clearance）、公営住宅の建設などの様々な方法で再活性化することを目指した活動を意味する。

本報告ではシカゴのウエスト・サイドと呼ばれるコミュニティを考察対象とする。ウエスト・サイドは、20世紀初頭に小規模ながら黒人居住区が形成されつつあったが、歴史的にドイツ系移民やイタリア系移民、ユダヤ系移民などヨーロッパ各地からの移民に加えて、メキシコ人の多くが居住した地域である。シカゴの主な黒人居住区は、ダウンタウンより南へと広がるサウス・サイドであった。しかし、第二次世界大戦前後にはシカゴの黒人人口が急増し、ウエスト・サイドは新たな黒人居住区の一つとなった。ウエスト・サイドの黒人の多くは、1930年代以降に南部から移住してきた者やサウス・サイドから移転してきた人々であった。

ウエスト・サイドの人種構成が変化する中で、黒人は都市再開発の名の下に強制移転で最も大きな被害を受けた人々であった。北部では南部のような法的な人種隔離制度が存在していなくても、黒人は私的約款や住宅規制などを受けて居住空間が制限されていた。それゆえ、黒人人口は歴史的に荒廃した地域に集中しており、居住区は過密した状況が続いていた。都市再開発はシカゴ市の向上という理由で、荒廃した黒人居住区の改善も念頭にあった。ところが、都市再開発として行われたスラムの一掃は、「黒人除去（negro removal）」と呼ばれるほど黒人コミュニティに破壊的なダメージを与えていた。このようにウエスト・サイドの黒人居住区は、ダウンタウン中心部の都市再開発の影響を多分に受けながら形成されていた。

本報告では、シカゴ行政府が第二次世界大戦後の復員軍人の福祉政策や住宅政策などの連邦政府の援助と密接に関連しながら、都市再開発を用いて黒人居住区を規定していく過程を、シカゴのウエスト・サイドという具体的な地域に注目して明らかにしたい。

レッド・パワー・ムーブメントとインディアン雇用優遇措置 — コロラド州リトルトンにおける運動を事例として —

大野あずさ

1960年代後半から1970年代前半にかけて、レッド・パワー・ムーブメント（Red Power Movement）と呼ばれるアメリカ・インディアン復権運動が活発になった。1969年のアルカトラズ島占拠を皮切りに、「破られた条約の旅」（1972年）、第二次ウンデッド・ニー（1973年）といった抗議行動が展開された。この一連のレッド・パワーの活動の中で、本報告では特に1970年にコロラド州リトルトンで始まった抗議行動と、それに伴い裁判所で繰り広げられた権利闘争に注目する。これは、デンバー郊外のリトルトンにあった連邦インディアン局設備管理技術センターで、インディアン職員たちが自らに向けられた差別的行為に関して告発したことに始まる。1934年のインディアン再組織法（Indian Reorganization Act）では、インディアン局職員の採用や昇進の際、インディアンを優遇する明示していたにも関わらず、実際には非インディアン職員たちが優遇されていたというであった。インディアン優遇措置（Indian preference）の遂行を求めたインディアン職員らは、地元インディアン団体やアメリカン・インディアン・ムーブメント（AIM）などの団体からも支持を集め、抗議活動を開始した。デンバー郊外のインディアン局事務所で始まったこの運動は全米に広がり、各地でインディアン活動家たちによるデモ行進や連邦関連施設占拠といった直接行動が行われた。それと同時に、全国インディアン青年評議会（NIYC）が中心となってインディアン局を相手取り、訴訟も起こしたのであった。その結果、インディアン局は職員の採用の際には、インディアン候補者を優先して採用するという1934年以来の方針を再度徹底することを約束するに至った。この動きはまた、1960年代末より推進された先住民の自決政策（Indian Self-Determination Policy）の一環として、インディアンに関連する連邦プログラム等はインディアン自身による自己管理を支援するという方針に従ったものでもあった。しかしその一方で、非インディアン職員の側からは、インディアン職員に対する優遇措置は雇用機会均等法に反し、非インディアンに対する人種差別にあたるとして、インディアン局を訴えるものも現れた。そこで本報告では、主にインディアン局とインディアン諸団体の史料を用いて、このインディアン雇用優遇措置にまつわる一連の抗議運動と訴訟について、特に「インディアン優遇措置」対「人種差別」という議論に注目し、検討を加えたい。

1960年代以降のロシア・ナショナリズムと A・タルコフスキーの『アンドレイ・ルブリョフ』

高橋沙奈美

1960年代のソヴィエト・ロシアにおけるもっとも顕著な思潮として「ロシア・ナショナリズム」が上げられる。当時の「ロシア・ナショナリズム」は、体制批判的な論者の一方で、公式のイデオロギー用語の枠内でロシアの歴史や伝統を再評価していこうという、体制内の論者も内包する両義的現象であった。本報告では、同時代のA・タルコフスキー(1932-1986)の映画『アンドレイ・ルブリョフ』(1962-1971)の作品とその評価の分析を通じて、後者の問題を検討する。

第二次世界大戦下の少年のひたむきな自己犠牲を扱った前作『僕の村は戦場だった』(1962年)が、ベネツィア国際映画祭金獅子賞を受賞して以来、タルコフスキーは期待の若手監督として、国家イデオロギーの新しい表象を囑望される身となった。『アンドレイ・ルブリョフ』は、革命以前の「ロシア的な」史跡・文化財への社会的・政治的な関心が高まる中で製作されたが、完成した作品はイデオログの期待を大きく裏切り、公開まで5年以上にわたる編集を強いられた。

ロシア芸術の至宝としてのアンドレイ・ルブリョフのアイコン画の評価は、1960年のルブリョフ生誕600年をめぐる文芸界の盛り上がりによって再確認されたといえる。1961年に構想が練られはじめたタルコフスキーの『ルブリョフ』は、ルブリョフのアイコンとともに、ルーシ諸都市の史跡をプロパガンダするはずのものでもあった。時代背景はクリコヴォの戦い(1380年)でタタールに対して大勝をおさめたルーシ。勝利に沸くナロードと、その中で芸術家として活躍する天才ルブリョフ——それが、体制内ロシア・ナショナリストがこの作品に期待した構図であった。

当時の公式見解によれば、宗教芸術はナロードが生んだものとして鑑賞されるべきものであり、タルコフスキーはこの点に忠実に従った。最も厳しい苦難の中でこそ至高の芸術は誕生するのだというタルコフスキーの個人的理念は、封建体制とタタールのくびきの二重の重圧に苦しむ「ナロード」とその一人として生きるルブリョフのイメージに重ね合わせられた。本報告では、党とモスフィルムの変遷から作品の社会的受容について検討し、体制内ロシア・ナショナリズムの実態とその社会的影響力について考察を加える。

1970年代のイギリス外交と米欧関係 — ウィルソン政権期を中心に —

岡本 宜高

本発表は、冷戦と欧州統合の相互関係に着目することで、欧州地域統合と対米関係のはざままで揺れ動いた1970年代のイギリス外交の特質を、1974年から1976年までのウィルソン労働党政権期を中心に総合的に把握することを目指す実証的研究である。

イギリスは、戦後最も親欧州的といわれるヒース保守党政権のもとで、1973年にECへの正式加盟を果たした。同政権が加盟を推進した背景には、EC加盟によって欧州統合に主導的役割を果たすと同時に、その役割を通じてアメリカとの「特別な関係」を維持し、それらによって国際的な影響力を確保したいという意図が含まれていた。一方このころ、アメリカのヘゲモニーの相対的低下と東西冷戦における緊張緩和の進展を受けて、欧州諸国は統合の発展を通じて独自性を強めようとしていたが、1970年代半ばにさしかかると、デタントの減速と欧州統合の停滞が明らかになり始めていた。対米自立を図ろうとする欧州との関係と対米関係の両立を試みるイギリスは、こうした外交政策の基盤を揺るがしかねない冷戦下の欧州国際関係の変化を前にして、新たな対応を迫られることとなったのである。

本発表では、1970年代の冷戦と欧州統合双方における新たな展開が、EC加盟後のイギリス外交にいかなる影響を与え、またイギリスの対応が米欧関係の中でどのように作用したのかを明らかにすることを試みる。ECへの正式加盟によって欧州統合により深く関与することは、イギリスが欧州国際関係の変容の中でそれまで以上に米欧関係の間、すなわち地域統合と対米関係のはざまに立たされる可能性をも意味していた。こうした状況で、ウィルソン政権は冷戦下の国際関係の中でイギリスをどのように位置付け、外交政策を構想していったのか。同政権のもとのイギリス外交については、ヒース前政権の親欧州的姿勢と異なり、英米関係やいわゆる「大西洋共同体」をより重視する方向に変容したとする評価がなされてきた。本発表では、こうした従来の一般的理解についても上記のような問題関心に基づいて再考察を試みる。以上のような冷戦と欧州統合の交錯を分析する取り組みを通じて、1970年代の世界におけるイギリス／欧州の位置づけを再検証し、現代史における新たな認識視座を提供することを目指したい。

小シンポジウム I

6月14日(日) 14:00-17:00 10号館1階10101教室

前近代における政変・反乱と記憶

報告者：高橋秀樹（新潟大学）

「アルカイク期アテナイの党争と神話

— ペイストラトス家の僭主政 —」

根津由喜夫（金沢大学）

「11世紀コンスタンティノーブルの都市騒乱

— 皇帝改廃劇のシナリオ —」

楠 義彦（東北学院大学）

「1536-37年イングランド北部諸州の乱とその歴史化」

清水和裕（九州大学）

「ザイドの反乱

— 初期イスラーム共同体の『暴力』という記憶 —」

司 会：高橋秀樹（新潟大学）

趣旨説明

前近代と近現代の歴史学研究において大きく異なることの一つは、扱うことのできる史資料の質と量に圧倒的な差があることである。今回の全体テーマである暴力・戦争と記憶・公式化という問題については、暴力を振るう側と振られる側の双方についてそれぞれある程度の情報が残っていなければ取り扱うことが難しいが、前近代の事象については、その片方についての史資料しか残っていないことが多く、とりわけ戦争については、しばしば勝者の側からしか知ることができない。また、記憶・定式化という点に関しても、重要な歴史的出来事について、断片的で非連続的な情報しか残されておらず、記憶の定式化へと至るプロセスやその経緯に影響を与えた事象等がほとんどわからない場合も少なくない。

このような状況でできるだけ全体テーマに関係する事例を扱うため、この小シンポジウムでは、一つの社会の内に暴力を振るう側と振られる側の両方が存在し、またそれゆえに連続的に記憶の処理の様子やその社会的意味が辿りうるような事例に目を向けていくことにしたい。つまり、共通の価値観を持つ集団の中で、政変・反乱という暴力が発生する場合、それをコントロールする装置として、理念や宗教と密接に関わりつつ遺されていく記憶・記録は、どのように機能するか、という問題を、いくつかの具体的事例を提示していくことを通して考えていきたい。

西洋史の前近代に関する小シンポジウムということなので、古代地中海世界と中世西欧世界、さらにビザンツ世界とイスラーム世界からそれぞれ事例を提示することにした。一千年以上に及ぶビザンツ帝国の歴史は、ヨーロッパ史の欠くべからざる一面であったことは言うまでもない。政治的にも文化的にも、ヨーロッパ内での東西の交流と対立がよかれあしかれヨーロッパの歴史を動かしてきた。また、ヨーロッパ史がギリシア・ローマ史をその起点とし、その淵源を古代オリエントに求めるならば、ヘレニズム世界・ローマ世界の版図の多くを継承し、またスペインや近世においてはバルカン半島にも広がったイスラーム世界は、文化的にはヨーロッパの兄弟であり、政治的にはヨーロッパ史の欠くことのできないひとこまであると言うことができる。イスラーム共同体は、ヨーロッパと共に地中海世界を形づくり、これをアジアへとリンクさせる媒介者でもあったのである。

上記の問題について、これらの事例に共通する要素、それぞれの事例に個性的な要素を浮かび上がらせつつ、議論を深めていきたい。

アルカイック期アテナイの党争と神話
— ペイシストラトス家の僭主政 —

高橋 秀樹

本小シンポジウムの趣旨に即して古代地中海世界の中から取り上げる事例として、ギリシアのアテナイでアルカイック期に発生した僭主政—ペイシストラトス家の僭主政—に注目したい。僭主政は、アルカイック期の政治家であり詩人でもあったソロンが、その詩篇の中で、暴力をもって行う政治として定義している。市民が同胞市民に対して暴力を振るう政治体制である僭主政において、理念や宗教と密接に関わりつつ遺されていく記憶・記録は、どのように機能したであろうか。

当該の政権は、紀元前五六一／〇年の最初の政権樹立の試みの後、最初の追放、二度目の政権樹立とその追放を経て、三度目の政権樹立によって安定し、その後は五一一／〇年に倒壊するまで親子二代にわたって続いた。全体として動乱の時代であったと言え、それだけに様々な伝承が残されている。

それらの伝承群について従来よく行われてきた作業は、「平民」がどのように成長（政治的・経済的・社会的上昇と「貴族」との対立）していったか、あるいは、当該政権が古典期の民主政をどのように準備していったか、または、当該政権中にポリス社会を構成する市民団がどのように構成（あるいは結晶化）されていったか、という現象をいかに合理的に読み込んでいくかというものであった。それらの作業においては、当時のアテナイ人たちが明解な政治的行動を合理的に営む主体であることが前提とされてきたように思われる。

しかし当該政権が生まれる一時代前、ソロンの改革（紀元前五九四／三年）の時期においては、ソロンの詩篇が示しているように、政治は神々の領域と密接な関係にあるものであって、当然神々からの干渉もあるものと意識されていた。激動の時代であったとはいえ、このような意識が続く数十年で一気に薄れていくものとは考えにくい。

ペイシストラトス家の僭主政にまつわる諸伝承を、神話的な記憶・記録という点から見た場合、どのような様相が見えてくるか、本報告で考察し、第二報告以下の導入としたい。

11世紀コンスタンティノーブルの都市騒乱 — 皇帝改廃劇のシナリオ —

根津由喜夫

一千年以上に及ぶビザンツ帝国の歴史は、打ち続く内乱や陰謀事件に満ちていることはよく知られている。神から地上の世界の支配権を委ねられたはずの皇帝は、しばしば国内の諸勢力の激しい反抗に悩まされ、多くの君主が意に反して帝位を退くことを余儀なくされ。だが、政権に絶えず動揺をもたらす、こうした不安定な政治状況と、一千年以上に及ぶ帝国の存続はいかにして両立しえたのだろうか。

今回の報告では、長いビザンツ史の中でも、とりわけ短期間に帝位の交替が相次いだ11世紀に焦点を当て、帝都コンスタンティノーブルで繰り広げられた一連の騒乱の本質を解明する作業に取り組みたいと考えている。

こうした研究の分野では、すでに我が国においても、渡辺金一氏の国制史的観点に基づく研究や、この当時、首都民衆がおかれた社会経済的状况に着目した井上浩一氏の研究があるが、本報告では、渡辺氏の視点を引き継ぎつつ、同氏の論法では十分に説明が尽くせなかった、なぜ、この時期にこの種の騒乱が集中し、しかもそれが帝位交替にまで発展したのか、という疑問に対して有効な解答を見出すことを目指したい。

そうした視角から、とくに注目されるのは、従来の研究では十分、関心が払われてこなかった総主教をはじめとする首都の教会勢力の機能である。彼らは、しばしば、調整役として振る舞い、政争の着地点を明確にする上で無視できぬ役割を果たしていたように思われる。さらに、これらの騒乱で主要な役割を担った元老院、教会人、首都市民のそれぞれが、この時期、歴代皇帝政権の施策とも相俟って、相互の人的交流が進行し、人脈的にも、行動様式的にも、互いに連携して行動する潜在力が高められたことも看過すべきではないだろう。

これらの権力闘争は、言うまでもなく、同一の国家に帰属する同胞間の抗争であり、相手を壊滅させれば、国力の減退に直結する、というジレンマが常に存在した。当事者たちは、そうした闘争が国家に与えるダメージを最小限に抑制する解決策を、繰り返される騒乱の中で探求し、それを行動の規範として実践する道を開いていったのである。

1536-37年イングランド北部諸州の乱とその歴史化

楠 義彦

中世キリスト教社会における政変・反乱と記憶との関係性の一例として、北部諸州の乱を取り上げる。この反乱はイングランド北部を舞台にした中世末期の大反乱の1つで、5万人の反徒に対し、国王軍はわずか8000人と、国王にとって重大な脅威であった。

1536年10月リンカーンシャーで勃発した反乱が収束した後、ヨークシャーでの反乱の指導者 Robert Aske は、自らを「恩寵の巡礼」(pilgrimage of grace) と呼んだ。ここでの「恩寵」や「巡礼」は「国王からの」恩寵であり、また「国王への」巡礼の意味である。同年8月の国王の Injunctions が、聖人への巡礼を迷信で偽善として禁止した直後のことであり、「巡礼」との呼称は意識的に行なわれたものと考えられる。反徒は12月から1月にかけて国王から赦免を得たものの、別の指導者による反乱が再発したために鎮圧され、最終的に反逆罪として Aske を含む216名が処刑された。

これらの反乱については20世紀前半の R.&M.Dodds (1915) の包括的な研究が権威とされてきた。概して80年代まで、修道院解散への抗議を主たる原因とし世俗的な不満を二義的なものと見る傾向があった。富岡次郎氏の『イギリス農民一揆の研究』(1965)も基本的には Dodds の延長線上にある。1381年の農民一揆に遡る民衆蜂起の伝統に位置づけた M.Bush (1996 他) が登場してから、90年代以降研究は再び活性化している。教会財産の没収や教区教会の閉鎖といった教区ベースの信仰の危機を強調するなど、修道院解散に限定されない保守主義と、課税への不満を底流とする民衆蜂起が結び付き、ジェントリの参加により政治化したと考える研究が多い。

この反乱は Edward Hall (1548²)、Richard Grafton (1569)、Raphael Holinshed (1586) といった同時代の年代記作家と、John Fox の *Acts and Monuments* (『殉教者列伝』) (1563) に取り上げられている。本報告では反乱の原因や起動力、反乱が国家や社会にもたらした結果などには極力触れないで、この反乱に関する記録と同時代の歴史叙述を手がかりに、記憶と歴史化の問題を考えてみたい。

ザイドの反乱
— 初期イスラーム共同体の「暴力」という記憶 —

清水 和裕

共同体に共通の価値や規範の記憶が、ときに暴力の発現をコントロールすると同様に、そのような記憶はときに否応なく暴力の発現を導く。宗教としての初期イスラームの歴史は、巨大な帝国を形成し支配体制を確立する政治運動の歴史でもある。このため初期イスラーム史に発生した様々な政治的事件は、価値・規範としてのイスラームのなかに神学的宗教的意味づけを施されて取り込まれている。それらの事件の記憶は、特定の文脈において、現代においてすら強烈な宗教的情熱を喚起し、生々しい暴力を喚起するのである。

西暦740年に発生したザイドの反乱は、そのような政治的歴史的記憶が人々を空虚な反乱へと導いた、最初期の例である。預言者ムハンマドの孫フサインのさらに孫であるザイドは、偶然の導きでクーファという町に赴き、その町の住民に担がれてウマイヤ朝に対する反乱の首謀者となった。しかし彼に忠誠を誓った1万5千人のうち、実際に反乱に参加したのはわずか220人であり、その反乱は政府総督によって瞬く間に鎮圧される。

この悲劇／喜劇を生み出したのは、フサインの孫というザイドの血と、クーファという「場」に染みついた暴力の記憶である。預言者ムハンマドの女婿である第4代カリフ・アリーが、イスラーム共同体の指導権を巡ってウマイヤ家と闘争して以来、アリーの直系である人々は、フサインやザイドを含めて、つねに反政府活動の象徴として扱われてきた。暴力闘争のなかで悲劇的な死を遂げたアリーやフサインの記憶は、彼らの血に受け継がれたのであり、このことはいわば社会的合意となっていた。また、アリーが対ウマイヤ家闘争の拠点とし、フサインがその地に至ることをめざしたクーファは、そのような活動の拠点であることが、これもまた公然たる事実であった。この両者が偶然結びついたときザイドの反乱は、実際にはクーファには本気で反乱を行う市民はいないという現実を無視して、「記憶」に突き動かされるように暴発したのである。ところが、このザイドの死の記憶は、ザイド派という新しい宗派を生み、また新たな民衆の宗教行動を喚起したのであった。現在、クーファの跡地ナジャフは、シーア派の聖地・巡礼地として名高い。

小シンポジウム II

6月14日（日） 14:00-17:00 10号館1階10102教室

フランス革命と暴力

報告者：近江吉明（専修大学）
「フランス革命初期のジャクリーと暴力」

小井高志（立教大学）
「テルールの暴力」

山崎耕一（一橋大学）
「サン＝ジュストにおける政治と暴力」

コメンテーター：佐藤真紀（信州大学）

司会者：西願広望（青山学院女子短期大学）

趣旨説明

「世界史における暴力」の大会テーマとのからみで当シンポジウム(2)では、「フランス革命と暴力」のテーマを設定し3本の報告を用意した。

この分析視角はフランス革命史研究における最近の研究動向にも確認できるものであるが、「フランス革命200周年」から20年経つ中で試みられているいくつかのフランス革命史の研究史整理においても指摘されているところである(J.-C. マルタン<長井伸仁訳>「フランス革命史研究の現状と展望」『関西学院史学』第33号、2006年3月;小井高志「フランス革命史研究の現状—ブルスティンとマルタンの『暴力』の研究を中心に—」『歴史評論』第703号、2008年11月)。この視点に基づいた日本での研究成果の一つは、専修大学社会知性研究センター・歴史学センターが2005年6月に実施した国際シンポジウム「21世紀におけるフランス革命研究の現状と課題」において、J.-C. マルタンが「フランス革命の恐怖政治を読み直す—暴力と政治闘争—」の報告で見せてくれた暴力と政治との関係についての分析に、具体的に示されている。

このように、革命史研究の中でも注目されつつある暴力の諸側面であるが、しかし同時に、当然のことながらいくつかの問題点も指摘されている。たとえば民衆蜂起で行使される暴力と政治権力行使に見られるそれとを同じ土俵で検証できるものなのか、暴力行使にこめられた主観的側面と客観的意味合いの間に生ずるズレの問題など課題は多い。当シンポジウムではそうした点にも目配せしながら、フランス革命を暴力の面から捉えなおすことによって、当革命が包摂している多様な矛盾や価値を拾い出してみたいと思う。

フランス革命初期のジャクリーと暴力

近江 吉明

本報告では、フランス革命初期にみられた「下からの」暴力行使の実態やその特徴を民衆蜂起の展開の中で検討しようとするものである。1789年5月の全国三部会開催に向けて動き出した地方の人々の諸要求提示段階(とくに、第三身分にみられる第一次選挙集会時に作成された教区別「陳情書」にみられる)から、同年7月～8月までに発生した地方の民衆蜂起に注目し、そこに認められるそれぞれの暴力行使の形式や意味を捉え、その独自性を考えることにした。分析対象となるのは、バス＝ノルマンディーの現オルヌ県西・中部地域に確認される都市民衆の蜂起や農村教区の「ジャクリー」の動きである。

G = ルフェーヴルやA = アド等の研究においてもすでに当地域の蜂起は注目されてきてはいるが、今回は都市部の食糧蜂起や農村教区に展開された蜂起を「集合体から結集体へ」「革命的集合心性の形成」の視点で追跡し直すことになる。①1789年7月末までの全体的な発生状況を掌握し、②とりわけ県西部アンデーヌの森周辺の三つの農村教区に注目し、城館攻撃の際に行使された多様な暴力行使の場面を抽出し、③暴力行使の類型的把握により、暴力行使の構造とそこにこめられた蜂起衆の思いを浮き彫りにする。つまり、民衆蜂起論の視角からの分析にこだわってみたい。

フランス革命史研究との係わりで言えば、このグランド・プール期のオルヌ県西・中部の「ジャクリー」がはたして「農民革命」であったのか、それとも「農民戦争」・「農民反乱」、あるいは「農民的反革命」でしかなかったのかが問われることになる。この検討では、蜂起衆の政治的要求の内容やその目的にまで言及することになるが、この点では農村教区陳情書作成の段階からの動きも含めなければならない。先行研究成果に学びつつ一定の結論が出せるよう努力してみたい。

テールの暴力

小井 高志

フェレの『フランス革命を考える』の公刊以来、フランス革命史研究が様変わりしてきたことはよく知られている。革命の社会的考察は少なくなり、かわって「心性史」や「政治文化」の研究が主流を占めるようになってきた。ヴォヴェルは、図像、祭典、言説などを含めた「革命の集団心性」を明らかにしようとし、ハントは、フランス革命を「政治文化」の変革として捉え、その創造と作用がフランス革命そのものを構成していると主張した。それらのなかでも「(革命的・政治的)暴力」の問題は云々されていたが、近年とくに「暴力」と政治の関係性を議論の中心に据えて、「暴力」をつうじてフランス革命を読み解き直そうという動きが目立ってきた。これは、フランス革命が過去の遺物ではなく、現在でもきわめてポレミックな問題を内包していることを示している点で、大変注目される。革命の勃発からナポレオンの第一帝政までの歴史を通観すると、モンターニュ派国民公会の時期までは「下からの」民衆の集団的暴力が際立ち、それが革命を前進させたように見える。それを権力が吸収し、理論化して、それに新たな意義を付与したという面をテールはもっているのではないか。たとえばマルタンは、様々な経路から来た「暴力」が収斂された結果がテールであったと述べている。しかしテールミドル事件後は、国家権力による「正当な暴力」のみがのこされた。やがてその「暴力」は、ナポレオンの軍事力によって対外的に行使され、ヨーロッパじゅうで猛威をふるうことになると見ることもできよう。そのような「暴力」に関する仮説的パースペクティブのなかで、ジャコバン派のテールはどのように位置づけられるのか、リヨンやヴァンデの革命の現場から探してみたい。

サン=ジュストにおける政治と暴力

山崎 耕一

フランス革命に関して考察の対象にせねばならない暴力には2種類あるであろう。すなわち都市や農村の民衆による暴動・蜂起と恐怖政治である。前者は「下からの」暴力であり、広義の権威・権力に対する暴力と規定することが可能であり、それに対して後者は「上からの」暴力であって、権威・権力に基づく暴力である。私が今回考察したいのは後者の暴力であり、具体的にはサン=ジュストが政治と暴力（もしくは政治における暴力）をどのように考えていたかという問題である。

サン=ジュストは1791年6月に出版した『革命とフランス憲法』においては、ルソーが『社会契約論』において「統治者が市民に『汝は国家のために死なねばならない』という時には、市民は死ななければならないのである」（第2編第5章）とした点を批判し、個人に死を命じる権利を国家が持つことを否定した。この立場からすれば恐怖政治は容認されないはずであり、事実サン=ジュストは、一方においては、常に平和で安全で暴力の存在しない自然状態を希求し続けており、恐怖政治のさなかにおいても「共和制度」を確立することによって恐怖政治を克服する構想を模索していた。

それにもかかわらず、彼はロベスピエールの右腕として恐怖政治をリードし、ジロンド派やダントンの弾劾演説を自ら行なった。なぜ、理想においては権力による暴力を否定するサン=ジュストが、現実の政治においては恐怖政治に積極的に関与することができたのだろうか。その疑問を解く鍵のひとつは、彼を一躍有名にした国王裁判演説（1792年11月13日）にある。ここで彼は君主政は必然的に専制であるとし、「人は罪なくして支配することはできない」と述べる。すなわち政治それ自体が悪なのであり、克服されるべきものなのであるが、現実には専制が存在する以上はそれと戦わなければならない。国王は市民として裁かれるのではなく、敵として排除され、殺されなければならないのである。とはいえ、彼もこの「戦い」における暴力を無制限・無条件に容認したわけではない。報告においては、理想と現実の間に揺れ動く彼の思索のあとをたどりながら、権力による暴力に対してひとつの光を当てたいと思う。

小シンポジウムⅢ

6月14日(日) 14:00-17:00 10号館2階10201教室

20世紀世界にみる人の移動と暴力

報告者：中野耕太郎（大阪大学）

「人種暴動とその後

— シカゴ人種関係委員会の秩序形成 —」

清水明子（東京外国語大学・兼）

「『クロアチア独立国』における住民追放

— ナチス・ドイツの広域秩序計画との接点 —」

川喜田敦子（東京大学）

「難民入植地の遮断された記憶

— 第二次世界大戦後の東欧からのドイツ系移住者と
『暴力』の記憶 —」

佐藤清隆（明治大学）

「1984年の『ゴールデン・templar』襲撃と

在英シク・コミュニティ

— 多民族都市レスターの事例から —」

コメンテーター：中野隆生（学習院大学）

趣旨説明

「20世紀とは暴力の世紀」。このことは、二度にわたる世界大戦とその後各地で頻発した数多くの地域紛争や内乱で振るわれた暴力を想起するだけでも明らかであろう。また、こうした事態は、1989年の冷戦終結以降、加速度的に強まってきている感さえある。その一方、20世紀には、これらの暴力とも連動しながら、難民や海外移住者をはじめ、人類史上かつてないほど短期間に大規模な「人の移動」が起こってきたことも事実である。移民たちは、移動の過程でさまざまな暴力を経験し、その「記憶」を抱え込みながら、新たな移民先で暮らしていくことになるのである。

これら移民たちは、その移民先でも、国家や地域社会での新たな暴力に遭遇することになる。それらは、「包摂と排除」を伴う「法維持的暴力」、住民間の人種・民族差別、同民族・同宗教内の差異化など、実にさまざまである。けれども、移民たちの存在自体が、「受け入れ社会」や国際社会の法や秩序のシステムだけでなく、暮らしそのものをも大きく変容させていくことになるのである。

本セッションの企画は、こうした20世紀における「人の移動」と「暴力」の問題をリンクさせ、そこから歴史を読み直してみようとする試みである。しかし、ことはそう簡単ではない。「人の移動」も「暴力」もさまざまに広がりをもつテーマだからである。私たちにできることは、これらの問題を各報告者の専門分野や関心に引きつけて考え、重要と思われるいくつかの問題を会場の聴衆に投げかけてみることである。

まず中野耕太郎は、20世紀初頭の工業化による黒人の北部移住やその影響によるシカゴ社会における黒人ゲットーの成立などを背景に、1919年夏シカゴで発生した人種暴動をとりあげ、その後に新中産階級エリートの法維持的暴力装置として形成されていく、リベラリズムと新しい国民秩序の創出過程を、シカゴ人種委員会や同時代の報道の検討を通して明らかにし、私的、公的な「人種の暴力」の問題に迫ろうとする。つづく清水明子は、ナチス・ドイツの肝煎りで建国に至った「クロアチア独立国」における住民追放と強制移住の様相を、それと直接的に関連する強制改宗や住民虐殺の現象も視野に入れつつ、ヒトラーの広域秩序構想との接点において解明する。また、第二次世界大戦後の東欧からのドイツ系移住者に焦点を当て、彼らに加えられたさまざまなレベルの「暴力」の記憶を、エスベルキャンプなどの主要な難民入植地に着目して明らかにするのは、川喜田敦子である。最後の佐藤清隆は、1984年にインドで発生したシク教徒への暴力的大惨事が、移民先の一つである在英シク・コミュニティにどのような影響を与えていったのかを、イギリスの多民族都市レスターの事例を通して考察する。

 人種暴動とその後
 — シカゴ人種関係委員会の秩序形成 —

中野耕太郎

20世紀への転換期以降、アメリカは急激な産業化に伴う大規模な国内・国際の労働力移動を背景に新たな国民的秩序の再編を迫られていた。政治経済の中核たる北部の大都市では膨大な外国系住民と南部出身の黒人移住者が、拡大する格差社会の底辺を構成する階層として孤立したため、同時代の知識人や政治指導者はこうしたマイノリティーの存在を踏まえた新たな国民統合を模索せねばならなかった。この問題が、第一次世界大戦下に現出した約50万人もの南部黒人の北上現象を期に、広範囲の私的、公的暴力へと発展したことは注目してよい。戦後間もない時期、北部工業都市の多くで人種暴動が頻発し、シカゴでは600名近くが死傷、1000戸以上が焼失する紛争が経験された。このシカゴ暴動においては、州兵による鎮圧後、シカゴ大学パーク学派の社会学研究者やセツルメント運動のソーシャルワーカー、ローゼンヴォルド財団等のリベラル派財界人などを主体とする人種関係委員会が州知事によって任命され、およそ2年間の調査を経て大部の報告書を公表している。はたして、リベラル・知識人による「平和維持」活動は真に人種関係の是正に寄与するものだったか。あるいは、それは「暴動」の私的暴力によって創出された新しい人種間関係（特に居住区の人種隔離）を公に承認し、固定化するいまひとつの暴力として機能したのではないか。本発表は、シカゴ人種関係委員会の具体的な活動やこれを取りまく同時代の多様な言説を素材として、人種暴動後に法維持の力として立ち現れるリベラリズムと新しい社会的学知の意味を考察する。この試みは20世紀の国民秩序形成の過程に広義の暴力と強制の次元を見出そうとする基本的視座に由来するが、同時に未曾有の人口移動の中で生み出されたかかる秩序が、事実上、人種的境界を前提とする分離と不平等の原理を内包し、しかも極めて長期にわたってその構造を存続させたことの意味を問い直すものでもある。

「クロアチア独立国」における住民追放
— ナチス・ドイツの広域秩序計画との接点 —

清水 明子

本報告は、第二次世界大戦中「クロアチア独立国」における住民追放および強制移住に焦点を当てる。クロアチアでの大規模な人の移動には主に二つの枠組が存在した。一つは、ナチス・ドイツの全面的支援により建国に至った「クロアチア独立国」が、クロアチア人の「国民国家」を確立する上で障害と見なした異分子、特に国家最大の「敵」としてのセルビア人の物理的排除を規定した国家政策の枠組であった。「ユダヤ人問題最終解決」が本格化する前のこの時期、「セルビア人問題解決」の直接的な模範と考えられたのはここでも第一次世界大戦後のトルコ・ギリシャ間の「住民交換」による居住地域の「純化」である。92年以降に再活用された用語「民族浄化」を文字通り意味するクロアチア語が既にこの脈絡で頻繁に登場した。

もう一つは、建国直後に開始されたセルビア系住民の追放を「国際的にも」正当化させる機能を果たしたナチス・ドイツの広域秩序構想である。ドイツ民族強化を目的とした総統命令は、「大ドイツ」への民族ドイツ人の強制移住による土地のゲルマン化を掲げると同時に、ドイツの勢力下に組み込まれた地域における民族の住み分けを求めた。クロアチアとの間には41年6月初旬、「住民交換」が合意される。それにより、スロヴェニア、クロアチア、セルビアにおける住民の強制移住はパッケージとして実施されることになった。

結局、両構想の接点において、特に大量の住民が強制的に動かされることになった。「クロアチア独立国」の「民族浄化」をめぐる暴力の方向性は、「セルビア人の3分の1を殺害、3分の1を追放、3分の1をカトリックに改宗させる」というスローガンに示され、これら三つの分野は相互に流動的で、重点の置かれ方にも地域的・時期的差異が存在したが、暴力行為の共通項として存在するのは建国直後からの「住民追放」であろう。「住民追放」の具現の仕方と、社会への影響に考察を加えることが中心テーマとなる。

難民入植地の遮断された記憶
— 第二次世界大戦後の東欧からのドイツ系移住者と「暴力」の記憶 —

川喜田敦子

1945年夏のポツダム会談で、ドイツ東部領の割譲と東欧一帯に残留するドイツ系住民の大量移住が決定され、1000万人を超えるドイツ系住民が難民として戦後ドイツの領域に流入した。西ドイツはドイツ国籍をもたない者も含めてこれらのドイツ系難民をドイツ国民として受け入れ、その後も、東欧から流れ込むドイツ系の帰還移住者をやはり国民として受け入れ続けた。本報告では、これらのドイツ系移住者と「暴力」の関わりの様相について考える。

ドイツで「追放」とよばれた強制移住は、とりわけその初期に大きな暴力をとまった。財産を没収され、着のみ着のまま追いつけられた人びとは、途中、さらに暴行や略奪の対象となり、女性に対する強姦も頻発した。疲労や飢餓のために衰弱・死亡する者も大量に出た。強制移住の際のこうした暴力と、残留したドイツ系住民に対するその後の同化政策という二つの暴力のイメージは、冷戦の論理のなかで「共産主義の暴力」と読み替えられ、西ドイツ国内でドイツ系移住者の特権的な受け入れと、長期にわたるその継続を保証することになった。一方、ナショナルな次元で構築されるこの暴力のイメージは、たとえば、国民国家原理に基づく強制移住の前史、難民入植地でナチ時代に行なわれていた強制労働の事実、ドイツ系移住者の移住先でみられた地元住民との対立の体験など、リージョナル、ローカル、個人の三層における、程度の差こそあれそれぞれに暴力性を秘める事象への認識の可能性を遮ることにもなった。

本報告では、国民国家のもとでの国民の統合と異分子の排除、総力戦下での強制労働、冷戦と反共、大規模な人の移動と軋轢など、20世紀の幾層かの重要な局面が交錯した場として、国防軍兵器廠跡地に建設されたエスペルキャンプ（ノルトライン・ヴェストファーレン州）をはじめとする主要な難民入植地に着目し、20世紀にその地に折り重なった「暴力」の諸相について検討してみたい。

1984年の「ゴールデン・templ」襲撃と在英シク・コミュニティ — 多民族都市レスターの事例から —

佐藤 清隆

1984年6月5日(火)、インド政府軍(「オペレーション・ブルー・スター」)が、パンジャブ地方のアムリツァルにあるシク教徒の総本山「ゴールデン・templ」のアカール・タカットで数百人のシク教徒を殺害し、数多くのけが人を出した。また、彼らは、インドからのパンジャブ地方の独立を主張していたセイント・ジャルネール・シング・ヒンドランワレ師も殺害した。その後、シク教徒によるヒンドゥー教徒への報復活動や騒擾があちこちで発生し、同年10月31日には、インド首相のインディラ・ガンジーが、彼女のボディ・ガードをしていた二人のシク教徒によって暗殺され、その後、その報復活動のなかで、首都デリーをはじめ、インドのあちこちで数千人ものシク教徒が殺害されたのである。これら一連の事件は、その後、インド中央政府とパンジャブ地方との激しい対立や抗争を生み出し、それはおびただしい数の犠牲者を伴いながら、1990年代後半までつづいていくのである。まさに、この問題は、ポストコロニアル期におけるインドのネーション・ビルディングとエスニシティをめぐる問題のひとつと考えることができる。

しかし、この影響は、インド本国だけにとどまらない。19世紀後半以降、英領植民地を中心に移民していった、イギリス、カナダ、アメリカ合衆国など、海外在住のインド系移民コミュニティにも大きな衝撃を与え、それらの行方にも影響を及ぼしていくことになったのである。

本報告は、これらの暴力的大惨事をきっかけにさらに変容を遂げていく在英シク移民コミュニティの世界を、イングランド中部の多民族都市レスターの一事例を通して明らかにしていこうとするものである。本報告の従来の研究と異なる視点の一つは、在英シク・コミュニティの歴史を、一枚岩として捉えるのではなく、多様化・多層化・グローバル化の進む世界として捉え直し、そこから「暴力」の問題を考えていこうとしている点である。もう一つは、彼らの歴史を、レイシズムなど「受け入れ社会」からの差別の側面だけではなく、多民族都市レスターの発展やイギリスの多文化主義の展開との緊密な関係にも注目しながら考察していくことである。

小シンポジウムⅣ

6月14日(日) 14:00-17:00 10号館2階10202教室

記憶としての戦争

— その形成や教科書叙述をめぐって —

報告者：竹本真希子(広島市立大学広島平和研究所)
[第一次世界大戦とドイツの平和主義者]

近藤孝弘(名古屋大学)

[ドイツにおける第二次世界大戦をマンガで教える試み
— グラフィック・ノベル *Die Entdeckung* と
Die Suche が示す歴史教育の展開 —]

永原陽子(東京外国語大学)

[植民地戦争の記憶とヨーロッパにおける歴史認識]

鳥越泰彦(麻布高等学校)

[歴史教科書の中の第二次世界大戦]

司会者：日暮美奈子(専修大学)

趣旨説明

あらゆる直接的体験は、体験者それぞれにとって固有の意味を持ちうる。だが、その体験に何らかの共通性が見出された場合、個々の体験は集合的経験として意識され、その語りや記述を通じて、体験者以外の人々をも包摂する集合的記憶として定着してゆく。

近現代史研究において、こうした集合的記憶の構築過程は、近年さまざまなアプローチによって具体的に検証されている。その際、とりわけ戦争が記憶の「国民化」や「公式化」に不可欠な集合的経験として重要な意味をもっていることは、多くの研究が明らかにしている点である。それでは、戦争の記憶をめぐるせめぎ合いのなかで、なにがいかんして定式化された記憶として構築され、伝達されてゆくのだろうか。また、そのことは歴史認識の形成にいかなる影響を及ぼすのだろうか。

このセッションでは、このような問いにもとづいて4名の報告者が報告を行う。さしあたっての試みとして、(1)戦争の記憶の定式化にかかわる問題と、(2)定式化された戦争の記憶の伝達にかかわる問題、の2点に的を絞ることにした。(1)については、竹本真希子氏が第一次世界大戦後のドイツの平和主義者の活動から、総力戦体験の「国民化」とそれにたいする対抗理念について考察を加える。さらに永原陽子氏は、旧植民地での戦争の記憶の形成が現在のヨーロッパにおける歴史認識にもたらす影響を示しつつ、戦争の記憶の意味と役割がグローバルなレベルで構築されてゆく様子を明らかにする。(2)については、記憶の伝達のあるところにも再構築の場でもある学校での歴史教育に着目し、近藤孝弘氏と鳥越泰彦氏が報告する。両者はそれぞれ、マンガという新しい教材を用いたドイツでの戦争教育の取り組み(近藤氏)と、第二次世界大戦を記述した歴史教科書の国際比較(鳥越氏)を取り上げているが、教材として編まれた戦争の記憶(学習内容)の分析にとどまらず、その利用のしかた(学習方法)にたいしても分析を加えることで、歴史教育の現場における戦争の記憶の意味と役割について考える。

第一次世界大戦とドイツの平和主義者

竹本真希子

ドイツ史において「戦争の記憶」は、これまで主として第二次世界大戦やナチズムとホロコーストの記憶として議論されてきた。そして第一次世界大戦の記憶は、多くの場合「ヒ首伝説」などに特徴的であるように、ナチズムの思想的基盤の形成という問題で扱われてきたと言える。その一方で国家によって創られる集合的な「戦争の記憶」や「戦争の神話化」を危険視し、これに抵抗したひとびともあったが、彼らについてはこれまであまり注目されてこなかった。左派の知識人を中心とするヴァイマル共和国期の平和主義者は、第一次世界大戦を「殺人が公然と行われた所」と受け止め、ドイツ平和協会を中心とする平和運動の中で、この戦争の悲惨さ、非人道性を訴えた。そして戦争崇拜を批判し、戦争における「名誉の死」や英霊祭祀の危うさを指摘し、国家や右派による戦没者追悼行事の背景にあるナショナリズムに警鐘をならしていたが、これらについて戦争の記憶に関する議論の中で触れられることはほとんどなかった。

本報告はこの「第一次世界大戦の記憶」に対する平和主義者の取り組みに注目しながら、「戦争をどう伝えるか」という本シンポジウムのテーマを扱うものである。平和主義者自身が第一次世界大戦をどう体験したか、彼らの「記憶」はどのようなものであったか、彼らはこの戦争をどのように伝えようとしたのかを明らかにしたうえで、彼らが「1914年の精神」「前線兵士神話」「ヒ首伝説」に象徴される「第一次世界大戦の記憶」にどのように抵抗しようとしていたのかについて検討する。そしてここから、彼らの「創られる記憶」への抵抗が持つドイツ史における意味についても考察することで、戦争の記憶と歴史認識の形成の問題に関する議論に参加していきたい。

ドイツにおける第二次世界大戦をマンガで教える試み
 — グラフィック・ノベル *Die Entdeckung* と
Die Suche が示す歴史教育の展開 —

近藤 孝弘

マンガや映画作品を学校の歴史教育に導入することは、ドイツでも以前から行われてきたが、歴史教材をマンガで作成することはこれまでなかった。*Die Entdeckung* と *Die Suche* は、おそらくドイツにおける最初のマンガ歴史教材であり、本報告では、こうした教材がいま作成されるに到った意味について考えたい。

まず、第二次世界大戦の中でも特に所謂ホロコーストをマンガという様式で表現することの妥当性に疑問の余地があることは、容易に理解されよう。

またマンガ教材は、結局のところ、一定のストーリーに載せて数々の歴史的事項を説明する形になることから、歴史資料の分析といった、近年のドイツで重視されてきた活動的な学習を排除しがちであり、形を変えた記憶重視の授業へと歴史教育を後退させる可能性もある。

上記の2冊の教材については他にもいくつかの問題点が指摘されているが、重要なのは、こうした批判は、その教材を利用した授業の普及を図っているベルリンのアンネ・フランク・センターも認識しているところであり、むしろ、そうした問題にも関わらず、取り組みが進められてきたということである。

すなわち、この新しい歴史教育の試みの背後には、とりわけ統一以後の右翼急進主義の拡大に対し、従来の、生徒の活動を重視する知的な歴史教育論では十分に対処できないとの認識がある。戦後60年以上が経過し、さらに学力・学習意欲の低下が深刻化する中で、第二次世界大戦について学ぶレディネスを欠く子どもが増えている。そして、こうした教育条件の変化の結果として、歴史教育は、批判的・主体的に考えることを教える以前に、最低限の知識を平易な形で与える必要がある、という教育観が提起されたのである。

この問題提起を、日本の私たちはどのように受け止めるべきであろうか？

植民地戦争の記憶とヨーロッパにおける歴史認識

永原 陽子

戦争の記憶と歴史認識の形成について問う小シンポジウムの共通テーマの下で、本報告では、植民地戦争の記憶がヨーロッパにおいてどのように伝えられ、それが歴史認識のあり方をいかに変化させているかについて、最近の旧植民地側からの動きに注目しながら考える。

植民地戦争（植民地の征服や抵抗の鎮圧のための戦争と、植民地の解放・独立のための戦争の双方を含む）の記憶は、たとえばフランス人にとってのアルジェリア戦争のように、映画や文学作品などにもなり非常に強烈な記憶として歴史の中に刻み込まれているものもあれば、宗主国側の人々にとってはその存在すら知られていないものもある。そうした中で、近年目立つのが、植民地側からの、過去の戦争—その中で大量虐殺や残虐行為など—についての「謝罪」や「補償」の要求である。こうした要求によって、ヨーロッパ諸国では、具体的な対応をめぐる議論がおこっているが、そのことが、従来の「記憶」のあり方に変更を迫り、また新たな歴史認識の形成にもつながっている。それらの背後には、これらの戦争にかんする新しい歴史研究の動向がある。

本報告では、①ナミビアでの1904/08年のアフリカ人の蜂起とそれに対する鎮圧戦争、②ケニアでの1950年代の土地解放運動「マウマウ」をめぐる戦争、③アルジェリア戦争（1954-62年）を主に取り上げ、その他の植民地戦争も視野に入れながら、植民地側からの問題提起がどのような意味でヨーロッパ側の記憶のあり方と歴史認識を変えつつあるのかについて、a. 植民地側の人々の動向、b. 新しい歴史研究の動向、c. ヨーロッパ側での議論、について整理し、比較検討してみたい。

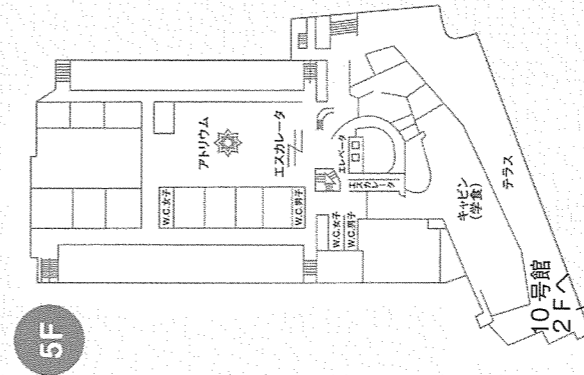
歴史教科書の中の第二次世界大戦

鳥越 泰彦

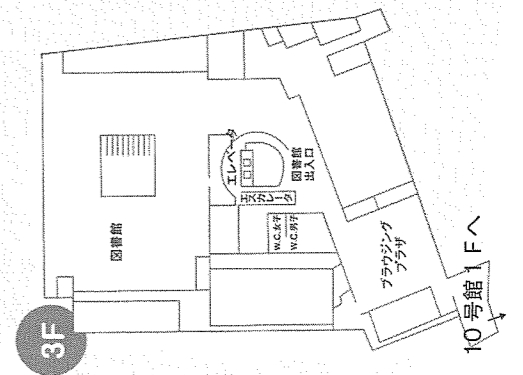
日本では、第二次世界大戦以後、中等教育において歴史を学ぶことは、「民主的」または「主体的」な人材の育成と、「世界平和の確立」または「平和的な」人材の育成のために行われるとされてきた。歴史学習、特に戦争学習を「平和」確立のために行うということは、日本では自然に思えることかもしれないが、世界的に見るとこれは必ずしも自明のことではない。本報告では、このような理念の下でつくられてきた日本の歴史教科書において、第二次世界大戦がどのように扱われているかを検討したい。特に歴史教科書を国際的に比較することによって、日本の歴史教育や第二次世界大戦に関しての扱いがどのような特徴をもっているのか、を浮き彫りにしたいと思う。具体的には、中国、アメリカ合衆国、オーストラリア、シンガポール、フランス、ドイツなどの外国の教科書やハワイ、グアム、沖縄などの「地域」でつくられた教科書との比較を試みたい。ただし日本の歴史教育をめぐる語りがしばしば、どのようなことが本文で語られているか、という「教育内容中心主義」的視点のみで終わってしまうという反省の上に立って、教科書における記述比較だけにとどまらず、第二次世界大戦を学ぶ意義はどのような点にあるのか、という目的論的な比較、第二次世界大戦を生徒がどのように学ぶことを期待しているのか、という方法論的、教材論的な比較にも留意したい。このようなことから、最終的に「(第二次世界大戦という)戦争をどのように伝えるのか」というテーマをめぐる議論になんらかの材料を提供したいと思っている。

会場案内図

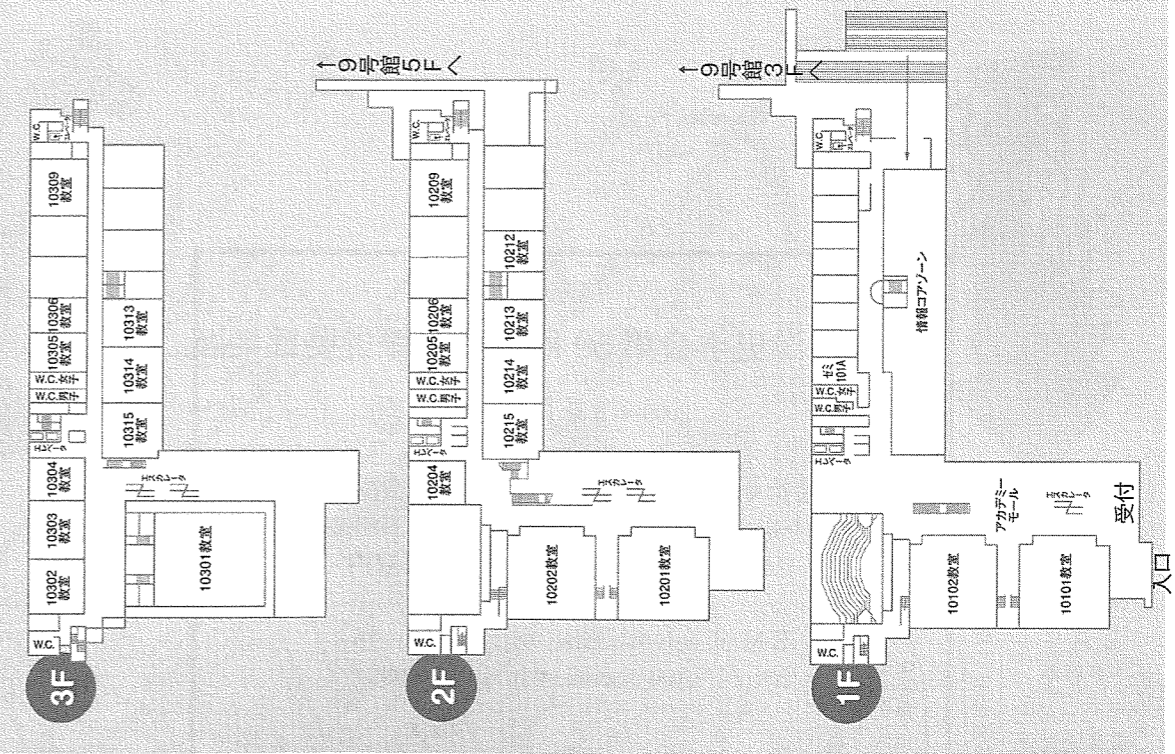
9号館(120年記念館)



3F



10号館(130年記念館)



特別展示のご案内

ベルンシュタイン文庫に
「フランス革命と暴力」関連史料を求めて

期 間：6月13日（土）11：00 - 19：00
6月14日（日）10：00 - 18：00

場 所：専修大学9号館3階
図書館本館 ブラウジング・プラザ
(会場案内図をごらんください)

日本西洋史学会第59回大会 報告要旨集

2009年6月13日発行

編集・発行：日本西洋史学会第59回大会準備委員会
〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1
専修大学文学部人文学科歴史学専攻内

E-Mail: seiyoshi@isc.senshu-u.ac.jp
<http://www.soc.nii.ac.jp/jswh/2009/>

イスラエルのアラブ人キリスト教徒

——その社会とアイデンティティ——

菅瀬晶子著 日本学術振興会助成 A5判・228頁／3,990円

イスラエルで、民族的にも宗教的にもマイノリティであるメルキト派カトリック信徒。彼らは自身をどのようにとらえ、どのような帰属意識を抱いているか、そのアイデンティティのあり方を探る。

序章／第一章 イスラエルのアラブ人市民、メルキト派カトリック概論／第二章 村落とその社会／第三章 村落から都市へ／第四章 都市ハイファにおけるメルキト派カトリック信徒の帰属意識／第五章 複合的・重層的アイデンティティの形成

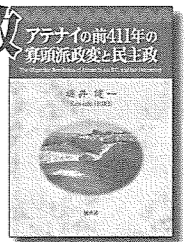


アテナイの前411年の寡頭派政変と民主政

堀井健一著 A5判・512頁／8,400円

テラメネスの政治行動に焦点をあて古代民主政期アテナイの前411年の400人の寡頭派政変と5000人政権を事件後約80年を経たアリストテレスの記述から再検討、再解釈を試みる。

序章 問題の所在／第1部 前411年の寡頭派政変 1. 前411年の寡頭派政変の概要 2. 前411年の寡頭派政変についての史料の検討～トクキュティス『歴史』とアリストテレス『アテナイ人の国制』 3. 前411年の四百人の寡頭派政変の原因について／第2部 五千人政権の時代とテラメネス 4. 四百人処罰とアテナイ内政動向／5. 五千人政権の国制／第3部 いわゆる「パトリオス＝ポリティア」問題とテラメネスの政治思想 6. ニコマコスといわゆる「法典編纂」作業について 7. パトリオス＝ポリティアとテラメネス派の政治思想 8. 前4世紀のギリシア人ポリスの危機とアテナイ民主政／終章 結論



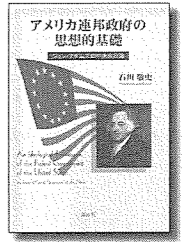
アメリカ連邦政府の思想的基礎

——ジョン・アダムズの中央政府論——

石川敬史著 アメリカ研究振興会2007年度助成 A5判・292頁／3,990円

ジョン・アダムズの政治思想と政治行動の分析を通して、アメリカ連邦政府形成の思想的基礎を明らかに。

はじめに—問題の所在／序章 先行研究におけるアダムズ研究の方法／第1章 18世紀における政府理論の胎動／第2章 イギリス帝国論からみたジョン・アダムズの抵抗の理由／第3章 ジョン・アダムズの革命の論理／第4章 ジョン・アダムズの建国の論理／第5章 米仏同盟解消交渉と大統領権力の確立／第6章 アメリカン・ダイアログ／おわりに



呪われたセイレム ——魔女呪術の社会的起源——

山本雅著 A5判・320頁／3,675円

1692年のセイレム魔女呪術事件はどのように起きたのか。アメリカの植民地時代を背景に、セイレムの歴史、嘆願書などの資料・記録からみえる社会的真相を究明。完全翻訳。

プロローグ 1692年に起こったこと／第一章 1692年—魔女呪術事件への新しい見方／第二章 共同体を求めて—1639—1687年／第三章 魔女呪術に冒された村—1688—1697年／第四章 セイレム町とセイレム村—派閥対立の力学／第五章 二つの家族—ポーター一族とパトナム一族／第六章 ジョウゼフと彼の兄妹たち—パトナム一族の物語／第七章 サミュエル・パリス—ベツレヘムの巡礼／第八章 魔女呪術と社会的アイデンティティ—エピソード—18世紀に向けて



ノルマン征服と中世イングランド教会

山代宏道著／8,400円

レベラー運動の研究

友田卓爾著／9,975円

リチャード三世研究

尾野比左夫著／5,250円

大航海時代における異文化理解と他者認識

——スペイン語文書を読む—— 染田秀藤著／5,250円

スペイン・中南米関係文献目録

坂東省次著／8,971円

中世ヨーロッパにおける笑い



水田英美・山代宏道・中尾佳行・地村彰之・原野昇
中世ヨーロッパ時代の笑いの捉え方とは。歴史、仏文学、『聖書』の中の「笑い」を研究する。
◆笑いの諸相—いま泣いているあなたたちは幸い—
◆中世イングランドにおける笑い—修道士は静かに笑う—
◆フランス中世文学にみる笑い—笑いの社会性—
◆チョーサーのファブリオに見る笑い—
—「船長の話」における言葉遊び再考—
◆チョーサーの英語と笑い 四六判・184頁／2,100円

シリーズ好評発売中

- 中世ヨーロッパにおける女と男 186頁・2,100円
- 中世ヨーロッパにおける死と生 202頁・2,100円
- 中世ヨーロッパにおける排除と寛容 184頁・2,100円
- 中世ヨーロッパの時空間移動 216頁・2,310円
- 中世ヨーロッパにおける多元性 178頁・2,100円
- 中世ヨーロッパに見る異文化接触 (220頁)・2,625円

歴史と軍隊

—軍事史の新しい地平 阪口修平編著 予価4,200円

欧米における近年の軍事史研究の最新潮流をふまえ、軍隊と社会、軍隊と国家、軍隊と法、軍隊と文化、軍隊の内部生活などのテーマを具体的に検討・分析した画期的論集。



ピラミッド以前の古代エジプト文明

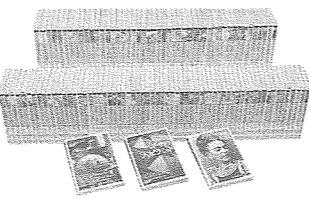


大城道則著 予価3,675円

古代エジプトの基礎がつけられたとされるピラミッド出現までの時期に焦点をあて、断片的に語られがちな古代エジプトの揺籃期のすがたを明快に提示。専門家、愛好家必読の一冊。

「知の再発見」双書シリーズ

各巻平均1,470~1,680円
美しいカラー図版とともに読み解く人類の知の営み。



図説 文字の起源と歴史

—ヒエログリフ・アルファベット・漢字

A. ロビンソン著 3,780円

楔形文字、ヒエログリフ、マヤ文字、アルファベット、漢字など代表的な文字を取り上げて、その起源と歴史、特徴を解説する文字の文化史。

図説 ヒエログリフ事典

M. C. ベトロ著 / 吉村作治監修 2,940円

世界でもっとも美しい文字、古代エジプトのヒエログリフ。本書はその代表的な文字238字を、豊富な図版や歴史の変遷とともに詳説した画期的な事典。

アルファベットの事典

L. プリュエゴート著 2,520円

アルファベットの起源と歴史の変遷の謎を解く。ただの音の表記にすぎないと思われがちなアルファベットに漢字以上の「ドラマ」が隠されているとわかる好著。

図説 アラビア文字事典

G. M. ハーン著 / 矢島文夫監修 2,940円

図説 マヤ文字事典

M. ロンゲナ著 / 植田覚監修 2,730円

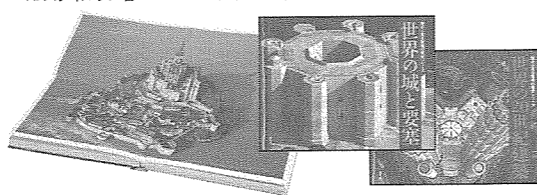
マヤ文字解読辞典

M. D. コウ, M. V. ストーン著 / 猪俣健監修 2,940円

空から見る驚異の歴史シリーズ 全5巻

森山隆訳 各巻4,515円
世界の名建築を空撮。53×39cmの大パノラマで全貌に迫る。

- 最新刊 世界の城と要塞 H. スティルラン著
- 最新刊 世界の20世紀建築 B. ルモアンヌ著
- 世界の古代遺跡 H. スティルラン著
- 世界の大聖堂・寺院・モスク H. スティルラン著
- 世界の大宮殿 H. スティルラン著



地図と絵画で読む Biblica ビブリカ

聖書大百科

B. J. バイツェル監修 / 船本弘毅 日本語版 監修
山崎正浩訳者代表 33,600円

神学・考古学の最新の知見に基づき、聖書世界の歴史、文化、地理を読み解く。図版650点以上、地図124点を収録。

戦闘技術の歴史1 古代編

S. アングリム, P. G. ジェステイス, R. S. ライス,
S. M. ラッシュ, J. セラーティ著 / 松原俊文監修
4,725円

古代の戦闘での歩兵や騎兵の役割から部隊の配置や統率、攻城戦や海戦における戦術までを豊富なカラー図版と共に詳説。



フェニキヤ人 世界の古代民族シリーズ

G. E. マーコウ著 3,150円

アルファベットの生みの親で謎の海洋民族フェニキヤ人の歴史・文化・宗教・都市・経済・美術・対外進出の諸相を、最新の考古資料に基づき紹介。

ローマ・カトリック教会の歴史

E. ノーマン著 / 百瀬文晃監修 3,990円

ローマ・カトリック教会そのものに焦点をあてたオーソドックスな通史。教会がヨーロッパ社会に与えた歴史的影響の光と影に迫る。

ケルトの芸術と文明

L. ラング, J. ラング著 3,360円

紀元前5世紀以来のケルトの地で生み出された作品をカラーを含む212の図版で鑑賞し、他の西洋美術とは異質の非写実性、装飾性などを読み解く。

図説 世界の歴史 全10巻

J. M. ロバーツ著 各巻2,520円

人類の誕生から、9・11米同時多発テロまで、世界通史の第一人者が単独執筆した豪華フルカラー叢書。

- ①「歴史の始まり」と古代文明 青柳正規監修
- ②古代ギリシアとアジアの文明 桜井万里子監修
- ③古代ローマとキリスト教 本村凌二監修
- ④ビザンツ帝国とイスラーム文明 後藤明監修
- ⑤東アジアと中世ヨーロッパ 池上俊一監修
- ⑥近代ヨーロッパ文明の成立 鈴木董監修
- ⑦革命の時代 見市雅俊監修
- ⑧帝国の時代 福井憲彦監修
- ⑨第二次世界大戦と戦後の世界 五百旗頭真監修
- ⑩新たな世界秩序を求めて 立花隆監修

創元社

〒541-0047 大阪市中央区淡路町4-3-6
Tel.06-6231-9010 Fax.06-6233-3111

http://www.sogensha.co.jp/

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂4-3
煉瓦塔ビル Tel.03-3269-1051
<価格は税込>

国民国家と市民

包摂と排除の諸相 立石博高 / 篠原琢 編
マイノリティの同化による国民化と、錯綜する多様なエスニシティ。グローバル化の時代にもトランスナショナルへと昇華しえない国民国家の課題に迫る。
6月刊 予価4000円

世界史のなかの帝国と官僚

平田雅博 / 小名康之 編
歴史の舞台上に登場した諸々の帝国。中世から近代にいたる中国・インド・スペイン・イギリス・ドイツ、さらに日本を事例に帝国を支えた官僚および官僚制の実態を示し、その時代的・地域的な差異を明らかにする。2940円

歴史的ヨーロッパの政治社会

近藤和彦 編
時代は中世から21世紀まで、地域は東中欧・西欧からアメリカ大陸まで、歴史的に形成された広義のヨーロッパを分析し、ヨーロッパ史の複合性・重層性・ダイナミズムと取り組みながら、近代がもたらした国家や国民性、さらには近代史学そのものを照射しようとする試み。 9975円

山川出版社

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-13-13 税込
電話 03-3293-8131 http://www.yamakawa.co.jp

新シリーズ 宗教の世界史

全12巻 第1回配本 7月上旬 2冊同時発売

⑧ キリスト教の歴史 第①巻

初期キリスト教～宗教改革 松本宣郎 編

⑨ キリスト教の歴史 第②巻

宗教改革以降 高柳俊一 / 松本宣郎 編

「歴史のなかの宗教」をコンセプトに、教会史ではなくキリスト教と社会、国家・政治、文化について通観する。民衆の心性に着目し、宗教と人間とのかかわりを考える。アジアやアフリカにも言及する。
四六判 上製カバー装 平均350頁 予価各3675円

YAMAKAWA LECTURES ⑤

「啓蒙の世紀」のフリーメイソン

ピエール=イヴ・ボルパール 著 深沢克己 編
啓蒙主義とのかかわりから、フリーメイソンのコスモポリタンな社交空間を描く。巻末に基本用語解説を付し、研究入門として最適。1575円

続刊 次回6月 7回 6回 5回 4回 3回 2回 初回
好評発売中
近刊

新しい時代の、新しい歴史の101冊

【内容見本呈】

歴史家たちのユートピアへ 榊山紘一編
各刊7冊/毎月配本予定
各刊4冊並製 一六〇頁 ¥一六八〇

樺山紘一著 歴史家の苦悩と喜びを振り返る
ハイチの栄光と苦難 世界初の黒人共和国の行方
濱忠雄著 独立後200年の危機を解く、ハイチから見た世界史
イタリア都市の諸相 都市は歴史を語る
野口昌夫著 都市が層になつて見える都市
本を読むデモクラシー 読者大衆の出現
宮下志朗著 権威と日仏市民の読書初めはいつか?

ナイル 地域をつむぐ川
加藤博著 文明の十字路/人種と民族のつぼ
イブラヒム、日本への旅 ロシア・オスマン帝国・日本
小松久男著 地域10 ◆アジア主義者との深い絆
中国明末のメデア革命 庶民が本を読む
大木康著 権威4 ◆500年前中国で輸入小説大流行
ジハードの町タルスース イスラーム世界と
太田敏子著 都市3 ◆聖戦のための前線基地
森と川 歴史を潤す自然の恵み 池上俊一著 環境2
農業と遊牧の交わる都 北京の都市社会誌 妹尾達彦著 環境2

百年戦争 中世末期の英仏関係

城戸毅著 四六上製 三三〇頁 ¥三二五〇
戦争の政治史・英仏関係史・フランスの領邦君主諸侯間の関係史として活写する。本邦初の本格的百年戦争の通史。

前近代トルコの地方名士

永田雄三著 A5箱 三三九頁 ¥七三五〇
オスマン帝国近世在地社会の基本構造とその崩壊。世界史比較の視点を示唆する。現代イスタンブールを舞台に。

ゾロアスター教史

青木健著 現代イスタンブールを舞台に。四六上製 三〇〇頁 ¥二九四〇
教祖ザラスシュトラから現在まで、最新の研究成果で綴る唯一の通史。

「ヨーロッパ」とは何か?

レナエール著 / 長谷川輝夫訳 A5箱 四六六頁 ¥五九八五
アナール派創始者フェーヴルの幻の講義ノート復元成る。

中世歴史人類学試論

J.C. シュミット著 / 渡邊昌美訳 身体・祭儀・夢幻・時間
A5箱 四五〇頁 ¥七三五〇
アナール派第四世代の第一人者が過去20年の研究を世に問う。

【価格は税込】
〒101-0065 千代田区西神田2-4-1
東方学会本館

刀水書房

tel. 03-3261-6190 fax. 03-3261-2234
http://www.tousuishobou.com

黒人年鑑：事実の記録 1913-1952

Negro Year Book: An Annual Encyclopedia of the Negro, ed. by Monroe N. Work

別冊解説：大森一輝(都留文科大学教授)

人種差別に反対する運動に事実という根拠を提供した、黒人の様々な社会活動や生活状況を丁寧に調査、記録した貴重な資料。

Part 1, Vols 1-4 (covering c. 1910-1924)

ISBN 978-4-86340-034-4 • 4 vols • 1972 pp. • 2009年9月刊行予定 本体価格：予価 ¥84,000

Part 2, Vols 5-8 (covering c. 1925-1950)

ISBN 978-4-86340-035-1 • 4 vols • 2322 pp. • 2010年9月刊行予定 本体価格：予価 ¥95,000

★★★ 好評既刊 ★★★

優生学の国際的展開

The Eugenics Movement: An International Perspective, ed. by Pauline M. H. Mazumdar, University of Toronto

ISBN 10: 4-902708-39-6 • ISBN 13: 978-4-902708-39-4 • 6 vols • c. 2,000 pp. 本体価格：¥168,000

近代テロリズム基礎資料集

Early Writings on Terrorism, ed. by Ruth Kinna, Loughborough University, UK

ISBN 10: 4-902708-20-5 • 3 vols • c. 1,200 pp. 本体価格：¥80,000

Athena Press



〒112-0011 東京都文京区千石4-33-18

TEL. 03-3946-2117 FAX 03-5977-8026

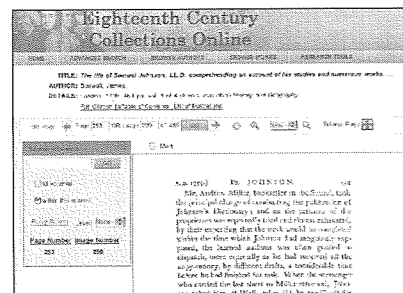
www.athena-press.co.jp • eigyo@athena-press.co.jp

18世紀刊行の英語・英語文献4000万頁をフルテキスト検索!

18世紀英語・英国刊行物データベース

Eighteenth Century Collections Online

無料トライアル 英語圏の全印刷物を網羅、あらゆる分野・形態のものを収録
実施中!!



21世紀の我々がインターネットで様々な情報を引き出せるように、18世紀の情報もパソコンで自在に検索できたらー。18世紀の英語圏刊行物20万点を完全収録し、全文検索を可能にするEighteenth Century Collections Online (ECCO)は、「18世紀のインターネット」とは言えないまでも、それに限りなく近い環境を研究者や学生に提供する画期的なオンライン商品です。ジョンソン、ロック、スウィフト、ケンペル、ギボン、その他無数の文筆家たちが遺した4000万頁にのぼる出版物の一語一句まで、お手元のパソコンで採し当て、原書どおりの画像を閲覧することが可能です。ECCOの提供する驚異的な検索・閲覧環境をぜひご体感下さい。

「雄松堂 ECCO」で検索しますと詳細ページにアクセスできます。価格等小社営業部までお問い合わせ下さい。



株式会社 雄松堂書店
〒160-0008 東京都新宿区三栄町29
Tel 03-3357-1411 (代) Fax 03-3356-8730
E-mail: sales@yushodo.co.jp

雄松堂 京都株式会社
〒604-8101 京都市中京区御池通柳馬場角 京都朝日ビルディング5F
Tel: 075-222-0165 (代) Fax: 075-256-2032 E-mail: kb@yushodo.co.jp
雄松堂ホームページ www.yushodo.co.jp

ドイツ・フランス 共通歴史教科書 [現代史]

1945年以後のヨーロッパと世界

ペーター・ガイス、ギョーム・ル・カントレック 監修
福井孝弘、近藤孝弘 監訳 A4判/並製/348頁
◎定価5040円(本体4800円+税)



独仏両国によって構成された執筆陣が長い対立の歴史をもつ両社会間の理解・接近・和解への努力を結集して編纂した高校生用共通歴史教科書の第1弾。第二次大戦後の世界を取り上げた高校最終学年用の歴史教科書として2006年に両国で刊行されたものである。

イタリアの歴史 [現代史]

イタリア高校歴史教科書

ロザリオ・ヴィッラリ 著 村上義和、阪上眞千子 訳 A5判/並製/468頁
◎定価5040円(本体4800円+税)

イタリア高等学校で使用される歴史教科書の邦訳。世界史の中の一環としてイタリア史を位置づけ記述する、原書三巻より現代史部分を訳出した。イタリア全体を覆う過去の称賛といった歴史修正主義を排し史実に接近する方法論獲得を目指す。

バルカン史と歴史教育

「地域史」とアイデンティティの再構築

柴 宜弘 編 A5判/並製/404頁 ◎定価5040円(本体4800円+税)
「バルカン」という地域・アイデンティティは存在するのか? その仮構性に言及しつつ、旧ユーゴスラヴィア諸国や周辺諸国のナショナル・ヒストリー・歴史教育が互いにどう影響を及ぼし、現在に至るのか、中国・韓国など東アジアの事例も交えながら分析する。

フィンランドの歴史

デイヴィッド・カービー 著 百瀬 宏、石野裕子 監訳
東 眞理子、小林洋子、西川美樹 訳 ◎定価5040円(本体4800円+税)
ヨーロッパ北端の貧しい農業国が、発言力があり自信に満ちた欧州国家と生まれ変わった道筋を辿る。

スコットランドの歴史と文化

日本カレドニア学会 編 ◎定価9975円(本体9500円+税)
スコットランドが築き上げた独自性と創造性を、歴史・文学・演劇などから多面的に解き明かす。

ヨーロッパの普遍主義

近代世界システムにおける構造的暴力と権力の修辭学

イマニュエル・ウォーラーステイン 著 山下範久 訳
◎定価2310円(本体2200円+税)
16世紀から現在までを世界システム論に基づいて検証、その臨界性を指し示す新たな展開。

激動のトルコ 9-11以後のイスラームとヨーロッパ

内藤正典 編著 ◎定価2835円(本体2700円+税)
東西文明のはざままで揺れ動きつづけるトルコ。この国には、どんな未来が待っているのか。

イスラーム世界の奴隷軍人とその実像

17世紀サファヴィー朝イランとコーカサス
前田弘毅 編著 ◎定価7350円(本体7000円+税)
サファヴィー朝を支えたのは、グラム(王の奴隷)と呼ばれるコーカサス地方出身のエリート軍事集団だった。ペルシア語やグルジア語の資料を駆使して、新しい地域史を構築する。

人権の歴史 古代からグローバリゼーションの時代まで

ミシェル・R・イシエイ 著 横田洋三 監訳
滝澤美佐子、富田麻理、望月康恵、吉村祥子 訳 ◎定価8400円(本体8000円+税)
古代から現代までの人権・人道関係の文書を分析した、人権の歴史に関する学際的研究書。

明石書店 〒101-0021 東京都千代田区外神田6-9-5 http://www.akashi.co.jp
TEL: 03-5818-1171 FAX: 03-5818-1174 振替00100-7-24505

ロベスピエール著作集

Œuvres de Maximilien Robespierre
Publication de la Société des études robespierristes

全10巻+補遺1巻

5841頁 23 x 14 cm. 2007年~2008年刊

ロベスピエール研究会設立100周年記念出版。1912年~1967年刊の全10巻を復刻し、新たに補遺1巻を刊行。

ナポレオン書簡集

Napoléon Bonaparte - Correspondance générale
Publié par la Fondation Napoléon

全13巻

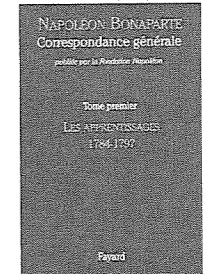
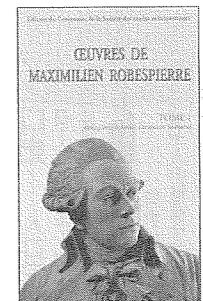
各巻約1000頁 24 x 16 cm. 2004年刊行開始

1784年から1821年までの書簡36000通を収録。2009年5月までに第6巻までを刊行。2013年完結予定。

フランス書専門店

フランス図書

〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-12-9 http://www.francetosho.com/
TEL: 03-3346-0396 FAX: 03-3346-9154 E-MAIL: frbooks@sepia.ocn.ne.jp



Pax Britannica より ProQuest

19C/20C House of Commons Parliamentary Papers [英国議会資料オンライン版 1801-2004年]

提供元であるプロクエスト社と国立情報学研究所(NII)及び、国立大学図書館協会(JANUL)、公私立大学図書館コンソーシアム(PULC)が提携することにより、本オンライン版の共同購入プロジェクトが昨年スタートいたしました。現在29校が、画期的な特別価格にて既にご購入済みです。現在フリー・トライアルを募集いたしておりますので、是非ともこの機会に本資料と共に全文検索の威力をお確かめ下さい。詳しくは、弊社の小久保(kokubo@bunsei.co.jp)までお問い合わせください。

Pax Americana Readex U.S. Congressional Serial Set, 1817-1980

complete in July, 2009 (and continuation 1981-1994 will be offered soon) [米国議会資料
American State Papers, 1789-1838
House and Senate Journals, Series 1, 1789-1817
Senate Executive Journals, 1789-1880
オンライン版]
(1995年以降は現在までGPO等のOnline資料がご利用できます。)

ARCHIVES OF AMERICANA アメリカの資料は豊富な Readex社の Online editionで フリー・トライアルをお申し込みください

Early American Imprints (7万点・約7百万頁)
In cooperation with the American-Antiquarian Society.
Series I: Evans, 1639-1800 Series II: Shaw-Shoemaker, 1801-1819

American Historical Newspapers
• **Early American Newspapers** (nearly 2,000 Am. Newspapers from 50 states)
Series 1: 1690-1876 Series 2: 1758-1900 Series 3: 1829-1922 Series 4: 1756-1922
Series 5: 1777-1922 Series 6: 1741-1922 Series 7: 1773-1922
• **Hispanic American Newspapers, 1808-1980** (approx. 100 titles)
• **African American Newspapers, 1827-1998** (approx. 270 Papers)

American Broadside and Ephemera
Series I: 1760-1900 (15,000 Broadside, 1820-1900: 15,000 Ephemera, 1760-1900)

文生書院

〒113-0033 東京都文京区本郷6-14-7
電話(03)3811-1683・Fax(03)3811-0296・e-mail: info@bunsei.co.jp

イギリス毛織物工業の展開 産業革命への途

坂巻清著 世界最初の産業革命はどのようにして始まったのか。欧米の最近の研究動向をふまへ、イングランド西部、ヨークシャー、ランカシャーなど地域繊維工業に即して実証的に分析。
六五〇〇円

イギリスの階級社会

D・キャナダイン著／平田雅博・吉田正広訳 グローバリズムによって格差が拡大しているという。そもそも階級とは何か。二大階級か、三層構造か、それともヒエラルキー社会か。新たな視点からのイギリス近現代史。
三六〇〇円

大塚久雄論

楠井敏朗著 近代社会成立の経済的・人間的条件について比較研究を続け、また「マルクス・ヴェーバー研究」など日本の社会科学研究をリードした大塚の人と学問を語る。
四六〇〇円

日英中世史料論

鶴島博和・春田直紀編著 近代文書形式学とナショナル・ヒストリーの呪縛をふりほどき、テキストのもつ可能性を追求した中世史料論待望の一冊。
六〇〇〇円

進歩の触手

帝国主義時代の技術移転
D・R・ヘッドリク著／原田勝正・多田博一・老川慶喜・濱文章訳 西
欧列強のアジア・アフリカ支配は飛躍的な工業技術進歩めきには語れない。船舶、鉄道、電気通信、工業・冶金などの技術は植民地にとのようにもたらされ、受容されたのか。
四五〇〇円

ドイツ近代都市社会経済史

森宜人著 世界の「模範」となったドイツの都市。電力がもたらしたダイナミズムを軸に、都市の近代化の歩みを実証的に解明する。五六〇〇円

日本経済評論社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-2 TEL 03(3230)1661 FAX 03(3265)2993
http://www.nikkeihyo.co.jp (税別)

私立学校からみる近代フランス

19世紀リヨンのエリート教育
前田更子著
リヨンに存在した私立中等学校の活動を検討し、教育システムの形成・変遷過程を考察。さらに教育に関わる職能集団の変質をたどり、フランス国家のあり方を再検討する。
A5上製 三〇四頁 四一〇〇円

貿易の嫉妬

国際競争と国民国家の歴史的展望
イシユトファン・ホント著／田中秀夫監訳／大倉正雄・渡辺恵一訳者代表
ヨーロッパにおける近代国民国家の歴史の際立った側面を思想的観点から深く抉り出す。
A5上製 五七六頁 六二〇〇円

近代イギリスと公共圏

公共圏の形成と歴史
A5上製 三二二頁 四一〇〇円
社会史、思想史、政治文化論、ジェンダー論等の成果を基礎として公共圏の歴史的構造と機能に注目し、「公」に関わる独自の伝統を形成した近代イギリスの一面を照射。

記憶表現論

笠原一人・寺田匡宏編
過去の出来事を「大きな物語」としての歴史やその実証、更に個人的な「思い出」からも解き放ち、万人に開かれたものへ、記憶の伝え方を、様々な表現分野から論じる。
四六上製 三〇四頁 四一〇〇円

地域研究

特集・アフリカ ―〈希望の大陸〉のゆくえ
二五二〇円

自由と統一への長い道

ドイツ近現代史 各八四〇〇円
I巻 一七八九―一九三三年 II巻 一九三三―一九九〇年
H・A・ヴィンクラー著／後藤俊明・奥田隆男・中谷毅・野田昌吉訳
一九九〇年のドイツ統一を歴史の消尽点とする「ドイツ特有の道」論に基づいた歴史書。

近世ドイツ人口史

人口学研究の傾向と基本問題 二九四〇円
ヨージェフ・エマー著／若尾祐司・魚住明代訳
人口学全領域の素材をまとめ、本分野の研究の基本問題と議論を整理。学生の入門書に。

イタリア都市社会入門

12世紀から16世紀まで 二九四〇円
第二次世界大戦でユダヤ人の財産を合法的に奪い、戦後に外交戦略として利用。
政治・経済・生活・文化等の日常性と、非日常という視点から描く「日常生活史」。

〒606-8224 京都市左京区北白川京大農学部前 昭和堂 郵便振替 01060-5-9347 *定価は税5%込み価格
TEL 075-706-8818 FAX 075-706-8878 http://www.kyoto-gakujutsu.co.jp/showado/

昭和堂

丸善の英文校正／日英・英日翻訳サービス

「論文を英文で執筆したけど、ネイティブレベルには到底・・・」、「英語は苦手」、「翻訳する時間がない」などお困りではないでしょうか。

丸善ではそんなお客様のために、**高品質な英文校正サービス／日英・英日翻訳サービス**を提供しております。

今すぐ以下のサイトをご覧ください、無料でお見積をいたします

丸善の研究者向けインターネット購買サービス

Knowledge Partner

<http://pro.maruzen.jp/shop/static/kousei/>

「Knowledge Partner」は丸善の学術資料インターネットサービスです。当サイトより英文校正・翻訳サービスを提供いたします。ご利用には会員登録が必要となりますので、お申込みは上記サイトからまたは、弊社営業担当者にお申し付けください。

※お支払いは伝票決済でご提供いたします。しかも、公費・私費の選択もできますので大変便利です。

お問い合わせは下記までどうぞ

MARUZEN

ソリューションセンター内
【英文校正・翻訳サービスコールセンター】

〒103-8244 東京都中央区日本橋3-9-2
丸善株式会社 教育・学術事業本部
Tel: 03-3273-3610 FAX: 03-3272-0472
E-mail: ECCenter@maruzen.co.jp
営業時間: 月～金(祝・祭日を除く)9:00～17:30

サービスの特徴

高品質

校正・翻訳はすべて
ネイティブスピーカー
校正・翻訳後の校正も
ダブルチェック

対象分野

あらゆる
分野

もちろん歴史学も!

医学論文から文系科目
まであらゆる学術分野
に対応

対象ドキュメント

さまざまな
ドキュメント

学術論文、学術関連文書
技術マニュアル
ビジネス文書
法務文書(特許など)
医薬文書(薬事申請など)
ファイル形式
WORD, EXCEL, PPT,
TeX, PDF, などに対応

見出し語4万5千。古ラテン語から近代の学術用語まで幅広く収録し、古典語学習者のみならず宗教音楽や動植物の学名などに関心のある方にも便利。多数採録したラテン語文献からの用例には出典(作家名)を記した。西洋古典百科事典としても利用できるよう、地名・人名、神話に登場する神々や人物の名も多数収録し、カナ表記を示した。巻末に使いやすい変化・活用表と和羅語彙集を付して学習の便をはかった。古代ローマ時代の地図付き。

羅和辞典

LEXICON LATINO-JAPONICUM
Editio Emendata

水谷智洋(編)

四六判 上製 914頁 定価 6,300円(本体6,000円+税)
ISBN978-4-7674-9025-0 C3587



研究社

〒102-8152 東京都千代田区富士見2-11-3
03(3288)7777 FAX 03(3288)7799(営業)
<http://www.kenkyusha.co.jp>

研究社のオンライン辞書検索サービス
<http://kod.kenkyusha.co.jp>

Kenkyusha Online Dictionary **KOD**

古典から近代まで収めた
コンパクトなラテン語辞典

改訂版

オックスフォード・ブリテン諸島の歴史全11巻

日本のイギリス史理解を変えるイングランド一國史観を超えた画期的通史!

オックスフォードが68人の研究者を結集し、紀元前55年〜2001年までのブリテン諸島史を編年体で詳述した画期的通史。イングランド一國史観をのりこえて、イングランド・ウェールズ・スコットランド、アイルランドの諸地域の総合的関係を視野に収めたはじめての通史。A5判上製四二八頁、本体4800円/5200円(送料別)

第1回記念本
第9巻 19世紀 1815年〜1901年

コリン・マシュー編 君塚直隆監訳 世界の帝国として強大な覇権を誇り、やがて衰退への途を辿るプロセスを克明に描く、ウィクトリア朝ならびにイギリス帝国の歴史。 ●5040円

《続刊》
第1巻 ローマ帝国時代のブリテン島/第2巻 ポスト・ローマ/第3巻 ヴァイキングからノルマン人/第4巻 12・13世紀 1066年〜1280年頃/第5巻 14・15世紀/第6巻 16世紀 1485年〜1603年/第7巻 17世紀/第8巻 18世紀 1688〜1815年/第9巻 19世紀 1801年〜1951年/第10巻 20世紀 1945年以降

歴史学と社会学理論(第2版)

6月22日、待望の第2版いよいよ発売!
ピーター・バーク著/佐藤公彦訳「ポストモダニズム」とその歴史学大の影響について大幅加筆した名著の第2版。 ●6090円

中世主義を超えて

イギリス中世の発明と受容
松田隆美・原田範行・高橋勇編著「中世」概念の再検討を通じ、中世研究のありようを根本的に問い直す論考集。 ●6090円

近代都市バルセロナの形成

都市空間・芸術家・パトリック・山道佳子・八嶋由香利・鳥居徳敏・木下亮著 一九世紀末のバルセロナを、都市計画・万博など様々な事象から読み解く。 ●5040円

マジエリー・ケンプの書

イギリス最古の自伝
石井美樹子・久木田直江訳 マジエリー晩年の頃に口述筆記された回想の書を本邦初の全訳。 ●9975円

慶應義塾大学出版会

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 [図書目録送呈・価格税込]
<http://www.keio-up.co.jp/> ☎03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

2007年6月～2009年5月の新刊 展示リスト

アメリカ	中・東欧/ロシア	イギリス・アイルランド	国際関係
バシヴァル・ローエル D・シュトラウス著 三八〇円+税	ロシアの拡大と毛皮交易 森永貴子著 三三〇円+税	イングランド国教会包括と寛容の時代 青柳かおり著 三五〇円+税	冷戦その歴史と問題点 J・L・ガティス著 河台秀和訳 三五〇円+税
ドクター・スリスの素顔 J&N モーガン著 四五〇円+税	ロシア精神史への旅 野口和重著 三三〇円+税	ミルトンと17世紀イギリスの言説圏 小野功生著 五五〇円+税	NATO 米欧安全保障関係の軌跡 金子讓著 三八〇円+税
北米の小さな博物館2 北米エスニシティ研究会編 二〇〇円+税	写集アルメニア共和国の建築と風土 篠野志郎 二八〇円+税	シャールロット・ブロンテ書簡全集 註解全三巻 二七〇〇円+税	原爆投下とトルーマン J・ウォーカー著 林義勝訳 一九〇円+税
リンカン 神になった男の功罪 土田宏著 二五〇円+税	ヨーロッパ/ポーランド/ロシア 1918-1921 阪東宏著 三五〇円+税	北アイルランドのプロテスタント 松井清著 三八〇円+税	クラウゼヴィッツと「戦争論」 清水/石津編 三八〇円+税
貧困と怒りのアメリカ南部 A・ムート著 樋口映美訳 三五〇円+税	市場経済下の苦悩と希望 今井和由・大田・森著 三〇〇円+税	帝国に奉じたチャーチル(上下) 前田靖一著 各五〇〇円+税	鮮烈ピスマルク革命構造改革の先駆者 前田靖一著 三五〇円+税
リリアン・E・スマイス「今こそその時」 廣瀬典生訳 二八〇円+税	日本・ポーランド関係史ルトコフスカ著/柴理子訳 三〇〇円+税	韓国をめぐる列強の角逐 19世紀末の国際関係 崔文衡著 三〇〇円+税	韓国をめぐる列強の角逐 19世紀末の国際関係 崔文衡著 三〇〇円+税
アメリカ日系二世の徴兵忌避 森田幸夫著 七〇〇円+税	ヒトラー、ゾルゲ、トーマス・マン K・プリングスハイム著 三五〇円+税		
祝祭都市ニューヨーク一九二〇年代 アメリカ文化 田野勲著 三〇〇円+税			

彩流社

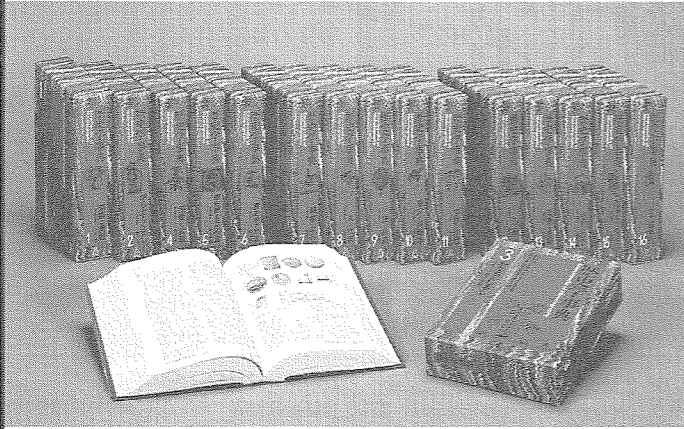
〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2
<http://www.sairyusha.co.jp> TEL 03-3234-5931 FAX 03-3234-5932
e-mail sairyusha@sairyusha.co.jp

全巻完結!

西洋史・東洋史・日本史が結集して挑んだ前例のない試み
各巻テーマ別の歴史学事典シリーズ

歴史学事典

全15巻・別巻1



◆ 編集委員 ◆

樺山 紘一
尾形 勇
加藤 友康
川北 稔
岸本 美緒
黒田 日出男
佐藤 次高
南塚 信吾
山本 博文

A5判 上製美装ケース入り
総頁平均 850頁

世界史的な視野の概念事典、ついに完結!

多領域を横断的に網羅し、ベルリンの壁崩壊、ソ連解体、湾岸戦争、9・11 など変動する世界状況を見据えながら、古今東西の歴史概念を解説する世界初の試み。人類が描いた軌跡から世界を読む。

全巻揃価 267,333円

出版祥会第5回新聞社学芸文化賞受賞

第1巻	人間の経済活動を歴史的に捉える 交換と消費	16,311円	第9巻	法の世界から人間社会を描く 法と秩序	16,800円
第2巻	「日常性」の歴史的な百科事典 からだとくらし	16,311円	第10巻	なぜ人々は集まるのか? 組織はどのように維持されるか 身分と共同体	16,800円
第3巻	歴史版「イメージシンボル事典」 かたちとしるし	16,311円	第11巻	世界認識の技法への世界史的アプローチ 宗教と学問	16,800円
第4巻	世界はどのように変わるのか 民衆と変革	16,800円	第12巻	王と国家をめぐる豊饒な概念の世界へ! 王と国家	16,800円
第5巻	歴史家人名事典、待望の決定版 歴史家とその作品	16,800円	第13巻	地球経済の視野からとらえなおす 所有と生産	16,800円
第6巻	歴史学における方法の復権 歴史学の方法	16,800円	第14巻	人間の営みとしての「わざ」と「もの」 ものとわざ	16,800円
第7巻	戦争の歴史、外交の歴史 戦争と外交	16,800円	第15巻	古代の絵文字からコンピュータ世界まで コミュニケーション	16,800円
第8巻	人はどんな仕事をしてきたのか? 人と仕事	16,800円	第16巻	別巻 総索引	16,800円

弘文堂
www.koubundou.co.jp

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-7
Tel.03-3294-4801 Fax.03-3294-7034 (表示価格は税込)

●放送大学テキスト

好評発売中

地中海世界の歴史 - 古代から近世 -

木村凌二・高山博
A5/232P ¥2,520

歴史と人間

草光俊雄・五味文彦・杉森哲也
A5/224P ¥2,415

ヨーロッパの歴史と文化 - 中世から近代 -

草光俊雄・河原温
A5/216P ¥2,415

地域文化研究Ⅲ(改訂版) - ヨーロッパの歴史と文化 -

草光俊雄・宮下志朗
A5/212P ¥2,310

異文化の交流と共存

工藤庸子
A5/248P ¥2,730

地域文化研究Ⅰ(新訂) - 近現代ヨーロッパ史 -

木村靖二・近藤和彦
A5/244P ¥2,940

アメリカの歴史と文化

遠藤泰生
A5/280P ¥2,940

ヨーロッパの歴史 (新訂)

江川温
A5/180P ¥2,310

●ご希望の方に「図書目録」をお送りします。詳しくは www.ua-book.or.jp



財団法人 放送大学教育振興会
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1

TEL 03-3502-2750
FAX 03-3592-2482

歴史学の遠近

「西洋の十大史書」「マキアヴェリ」の教訓、「歴史家の宗教観」「ナチス・ドキュメント」など、歴史の見方、歴史書の読み方など、歴史学を遠近法のパースペクティブから描く。四六判 236頁 1680円

西村貞二著

西洋美術への招待

カラワール四五点、モノクロ一五三三の画像を掲載。ギリシャ美術から現代アートまで、絵画を中心に西洋美術の歴史を概観できる、西洋美術ファン待望のチチエローネ! A5判 407頁 2000円

田中英道監修

レオナルド・ダ・ヴィンチの世界像

モナ・リザとは誰か? その背景とは? 二重人物像とは何か? 世界初めての巨大スフォルツァ像の再建! 巨匠の謎を八大発見から解き明かす。B5判 409頁 6300円

田中英道著

システイーナ礼拝堂天井画

「イメーシ」となった神の慈悲——若山映子著
教皇ユリウス二世の懇請に応えるべく、あらゆる手法を駆使して完成した壮麗なフレスコ画。その全ての謎が今、明らかに。本書のためにヴァティカン技師が撮影した十二点のカラワール写真を掲載。B5判 2分冊箱入 本篇309頁/資料篇90頁 4830円

若山映子著

ローマ帝国とアウグスティヌス

「古代末期北アフリカ社会の司教——長谷川宜之著
司教裁判、有力者への請願など、英雄アウグスティヌスの司教としての活動と役割を解明し、古代北アフリカ末期社会のあり方に光を投げかける。A5判 274頁 3150円

長谷川宜之著

東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 ☎022-214-2777 FAX 022-214-2778

E-mail: info@tups.jp http://www.tups.jp

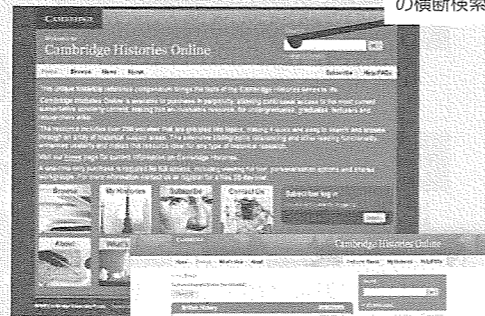
[価格税込]

Cambridge Histories Online

BRINGING WORLDWIDE HISTORY TO LIFE

歴史学の定番レファレンス『Cambridge Histories』シリーズが、オンライン版になりました。1960年以降に出版された250巻が15の学術分野に渡り収録されており、そのデータ量は196,000ページ分にも及びます。また、既に絶版となっている貴重な資料も含まれています。検索やパーソナライズ機能などの様々な充実した機能を通して歴史学の学術資料がよりアクセスしやすいものとなり、歴史学に関連した幅広い分野の学生や研究者に最適です。今後も、新刊や既刊のタイトル、改訂版が随時追加される予定です。

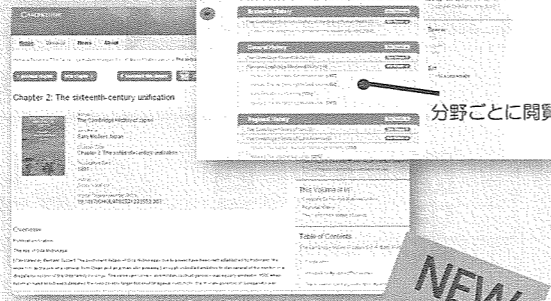
『Cambridge Histories』シリーズとは
1902年に出版された「ケンブリッジ版近代史」を皮切りに、現在まで、政治・経済史またはテーマに重点をおいたタイトルを多数刊行しています。歴史・政治思想・哲学・言語・文学・演劇・音楽・宗教・科学に関する様々なセットがあり、学術を志す方々に非常に人気のあるシリーズのひとつです。



全タイトルの横断検索

収録分野

American History	米国史
British History	英国史
Economic History	経済史
General History	一般史
History of Science	科学史
History of the Book	書物・図書館史
Language and Linguistics	言語・言語学史
Literary Studies	文学研究
Music	音楽
Philosophy	哲学
Political and Social Theory	政治・社会論
Regional History	地域史
Religious Studies	宗教研究
Theatre Studies and Performing Arts	観劇研究・舞台芸術
Warfare	戦争研究



NEW

<主な機能>

- ・ 検索機能
- ・ 検索の保存など様々なパーソナライズ機能
- ・ 引用の送信・ダウンロード機能
- ・ Open URL、CrossRef 対応
- ・ COUNTER 準拠の利用統計
- ・ MARC レコード、タイトルリストの取得可能

<販売体系>

同時アクセス数に基づく年間契約、または、永久アクセス（メンテナンス費用あり）個人でもお求めいただけます。大学単位で購入をご検討されている場合、30日間の無料トライアルにお申し込みいただけます。価格・詳細については、洋書取り扱い書店までお問い合わせください。

1584・2009

425 YEARS OF CAMBRIDGE
PRINTING AND PUBLISHING

histories.cambridge.org

(株) Cambridge University Press Japan
〒101-0054 東京都千代田区神田錦町1-10-1 サクラビル1階
Tel: 03-3291-4068 Fax: 03-3219-7182 Email: japanacademic@cambridge.org
* 著作権、翻訳に関するお問い合わせもお気軽にどうぞ

1475年~1700年の225年間に刊行された英語書籍8万点の全文をマイクロフィルムに収録

初期英語書籍集成

1475年-1640年 および 1641年-1700年

Early English Books (STC) I & II

STC I=84units 既刊 STC II=132units 既刊

ユニット単価 ¥550,000 ~ ¥710,000 (ユニット分売いたします。)

薔薇戦争の終息とヘンリー7世即位から清教徒革命、名誉革命を経てブリテン王国の成立の頃までの英国と国外および北米植民地の英語文献が対象。

収録書籍例：歴史では…◆議会録、王室文書類、条例 ◆年代記、暦、風刺文、風刺画 ◆流行歌、パンフレット…たとえば1616年の「魔女の見分け方—その正しい方法」といった当時の民衆に流布したものなど。宗教では…◆説教集、聖者伝、典礼文 ◆1616年のキング・ジェームズ（欽定版）聖書、その他初期の英訳聖書、ラテン語、ギリシャ語、ウェールズ語聖書 ◆1549年の英国国教会の祈禱書
文学分野では…◆チョーサーの「カンタベリー物語」、マロリーの「アーサー王の死」等、古典作品の初版 ◆シェイクスピア作品の数種のクォートとフォリオ ◆ルネッサンス期の著名/無名作家による無数の作品。

(UMI/Proquest)-US-/日本指定代理店：(株)紀伊國屋書店

CLIO

VOL.23

対談 桜井万里子・姫岡とし子 「ジェンダー史学を語る」

木谷明人「13世紀後半カスティーリャ王国における地方統治制度の生成」
見瀬悠「ルイ15世期フランスにおける高等法院とモプー改革」
飯野義寿「第三共和政期ブルターニュにおける農業組合と地域社会」

館葉月「フランス留学体験記」

定価 1,000円

クリオの会

〒113-0033 東京都文京区7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科
西洋史学研究室内 Tel:(03)5841-3789 Email:clionokai@gmail.com

フランス・ルネサンス王政と都市社会 リヨンを中心として

小山啓子 近世初期のフランスにおける、権力構造の特質、王権と都市の「対話」の場となった儀礼・祝祭の様相、政治的交渉と台意形成のあり方、都市エリート層の再編に関する分析を通じて、広域権力と都市社会の具体相を明らかにする。A5判 298頁 5,670円

中世前期北西スラヴ人の定住と社会

市原宏一 ドイツ人東方植民以前のバルト海南岸における初期社会の形成を、文献史料と、ドイツ、ポーランド、スカンディナヴィアの考古学研究成果をもとに総合的に検討する。A5判 244頁 4,725円

ヴェストファーレン条約と神聖ローマ帝国 ドイツ帝国諸侯としてのスウェーデン

伊藤宏二 スウェーデンと神聖ローマ帝国皇帝との関係に焦点を定め、ヴェストファーレン条約の成立過程からその後の展開を明らかにする。条約と帝国の関係及びその歴史的意義をヨーロッパ近世の政治文化の中に位置づける試み。A5判 216頁 3,990円

ヨーロッパ中世古文書学 【第36回日本翻訳出版文化賞、第3回ゲスナー賞「本の本」部門銀賞受賞】

ジャン・マビヨン／宮松浩憲 訳 中世ヨーロッパに関する文書史料について、材質、書体、文体、下罫、印章、日付事項から、真正文書と偽文書を区別する合理的方法を提示する。西洋古文書学の金字塔。世界初の現代語訳。B5判 762頁 14,700円

フランス第二帝制の構造 野村啓介 A5判 320頁 5,880円

フランス中世都市制度と都市住民 シャンパーニュの都市プロヴァンを中心にして 花田洋一郎 A5判 354頁 6,090円

フランス絶対王政と領主裁判権 志垣嘉夫 A5判 328頁 6,090円

九州大学出版会

〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 〈価格税込〉
☎092(641)0515 / Fax 092(641)0172 / http://www.kup.or.jp/

西洋古典叢書
リウイウス ローマ建国以来の歴史 〈全14巻〉
第1巻 伝承から歴史へ(1) 岩谷智訳 / 四六変 251頁・3,255円
第3巻 イタリア半島の征服(1) 毛利晶訳 / 四六変 208頁・3,255円

祈りの心身技法
——十四世紀ビザンツのアトス静寂主義——
あたくもヨイガのごとき心身の実践により神の光の観想体験を得よう
とした神秘主義運動に焦点をあて、東方正教修道生活の精髓を探る。

紛争のなかのヨーロッパ中世
服部良久 著
372頁・5,900円

チャリテイとイギリス近代
金澤周作 著
A5判・430頁・5,200円

アルプスの農民紛争
——中・近世の地域公共性と国家——
服部良久 著
A5判・300頁・5,565円

18世紀半ば以来のイギリスにおける百年余に及ぶチャリテイ実践の歴史をはじめて活写する。救貧法史や福祉国家形成史、近代化論や帝国史が描けなかった福祉社会のもう一つの源。

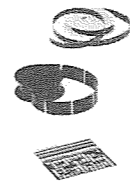
京都大学学術出版会

606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内〈価格は税込〉
http://www.kyoto-up.or.jp/ TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

◆マイクロフィルム・フィッシュがパソコン画面で閲覧可能に

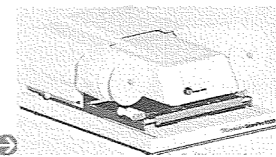
◆高速マイクロフィルムスキャナー◆

スキャンプロ 1000

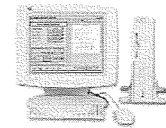


マイクロ製品

ScanPro1000



IEEE1394(ファイヤーワイヤ)で
ウィンドウズ PC に接続



ウィンドウズ PC

デジタルデータに

変換可能

★ファイル保存

★プリント出力

★FAX

★Eメール添付

SCANPRO1000+フィッシュ/アパチャー/16mm/35mm ロール(マニュアル)セット価格
¥1,659,000(消費税込み)

※本体価格とは別に「搬入・据付・調整費」¥52,500 と「教育費」¥21,000 を申し受けます

◆システム概要

16mm および 35mm マイクロフィルム、マイクロフィッシュ(COM、ジャケット)、アパチャーカード、マイクロカード(オプション)を1台でスキャンできるマイクロフィルムスキャナーです。ケーブル、スキャンソフト、PCIカード(IEEE1394)は標準装備ですので、ウィンドウズ PC への接続がすぐに可能です。

◆高速スキャン(1秒)、グレースケール

標準機能でグレースケールをサポートし、最大 600DPI のスキャンでも 1秒で画像を取り込みます。高速、高品質のスキャンが可能です。

◆パソコンのプリンタで印刷が可能に

ウィンドウズ PC に接続することで、パソコンに接続されているプリンタでの印刷が可能になります。従来のマイクロリーダーを利用した印刷に比べ、コストの軽減をはかれます。

◆かんたん操作でマイクロ資料の利用を促進

使い勝手の悪さから利用者に敬遠されがちなマイクロ資料ですが、専用スキャンソフトウェアを使って誰でも簡単な操作スキャンができますので、ご所蔵の資料の利用促進に活用できます。

◆省スペース

設置面積は A3 サイズ以下であり、デスクトップタイプのスキャナーですので、PC の隣りに置いてご使用いただけます。重要も9Kg で持ち運びも簡単です。

◆7~54倍ズームレンズ

ズームレンズ(7~54倍)が標準装備されていますので、様々な倍率のマイクロフィルムのスキャン、またはコマの一部の拡大取り込みを1台で行えます。

機能説明・デモンストレーションを承ります。お申し付けください

販売代理店 極東書店

輸入元: 株式会社マイクロテック



FAR EASTERN BOOKSELLERS
KYOKUTO SHOTEN LTD
P.O. Box 72, Kanda, Tokyo 101-8672, JAPAN

〒101-8672 東京都千代田区神田神保町 2-12 安富ビル TEL 03(3265)7531 FAX(3265)4656
〒530-0047 大阪府北区西天満 2-10-2 幸田ビル TEL 06(6362)5515 FAX(6362)8882
〒604-0985 京都市中京区麩屋町通丸太町下る 井口ビル TEL 075(231)2093 FAX (231) 3859
〒810-0073 福岡市中央区舞鶴 1-3-14 小櫃ビル TEL 092(751)6956 FAX (741) 0821

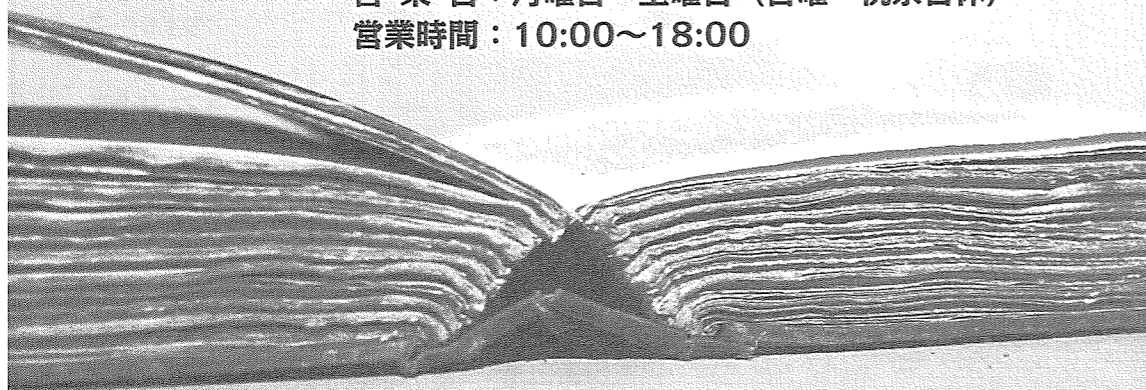
URL: <http://www.kyokuto-bk.co.jp>

E-Mail: info@kyokuto-bk.co.jp

LIBRAIRIE
EX-LIBRIS
A.P.O.N.
エックス・リブリス
フランス書籍専門

有限会社 エックス・リブリス
フランス書籍専門 新刊書 古書 買入・調査・探求
http://www.exlibrisjp.com

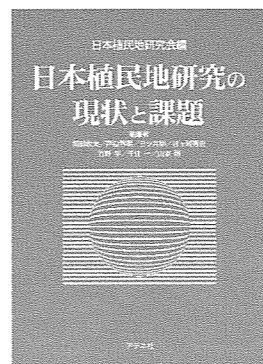
営業日：月曜日～土曜日（日曜・祝祭日休）
営業時間：10:00～18:00



〒112-0011 東京都文京区千石 4-14-8 ヒラキコーポ 101
TEL 03-5319-4186 FAX 03-5319-4169
e-mail: exlibris@sepia.ocn.ne.jp

日本植民地研究会編
日本植民地研究の現状と課題

A5判/並製本/縦2段組/総256頁 ●税込定価 3780円 (送料160円)



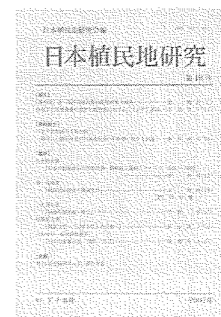
近年、植民地に関する研究は、ポストコロニアル研究や帝国研究の高まりのなかで、豊富になるとともに多様化が進展している。こうした中で、戦前の『大日本帝国』における公式・非公式の植民地について各地域ごとの研究蓄積の現状を明らかにするとともに、研究視角の変遷にも視野を広げ、植民地研究全体の動向を鳥瞰することで、今後の研究が取り組むべき課題や方向を提示したのが本書である。

- 第1章●帝国主義論と植民地研究/岡部牧夫
- 第2章●ポストコロニアルと帝国史研究/戸邊秀明
- 第3章●朝鮮/三ツ井崇
- 第4章●台湾/谷ヶ城秀吉
- 第5章●樺太/竹野 学
- 第6章●南洋群島/千住 一
- 第7章●満州/山本 裕

発行・発売 株式会社アテネ社
http://www.atenesya.com

〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-9-1
電話 03-3239-7466 FAX 03-3239-7468
メール info@atenesya.com

日本植民地研究会編
日本植民地研究



B5判/年1回・7月刊行

バックナンバー目録贈呈
(欠号・残部僅少あり)
【ご注文は小社まで】

各巻 税込定価 1530～4200円
(送料160円)
20号まで刊行済み

阪大リーブルシリーズ

ドイツ文化史への招待
芸術と社会のあいだ

三谷研爾 編 292頁 定価2100円

猫に紅茶を

生活に刻まれたオーストラリアの歴史

藤川隆男 著 220頁 定価1785円

ロシア 祈りの大地

津久井定雄 有宗昌子 編 290頁 定価2205円

歴史学のフロンティア

地域から問い直す国民国家史観

秋田茂 桃木至朗 編 266頁 定価2100円

わかる歴史 面白い歴史 役に立つ歴史

歴史学と歴史教育の再生をめざして

桃木至朗 著 270頁 定価2100円

※「主婦」になったパリのブルジョワ女性たち

松田祐子 著 224頁 予価2100円 (近日発売予定)

石澤小枝子 高岡厚子 竹田順子 中川亜沙美
A4判・フルカラー・上製・432頁 定価21000円



- 第1章 絵本のあけぼの
- 第2章 宮廷・貴族の子どもたちの文学と挿絵
- 第3章 子どものための初期の雑誌
- 第4章 子どもの本の開花期 一大出版社の登場
- 第5章 子どものための作家・挿絵画家の登場
- 第6章 絵本の黄金時代
- 第7章 子ども絵本に見る日本

フランスの子ども絵本史

大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7 阪大ウエストフロント
Tel. 06-6877-1614 info@osaka-up.or.jp ※価格税込

岩波イスラーム辞典

CD-ROM版
大塚和夫・小杉 泰・小松久男
東長 靖・羽田 正・山内昌之

日本最大のイスラーム辞典のCD-ROM版。宗教・歴史・政治から日常生活までをカバー、イスラームの全貌がわかる。現代世界の理解に不可欠の一冊。 価格94500円

アテネ 最期の輝き

澤田典子

紀元前四世紀、アレクサンドロス大王の華々しい遠征の蔭で、マケドニアに敗れたアテネはどのように生きていたのかを描きだす。 四六判 定価20400円

軍人皇帝時代の研究

井上文則

—ローマ帝国の変容—
混沌の過渡期とされてきた軍人皇帝時代は、ローマ帝国の統治構造が決定的再編を遂げた重要な時代であった。気鋭の画期的論考。 A5判 定価7245円

マキアヴェツリの生涯

ロベルト・リドルフ/須藤祐孝 訳・註解

人と権力と思想が織りなす壮大な歴史劇を描く。人文主義と近代政治思想を育んだ母胎、ルネサンス・フイレンツェの群像と事典。 A5判 定価189000円

岩波書店 〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
http://www.iwanami.co.jp/

[いずれも消費税5%込み]

全10巻・トータル収録時間851分の超大作 アメリカ近現代史ドキュメンタリーDVD&書籍

世界を動かしてきたリーダーの歴史的決断の瞬間や人を魅了する
スピーチ技術を余すところなく収録した歴代大統領の全軌跡

歴代アメリカ大統領の軌跡

PRESIDENTS of the UNITED STATES OF AMERICA

DVD & BOOK

ホワイトハウスの住人

こんな人におすすめ

- アメリカ史に興味のある人
- 世界の近代史に興味のある人
- 公共機関・大学等図書館関係者
- 政治家・政治に興味のある人
- 英語力を向上させたい人
- プレゼン力を磨きたい人

DVDと書籍の特長

- アメリカ議会図書館所蔵の公式映像記録を厳選
- 政治活動からプライベートまで歴代43大統領の映像を網羅
- 人々を魅了する就任演説を字幕(日・英)付映像で紹介
- 別角度からさらに詳しく解説した書籍もセット

監修 **猿谷 要**
東京女子大学名誉教授
米国史評論家

お問い合わせ・ご注文は下記までどうぞ。

株式会社クリーク・アンド・リバー社
〒102-0083 東京都千代田区麹町2-10-9 C&Rグループビル
Tel: 03-4550-0090 受付時間 9:30~18:30
e-mail: rpd-pp@hq.cri.co.jp URL: http://president.vc/

書籍「歴代アメリカ大統領の軌跡」
&
DVDビデオ 全10巻組
館内放映権/貸出権付

化粧箱入
販売価格 **250,000円** (税込)

作家の家

創作の現場を訪ねて

鹿島 茂 監訳
博多かおる 訳
プレモリッド・レー文
レナード 写真

●2940円 B4変型・208頁

ピカソの世紀

1881-1937

「キュビズム誕生から変容の時代へ」

世界で最も膨大、
最も詳しい、
ピカソの研究書。

カンブス 著
中村隆夫 訳

●5775円 四六判・1016頁

モネの庭

「花々が語るジヴェルニーの四季」

ラッセル 文
六人部昭典 監訳
大久保恭子 訳

印象派の巨匠が愛した魂のアトリエ

500もの作品が生まれたジヴェルニーの「庭」。今も世界中から多くの人々が訪れる。この庭の春夏秋冬を美しい写真と絵で綴る。「睡蓮」等の逸話や作品「ガーデニングの秘策」も紹介。

●3990円 B4変型判・172頁

美術全集 全43巻

ルノワール モデリアーニ

印象派の絵画 ●セザンヌ ●ゴッホ ●ムンク ●ロートレック ●デュラール ●ロセツタイ ●ターナー ●ピカソ ●モネ ●クリムト ●ドガ ●カナレット ●ポップ・アート ●オランダ絵画 ●シャガール ●ダリ ●マグリット ●シャルダン他

各1713~2100円

●3780円 A4判・176頁

永遠の都 ローマ物語

9歳からの夢を8000時間かけて描いたリアルな古代ローマへようこそ!

最新刊

地図を旅する 国立西洋美術館館長 青柳 正規 監訳
野中 夏実 訳
シャイエ 文・写真
イラスト

世界遺産 ローマ歴史地区
▶300点を超えるイラストと写真

大地図と写真、イラストをちりばめ、市街の隅々まで読者を誘う。歴史の宝庫を完全再現したパノラマ

特別付録
古代ローマ
大型復元地図
(502x744mm)

●2940円 A4変型・220頁

西村書店 102-0071 東京都千代田区富士見2-4-6
tel.03-3239-7671 fax.03-3239-7622 www.nishimurashoten.co.jp

近藤潤三著 統一ドイツの外国人問題

近藤潤三著 統一ドイツの変容

近藤潤三著 統一ドイツの政治的展開

●3780円 A4判・176頁

田口晃・土倉莞爾編著 キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政治

現代ヨーロッパ政治を理解する鍵の一つにキリスト教民主主義政
党がある。米英と異なりカトリックが中心であるが、戦後の福祉国
家体制を支え、保守と社民の間の中道・要政党としてあらゆる政権
に参加してきたが研究対象になったのはごく最近のことである。本
書は代表的研究者6人による約十年に及ぶ共同研究の成果。

●250,000円 (税込)

ぼく たく しゃ 東京都文京区小石川5-11-15-302
木 鐸 社 電話 (03) 3814-4195 ファックス (03) 3814-4196
http://www.bokutakusha.com

近代ヨーロッパの探究

好評既刊

A5判上製カバ

⑪ ジェンダー



「近世ヨーロッパの探究」に影響を与えた「ジェンダー観」とは。4725円

① 移民 3780円 ③ 教会 4410円 ⑨ 国際商業 4410円

② 家族 3990円 ⑧ スポーツ 4410円 ⑩ 民族 4725円

近刊 ⑫ 軍隊 阪口修平・丸島宏太編著 予価4725円*6月上旬刊行予定

イギリス帝国と20世紀(全5巻) 既刊 A5判上製カバ 各3990円

① パクス・ブリタニカとイギリス帝国 秋田茂編著

② 世紀転換期のイギリス帝国 木村和男編著

③ 世界戦争の時代とイギリス帝国 佐々木雄太編著

⑤ 現代世界とイギリス帝国 木畑洋一編著

刊 ④ 脱植民地化とイギリス帝国 北川勝彦編著 予価3990円*6月上旬刊行予定

シリウス・アメリカ研究の越境(全5巻) A5判上製カバ

① アメリカの文明と自画像 上杉忍・興孝之編著 3675円

② 権力と暴力 古矢旬/山田史郎編著 3675円

③ 豊かさの環境 秋元英一/小塩和人編著 3675円

④ 個人と国家のあいだ 家族・団体・運動 久保文明/有賀夏紀編著 3675円

⑤ グローバリゼーションと帝国 紀平英作/油井大二郎編著 3675円

⑥ 文化の受容と変貌 荒このみ/生井英考編著 4410円

MINERVA西洋史ライブラリー 既刊 A5判上製カバ

石炭で栄え 滅んだ大英帝国

山崎勇治著 ●産業革命からサッチャー改革まで 5250円

ヨーロッパのなかのドイツ

W.D.クルーナー著 丸島宏太・進藤修一/野田昌吾訳 1800~2002 6825円

空間と移動の社会史

前川和也編著 「移動」と「空間」の特質を読みとる。6300円

MINERVA歴史・文化ライブラリー 四六判上製カバ

⑬ 帝国・国家・ナショナリズム

木村雅昭著 ●世界史を衝き動かすもの 3675円

⑮ 二つの戦後・二つの近代

望田幸男著 ●日本とドイツ 2940円

経済衰退の歴史学

イギリス衰退論争の諸相 R・イングリッシュ/M・ケニー編著 川北稔訳 6300円

北米マイノリティと市民権

高村宏子著 ●第二次大戦における日系人・女性・先住民 5250円

概説 西洋法制史

勝田有恒/森 征一/山内 進編著 3360円

ローマ法とヨーロッパ

屋敷二郎監訳 関 良徳/藤本幸二訳 P・スタイン著 2940円

ローマ法の歴史

U・マンテ著 田中 実/瀧澤栄治訳 U・マンテ著 2625円

近世・近代ヨーロッパの法学者たち

勝田有恒/山内進編著 3675円

西洋の歴史 基本用語集 古代・中世編

朝治啓三編 基本的な用語を983項目を収録。 2310円

西洋の歴史 基本用語集 近現代編

望田幸男編 人名343項目・事項610項目収録。2100円

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1 ☎075-581-0296 宅配可/価格税込
E-mail eigyo@minervashobo.co.jp URL http://www.minervashobo.co.jp/

移民・難民・外国人労働者と多文化共生

日本とドイツ/歴史と現状 増谷英樹編

ドイツはなぜ移民受入れ国に転換してきたのか。日本はなぜ躊躇し混乱しているのか。移民と多文化共生はどのようにして実現できるのか。 A5判・260頁/2940円

武装親衛隊とジェノサイド

暴力装置のメタモルフォーゼ 芝 健介著

「ヒトラーのホライゾント」から「絶滅のアルバイター」へ。武装SSは、本当に栄光ある軍事組織だったのか? ジェノサイドの実行者へと変容していく姿を浮彫にする。 四六判・260頁/2520円

イギリス帝国と帝国主義

比較と関係の視座 木畑洋一著

イギリス帝国の影は、21世紀の現在にまでも長くのび「未完の脱植民地化」という問題を残し続けている。帝国支配の構造と心性とは何か。 四六判・280頁/2520円

ボスニア内戦

グローバリゼーションとカオスの民族化 シリウス 国際社会と現代史

「民族浄化」とは何だったのか? グローバリゼーション下で起こったジェノサイドの原因を歴史のなから解明する。 四六判・450頁/3360円

異教徒から異人種へ

ヨーロッパにとっての 井村行子著 中東とユダヤ人

ヨーロッパ世界にとって、中東世界とはどのようなものだったのか。中世ヨーロッパの「異教徒」観から、反セム主義(反ユダヤ主義)の登場までを明らかにする。 四六判・200頁/2310円

先住民と国民国家

中央アメリカの グローバルヒストリー 小澤卓也著

「敗者は勝利をもたらすか? サンディニスタ、サパティスタ、そしてチャベスへ」国民国家に抑圧された先住民からの問いかけ。 四六判・240頁/2000円

核兵器と日米関係

アメリカの核不拡散外交と日本の選択 1990-1976 黒崎 輝著

「サントリイ学芸賞受賞」 A5判・320頁/5040円

有志舎

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-10、宝栄ビル303
TEL.03-3511-6085 / FAX.03-3511-8484
http://www18.ocn.ne.jp/~yushisha (表示価格は税込)

日本アメリカ史学会 第6回(通算34回)年次大会

期日: 2009年9月19日・20日(土・日)
会場: 名古屋大学

19日 10:30~12:40 自由論題A・B

14:00~17:30 大シンポジウム「労働民衆史の紡ぐ世界」

報告者: 野村達朗(愛知県立大学・名)、安武秀岳(愛知県立大学・名)、竹田有(奈良教育大学)

コメント: 横山良(甲南大学) 司会: 森脇由美子(三重大学)

17:30 総会など

20日 10:00~12:30 シンポジウムA「市民の境界—移民と先住民をめぐる排除/包摂」

報告者: 南川文里(神戸市外国語大学)、中野(水野)由美子(名古屋大学)

コメント: 山本明代(名古屋市立大学) 司会: 内田綾子(名古屋大学)

14:00~17:00 シンポジウムB「近世大西洋世界の諸相」

報告者: 川北稔(京都産業大学)、伏見岳志(慶応義塾大学)、和田光弘(名古屋大学)

コメント: 橋川健竜(東京大学) 司会: 森丈夫(福岡大学)

(以上、2009年5月1日現在。)

非会員の参加も歓迎! ただし、資料代として1000円頂戴します。会場での入会手続きも可能です。

詳細は、当学会ホームページ <http://www.jaah.jp/> をご覧ください。

イギリス・モダニズム女性大百科

全8巻、一挙復刻!

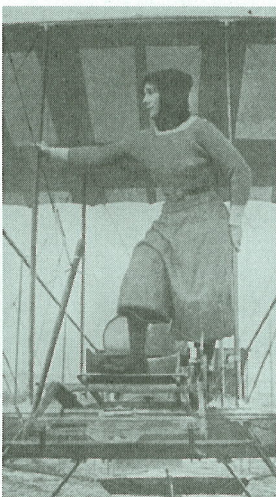
Every Woman's Encyclopædia in 8 Volumes

2009年6月刊行予定 刊行記念特価: ¥188,000-(本体) ISBN: 978-4-86166-123-5

総頁数: c.5,920pp. (図版、写真多数、カラー口絵入) 判型: A5判 (原本を約10%縮小)

底本: London: Amalgamated Press/Educational Book Co., c.1910-1912

- アーサー・ミー編『児童百科』*The Children's Encyclopedia* (1908-1910) が大成功を収めた版元が、対象を子どもから女性に変え、同様の方針 (A-Z でなく分野横断) のもと編集したテーマ別女性大百科。
- 『児童百科』完結後、1910年頃より隔週で刊行され、家庭の主婦に広く配布された分冊事典で、完結後、索引を付し出版された累積版 6,000 頁弱を、カラー図版含め完全復刻。
- 「ビートンの家庭の手引」など、ヴィクトリア朝の女性向けガイドが扱ったテーマを踏襲しつつも、その内容は新世紀に入り急速に変化するライフ・スタイルや合理的な生活・家事のための実用書を目指したモダン・リビング読本であり、また同時に、職業、法律、宗教、医学や海外、植民地での生活など、20世紀初頭の英国女性が身に着けるべき教養、知識を網羅したニュー・ウーマンのためのガイド。
- 内容は18の分野*に分類され、当時の女性向け実用書の執筆者や上流階級の女性が中心に執筆した、2,000件におよぶ歴大な記事からなる。
- 20世紀初頭の女性や中流家庭の生活スタイルや、アール・ヌーボーからアール・デコへと移行期の装飾・デザインを記録する貴重な図版や写真が満載。
- 巻末の累積索引で横断検索可能。
- 英国女性史のレファレンスとしてだけでなく、モダニズム期の文学、文化、芸術そして大衆文化研究の文献としても利用価値大。



*18の収録分野

- ◆ Woman's Home
- ◆ Woman's Beauty Book
- ◆ Children
- ◆ Woman's Work
- ◆ Marriage
- ◆ Woman's Medical Book
- ◆ The Lady of Quality
- ◆ Woman's Dress
- ◆ Needle Work
- ◆ Kitchen & Cookery
- ◆ The World of Women
- ◆ Woman's Law Book
- ◆ Woman in Love
- ◆ Woman and Religion
- ◆ The Arts
- ◆ Women in her Garden
- ◆ Woman's Pet

発行元: Edition Synapse (エディション・シナプス) 【カタログ呈】

〒101-0047 東京都千代田区内神田 2-8-5 山口ビル 3F Tel: 03(5296)9186 Fax: 03(3252)1822